

《論
説》

社会的亀裂と政党システム

—西ヨーロッパにおける社会構造・社会的分割・政党・支持者編成について—

古 田 雅 雄

目次

はじめに

第一章 亀裂概論

一、亀裂を構成するもの

二、亀裂の内容

三、亀裂強度の三次元

第二章 社会構造と社会的亀裂

一、社会的亀裂の視点の必要性

二、社会構造、社会的亀裂、政治の関係

三、媒介機関の重要性

第三章 社会的亀裂から政党システムへ

一、社会的亀裂の特質

二、社会的亀裂を考える視点

三、ロツカンの「凍結」テーゼ

第四章 社会的亀裂の再考

- 一、価値の亀裂論
 - 二、ロッキン後の亀裂理論
 - 三、社会構造の多次元的性格
- 第五章 政党選択の解釈
- 一、政党選択の社会構造
 - 二、社会的亀裂からの政党システムの概観
 - 三、社会的亀裂モデルの実証分析
- 第六章 現在の政党システム
- 一、伝統的亀裂構造の存続
 - 二、政党システムと社会的亀裂の関係
 - 三、社会的立場・属性と政党選択の傾向
- 第七章 近年の社会変動による効果
- 一、社会的亀裂の凋落の議論
 - 二、変動票の一般的傾向
 - 三、政党システムのタイプと社会的亀裂モデル
- 第八章 社会経済的变化と三段階モデル
- 一、三段階モデルの概要
 - 二、適応と急進的な競争
 - 三、包括政党現象
- 第九章 脱集中化と拡散化
- 一、第三段階の概要
 - 二、現在の有権者像
 - 三、変動をどう捉えるか
- 第一〇章 現在の政党システムと投票者編成
- 一、現在の有権者をめぐる状況

二、選挙変動と左―右次元の有効性

三、政党システムの変化と政治的安定

第二章 社会的亀裂―政党支持の確認

一、亀裂の意義

二、変化する社会構造

三、変化する投票行動

第三章 脱「凍結」化現象の証明

一、再編成に向けて？

二、脱編成に向けて？

三、変動と安定の評価

むすび

一、政党システムは変容したのか？

二、社会構造と媒介機関

三、伝統的社会的亀裂の存続と「新しい政治」

注

参考文献

はじめに

人間社会には人のもつ意識、見解、行為にはそれぞれ相違があり、人々は自己が思い描く様々な社会像を語り、かつそれにもとづき態度を表明する。確かに個々人の相違があると同時に、すべての人々がバラバラに存在し一人ひとりが別々に考え行動するわけではない。現実には人々の社会像は、完全に一致するとは言えないが、収斂する

のはほぼ必然的な傾向でもある。それでも、人々は、その収斂傾向を認めつつも、それぞれの自己の生活目線から社会を判断しようとするであろう。そこには社会全体の中で一人ひとりの生活である部分社会のもつ価値体系がそれに所属する個人を常に影響することには変わりはない。それは下位文化 (sub-culture) である。それは単に存在するだけでなく、社会を分割する、言い換えれば個人と個人、集団と集団、共同体と共同体を分け隔てる条件をなす亀裂システムである。これは社会的亀裂 (social cleavage) となる。もちろん、個人は行為者としてすでに実践の連続性の中で創造されたものを再構成する。ただ、行為者による操作や変動に対する制度・文化・システムからの抵抗力が強靱であることも認識しておかなければならない [ギデンズ、二〇一六：二〇六]。

西ヨーロッパ政党 (システム) が登場して一〇〇年以上になる。それは西ヨーロッパ政治の文脈では劇的に変化してきた [Donovan and Broughton, 1999: 273]。西ヨーロッパ政党 (システム) の起源は「近代」民主主義への移行期にあった。その民主主義は代表制を基本とし、社会的、イデオロギー的、政治的な規準で構造化され、そして国民国家の変遷と結びついている。今日、政党システム構造、社会構造、イデオロギー構造の関係は、政治論争とその「実施」の場にあったと言って差し支えない。実際、西ヨーロッパの国民・国家の統治は挑戦されてきた。有権者が社会変動に反応し、政党システムが重大な変化を経験してきた。

政党システムの変化に関する複雑な論点は、政府形成パターンの社会学的、イデオロギー的な視点に関係する。これらの関係を仲介する党エリートの役割が政党システムの進展を理解する基本である。また、政党や、それに属するブロック (陣営) の概念が社会的、イデオロギー的、政党組織的な戦術的表現、さらに理論的な概念の精査が考えなければならない。

現在の政党システムは、社会構造的な観点からすると、安定手段 (anchor) を喪失したかどうかは依然として不

明である。新たな現代の政党（システム）に呼応して出現するかどうかは議論すべきである。政党システムの変化は多面的な刷新と柔軟さの両方からなるマクロ政治的な過程として認められる。この過程は、秩序ある多元主義、「安定」的だが変動と結びつく政治的構築物（例：政党）のおかげで可能となる。この政治的構築物は、政党の基礎とする社会構造に定着するパターンの普及と、政党間競争を志向するパターンからなる。

第二次世界大戦後の情報化社会、社会的平等の実現、豊かな社会の出現はそういった下位文化の変容、場合によつて解体させる。その点で考えれば、ひとつの社会は継続すると見なせるのかであろうか。本論では社会的亀裂が現在でも有効性をもつかを考えておきたい。筆者は近年社会的亀裂の有効性を否定的に捉える見解には懐疑的である。もちろん、かつてのような機能を果たすかどうかについては検証を必要とするが、ここで問いたいのは、では本当に社会的亀裂が人々の態度・行動を測る規準でなく、無意味な存在にまであつたのであろうか、と言うことである。社会的亀裂を現在の政治で説明するうえで、その概念化から考えておきたい。本論は政党（システム）や投票行動に影響する（と思われる）「社会的亀裂」が提示する政治的文脈を理論的に検証する。

約半世紀間、西ヨーロッパでは政党と市民の間の連結は二つの前提にもとづいていた [Blondel and Thiebout, 2010: 1719]。第一に、この連結は政党が一九世紀後半から二〇世紀前半まで数一〇年間に「ナショナル」な存在になつてきたと論じられてきた。その過程において、このことは、政党組織の観点から述べれば、「大衆メンバーシップ政党 (mass membership party)」になつたことを意味する。ある政党とその支持者の連結が不可欠になつた「デベルジュ、一九七〇」。その組織形態が重要になつた。それにともなつて、第二はその政党への支持者側からの感情移入（一体感）が継続的にあることである。

第一の前提は政党の発展がより「現代」に至る際、政治システムはパーソナリティが社会構造とイデオロギーの

決定的な部分を占める状況を示唆することになった。第二の前提は大衆メンバーシップ政党では社会的亀裂を通じて生まれた有権者 (electorate) と結びつく [Lipset and Rokkan, 1967: 164]。具体的に支持者と政党の結びつきは、主要な社会集団への所属へのある種独特の感情 (sentiment) にある。それは紐帯関係と言い換えてもよい。とりわけ、言語・エスニシティ、都市か農村か、宗教、そして階級への所属への感情移入が社会的亀裂の形を取って特定の政党支持となる。この見解は基本的には二〇世紀半ばまで揺るぎようがなかった [Katz and Mair, 1994: 45]。現在のフォーマルな意味では、政党に「所属」する選挙民 (elector) の割合は凋落傾向にあるとしても、大衆メンバーシップ政党の概念が「現在まで有効である限りは」という条件付で維持されてきた。

ところが、そのことが疑問視されるようになった。「大衆メンバーシップ政党」を支持するという表現は、大ざっぱに述べれば実際にある亀裂 (＝下位文化) と一致するとみなされ続けた。だから、伝統的な社会的亀裂が西ヨーロッパの人々が政党を説明する理論は「挑戦」を受けなかった。ところが一九七〇年代以降、「古典」的な社会的亀裂が政党帰属を説明する範囲・程度に継続的な動揺 (unease) が生じたと言われ始めた。この動揺は宗教や階級のような社会的亀裂の役割が有権者の投票行動に影響しなくなったとする。そう指摘する見解が多数提示されるようになった [Wolinetz, 1988; Inglehart, 1977; Nieuwbeerta, 1995; Oskanson, 2005: 84-105]。そのような亀裂の有効性に疑問をもつ研究は西ヨーロッパの政治風景の解釈をこれまでとは異なったものと主張する。

西ヨーロッパ各国の「中核」政党 (core party) は、次々と現われる新しい挑戦、状況、環境に順応し、急速な社会経済的な変化に対応しかつ刷新する。これらの変化は、政治分野に過去の政党システムを特徴づけた、安定した亀裂構造と忠実な投票者からなる「世界」よりも、より不確実、ほぼ予測不可能な「世界」に政党と有権者を追いつかむのであろうか [Broughton and Donovan, 1999a: 1]。

第一章 亀裂概論

一、亀裂を構成するものとは何か

亀裂 (cleavage) は「エスニシティやイデオロギーの方針にそって、政治システム内の分裂 (splitting) を説明するために、地質学から借用された専門用語 (term)」[McLean, 1996: 76] である。

社会的亀裂は、とりわけ投票行動との関連において、また政党システムの形成と機能との関連において、政治分析には不可欠な概念である。論者によって説明の多少のちがいはあっても、個人の社会的な属性に基づいて、社会内の集団間の分割 (division) を明示する概念である [Robertson, 1993: 71]。社会的亀裂は、客観的な社会的属性 (階級、宗教、人種、言語、地域) の相違 (である文化、イデオロギー、志向) への主観的な認識で編成され、社会の中で伝統的に機能し人々の立場を客観的に区分する [Newton, Deth, 2010: 24]。ここには政治に対して自らが属する社会の一部である下位社会のもつ意味がある。

「政治的亀裂 (political cleavage)」という言葉がある。それは政治組織が支持を動員する目的に際し、政治的な相違を示す根拠となる。社会的亀裂が集団や地域を分裂させる要素とみなされるなら、しばしば政治的な立場を異にすることを表す用語である [Newton, Deth, 2010: 112]。

リーとテイラーによれば、亀裂は共同体や下位共同体の構成員をグループ分けする規準であり、有効な亀裂は特定の時間と場所での政治的相違を有する社会集団に分ける。ひとつの亀裂は社会構造に組み込まれた、持続的な紛争と理解される [Pappi, 1973: 493]。これらの亀裂は次の三つに区分される [Rae and Taylor, 1970]。

① 属性的 (ascriptive) 亀裂や「特性 (trait)」亀裂 (例：人種、カースト)

表1：3つの連続線の亀裂

規準タイプ（亀裂の高低）	低	← 亀裂 →	高
属性	同質性	← →	異質性
態度	一致	← →	不一致
行為	凝集性	← →	断片性

②態度的 (attitudinal) 亀裂や「意見 (opinion)」亀裂 (例：イデオロギー、選好 (preference))。

③行為的 (behavioral) 亀裂や「行動 (act)」亀裂 (例：投票や組織メンバーシップを通じて引き出されるもの)。

個人は (社会的) 属性、態度、行為の亀裂によつて他者と自分自身を区別する。この亀裂の三分は別の用語でも表現されることもある。属性による亀裂は共同体の「異質性 (heterogeneity)」や「同質性 (homogeneity)」を決定する。態度による亀裂は共同体の「一致 (consensus)」と「不一致 (disconsensus)」の範囲を決定する。行為による亀裂は共同体の「凝集性 (cohesion)」と「断片性 (fractionalization)」を決定する。これらの二分法のそれぞれが連続線上の両極を特徴づける。したがって、人々は、共同体での同質性、一致、凝集性の範囲に依じて、類似する属性、態度、行為を配置する範囲を考える (表1参照)。

三タイプの連続線上では、現実には属性、態度、行為の間を明確に区別できるとはかぎらない。例えば宗教亀裂を考えると、ある個人は宗教への関わりを属性的特性、態度の複合性、集会に参加するような行為と明確に区別するわけではない。他の事例でも、ある亀裂が属性、態度、行為のどの領域にあるのかを熟慮する必要がある。したがって、同質性—異質性、一致—不一致、凝集性—断片性という両極にある連続線上のいずれかで編成される。それが有する点が亀裂に関係するとき、次の疑問が生じる。

疑問①どのくらい亀裂が下位単位 (subgroup) に分けるのか。

疑問②どのようにこれらの人々は下位単位の集団に配分されるのか。

疑問③どのような集中度で各人は自らの下位単位に固守するのか。

疑問④のようにひとつの亀裂に関する個人の立場は別の亀裂に関する立場に関係するのか。

以上の疑問から、亀裂と亀裂システムの五つの固有性 (Property) の回答を得られる。五つの固有性は政治分野で役割を果たす。

固有性①結晶化 (crystallization) : 共同体のどの割合がある亀裂に関する認知に関わるのか。結晶化は亀裂の外部領域を設ける。言い換えれば、外部と内部の境界線を設ける。

固有性②断片化 (fragmentation) : どの程度までこの亀裂は社会全体の構成員を下位単位に区分するのか。より正確に述べれば、複数の下位単位に属する構成員とにある亀裂をめぐってそれぞれの立場から争うのか、それが不在なのか。

固有性③断片化の集中度 (intensity of fragmentation) : どのような集中度の組み合わせがある亀裂によって共同体構成員に設けるのか。

固有性④重層度 (degree of overlap) : どの範囲まで共同体のひとつに結晶化された亀裂が他の結晶化された亀裂と重なるか、それが生じないのか。

固有性⑤交叉程度 (degree of cross-cutting) : どの範囲まで二つ (それ以上) の亀裂がそれぞれの分割線にそって各共同体を分けるのか。もつと正確に述べれば、どの範囲まである亀裂と別の亀裂とが統合されるか、またその反対であるかどうか。

亀裂と亀裂システムの五つの固有性は概念的な分析を提供できる。つまり、どのくらい結晶化するか、どの範囲の断片化があるか、どのような断片化が集中するのか、どのくらい重層化するのか、どの程度の交叉があるのか、である。

二、亀裂の内容

亀裂は投票行動を条件づける強制力 (force) と認められる。選挙選択の順応性 (elasticity) を供給する限度を示す「拘束力」と考えられる。[Mair and Bartolini, 1990: 212-220]。

ある国や時期の亀裂システムが社会構造に深く定着していれば、有権者は投票行動の柔軟性が弱くなる。つまり、有権者の投票先が固定的、持続的となり、ある政党は該当する亀裂にもとづいて安定した支持を確保できる。言い換えれば、選挙での不安定が低下すると亀裂の影響が弱体化したとする仮説が成り立つ。この仮説を検証する前に、亀裂の概念を明確にしておく必要がある。「国民一人ひとりの判断にもとづく一票」という掛け声は、亀裂を投票の柔軟性に結びつける考えではあるが、そう額面通りに受け取られない。個人とその取り巻く環境を考える視点は重要である。さらにこの場合考えるべきは、選挙の支持における不安定を亀裂に関連するかどうか亀裂強度を考察する必要がある。

亀裂の概念はあいまいなままである。それは、ほぼ分析的な意味では、一致点を見出したいためである [Zuckerman, 1975: 231-248; Zuckerman, 1982: 131-141]。例えば、R・ダールは、政治的亀裂を政治的な態度や行為の条件で定義する。したがって、その概念では社会構造の変数との結びつきから解放する。しかし、政治的対立 (opposition) や政治的分割 (division) のような概念と社会的亀裂のそれと区別できなくする [Dahl, 1966a: 367-386]。概念が「社会的」という用語をわざわざ使用することの意味が表す「何か」を示すことができなくなる。仮に亀裂が社会的分割の政治的表現の条件で定義されるなら、集団の一体感のための基礎として「客観的利益」は明確には表現されにくい。紛争という内容の導入が社会的な対立、衝突、紛争の概念と社会的亀裂の概念を区別するが、その社会的な対立・衝

突・紛争が組織的、政治的な構造に根づいた存在にまでなるかどうか、あるいは産業社会から引きずった性格であるかを識別できるものとなっているかどうかである。この社会的な文脈は簡単に（社会的）亀裂を定義しづらくなる。

論点は、伝統的な亀裂と異なる「文化的」とみなされる亀裂である。言い換えれば、「新しい政治」が関係するかぎり、それは亀裂にそったひとつのロケーションを定義づける人口統計学的な属性よりも信念のセットとなってしまう [Dalton, Flanagan, and Beck, 1984]。そのような視点が成立するならば、例えば階級のような伝統的な亀裂の規範・イデオロギー的な属性を無視することになる。文化・イデオロギー的要因は、階級のような社会経済状況や人口統計学の観点から亀裂を取り扱えるが、「新しい政治」の亀裂（例：物質主義対脱物質主義）は集団が根づくルーツを放置することになる。

一方で「価値」亀裂、他方で「経済」亀裂の間の対立は不明確になる。価値の相違と対立がすべての亀裂に存続する。例えば、H・エクシュタインは「分節的な亀裂 (segmental cleavage)」と定義するものを「文化的不同意 (cultural disagreement) や「特定の不同意 (specific disagreement) と区別する [Eckstein, 1966]。前者の概念は社会階級を反映する政治的分割であり、後者の概念は政治（や決定）を選択する相違である。亀裂という用語の使用は社会構造と政治秩序の連結にもとづく意味があるが、その区別は「文化的亀裂」の意味と類似する問題となる。例えば、階級や都市・農村のそれぞれの亀裂が政治の世界の解釈を具体化する。それゆえ、文化的不同意と特定の不同意は分節的な亀裂とは別タイプを表わす。もちろん、政治上での同意・不同意を認識できるが、文化・イデオロギーの分割は分節的亀裂の中に埋め込まれた要素として存在する。

E・アラルトとP・ペゾネンは「構造的亀裂」と「非構造的亀裂」を区別させる [Allardt and Pesonen, 1967: 325-

366]。両者の区別では、「構造的亀裂」が一般化せず、「凝集性 (cohesion)」と「連帯 (solidarity)」によって特徴づけられる社会集団の区別に制約が出てくる。彼らの亀裂概念は、社会的属性 (differentiation) に加えて、組織 (凝集) 的な属性と文化 (団結) 的な属性を採用する。

以上から、亀裂とは何かを考える場合、次の三側面が概念上の中心にある。

① 経験的要素 (empirical element) は概念の経験的な指示物 (対象) を識別する。そして、それは社会構造によって定義づけられる。

② 規範的要素 (normative element) はアイデンティティと役割の意味を経験的な要素に提供する価値と信念のセットである。それは社会集団に所属する個人の自己意識に投影する。

③ 組織的・行動的要素 (organizational/behavioral element) は、例えば利益集団、結社、政党のように、社会において個々の組織が有する相互作用、制度、政策、方針などのセットである。それは亀裂の具体化として展開する。この三側面はリーとテイラーの亀裂論でも展開される [Rae and Taylor, 1970: 1-3]。亀裂は、共同体や下位共同体において特定の時間と空間では、重要な政治的相違をもつ集団に分割する規準を設定する。

三側面を組み合わせた「亀裂」はある政体 (polity) 内に分割線を引く。客観的な社会的な区別や、イデオロギー、政治、組織の分割を引用される際に「亀裂」という概念は注意して適用すべきである。社会構造的、規範的、文化的、政治的、組織的な要素が個人の態度や行為を形成する際に、それぞれの分割要素が相互に補強する役割を演じるので、亀裂はあらゆる分割と称する分野で使用する概念としてよりも、むしろ特定種類を明確にする用語として分割を扱うべきである。例えば、AがBの見解と衝突する程度では、亀裂として認知できな「区別線」が存在するだけである。それゆえ、亀裂とは定義づけられない政治的、イデオロギー的な区別であるなら、亀裂、とりわけ

「社会的」を冠した亀裂は、厳密な条件において定義するならば、それほど適用できる事例は多くない [Mair and Bartolini, 1990:216]。

要するに、亀裂は社会関係の閉鎖形態 (form of closure of social relationship) とみなされなければならない。そうではないなら、社会的亀裂は社会構造が提供する基礎的な部分から離反することになる。

しかし、どのようにこの観点は適用可能なのか。例えば、何が階級と階級を基礎とした亀裂の間を区別するのか。何が宗教性の範囲と宗教的な人々の共同体を宗教が基礎となる亀裂と区別できるのか。そこで、亀裂は次の三条件があることを確認しなければならない [Bartolini and Mair, 1990: 216-220]。

① 歴史的条件 (historical term) では、亀裂の社会構造的な枠組みは様々な歴史的現象の所産である。

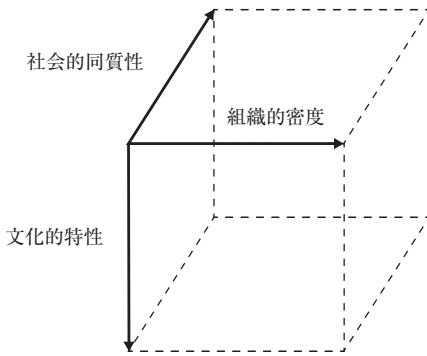
② ある亀裂の社会的基礎への帰属 (意識の条件) では、変化する属性が枠組みづけるので、亀裂そのものが構成するより、もっと流動的になる (と思われる) 社会的基礎が社会関係の様々な要素と組み合わせることで集団化した形態で現われる。

③ 亀裂の社会的基礎の条件は本来、亀裂自体は非組織的な用語である。例えば、階級亀裂の場合、労働者の組合・団体、政党すべてのそのような媒介機関は階級自身の組織ではない。宗教亀裂でも同様である。むしろ、それは亀裂の制度的な構成要素 (institutional component) である。

要するに、亀裂の性格は歴史的 (言い換えれば社会構造的) な所産であり、当然に国ごと特有な性格・存在・形態であり、該当する亀裂だけでなく、その亀裂のもつ状況・環境などが大きく亀裂の存在を左右する。

三、亀裂強度の三次元

仮にある時間と空間での亀裂の性格と強度の分類を考えるなら、亀裂の強度を測る三次元の理解を必要とする。第一次元は社会的同質性 (social homogeneity)、第二次元は文化的特異性 (cultural distinctiveness)、第三次元は組織的密度 (organizational density) である。第三次元の組織的密度は他の次元に関連することを仮定する。実際、第三次元の適切な測定は、ある集団の意識とアイデンティティ (同質性と特異性) を特徴づける諸価値の現実の強度と拡散に関する歴史的、比較的情報の分析を要する。



出典、Bartolini and Mair, 1990: 225

図1：亀裂強度の三次元

亀裂強度の社会的同質性は分節化 (segmentation) の条件で論じられる [cf. Lorwin, 1971; Rokkan, 1970; Lijphart, 1984]。分節化の現象は、亀裂が非常に明確に仕切られ下位の共同体を形成するので、他の共同体からの影響力は浸透しにくい状態である。戦前から変動が激しくなったと言われる1970年代後半までの各国の分節化と選挙の不安定化 (固定票から浮動票の増加) を図式化すれば、表2のような形で表せる。分節化が固定化すると、その共同体・下位社会からの支持が安定する [Bartolini and Mair, 1990: 226-243]。表2は縦軸に選挙不安定、横軸に分節化の二つの次元からの各国の配置したものである。表2から四つに分類される。

①表2で空白の部分は特定の組み合わせができない高レベルの選挙

表2：分節化と選挙不安定（1918 - 1985）

	分節化の程度		
	高	中	低
低	オーストリア スイス	フィンランド	スウェーデン イギリス
中	オランダ ベルギー		ノルウェー デンマーク
高		イタリア ドイツ フランス	アイルランド

出典、Bartolini and Mair, 1990: 227の一部を省略

変動がありうる分節化されない社会である。

②分節化が高い国…実際上の分節化が著しい傾向をもった国家である。当然、選挙は分節化された下位文化に応じた投票が固定化する。これらの事例の中には多極共存型社会（ベルギー、オランダ、スイス）や「陣営（Lager）型社会（オーストリア）」がある。

③分節化が中程度の国…分節化の程度がそれほどでないが、選挙支持の安定度は拡散気味の社会である（ドイツ、フィンランド、イタリア、フランス）。G・サルトーリの政党システムの分類中では分極的多党システムを経験した国々である。

④分節化が低い国…分節化は低く、そのため人々を捕捉できないため選挙では、不安定な場合と安定する社会がある（スウェーデン、イギリス、ノルウェー、デンマーク、アイルランド）。

次に文化的特異性を考えておこう。亀裂強度の構造的な側面はある国の文化的異質性でもある。特に、言語と宗教の集団化と下位文化の亀裂の大きさである。西ヨーロッパの少数言語と宗教の異質性の関係分析によつて分節化と選挙不安定の結びつきが証明される [Flora, 1974; Urwin, 1980: 193-194]。少数言語の異質性では、少数言語使用者が存在する国（ベルギー、フィンランド、スイス、イギリス）を人口の大部分が同質性ある国と区分する。宗教的異質性も同様な規準をとる。

非階級線にもとづく分節化度が高ければ、階級亀裂が閉鎖的性格となる傾向がある。そのような閉鎖性と強度は本来、自己防衛的であり、前産業的構造の性格から派生する、と考えられる。非階級線にそった一体化は階級にもとづく左翼政党的選挙動員では安定するが、それは制限的である。

文化的な同質性が階級亀裂の強度と結合する。より異質な国が階級の動員の閉鎖性によって性格づけられる。一方で文化的同質性、他方で階級亀裂の境界を交叉する選挙動員数との関係が評価されなければならない。社会の成り立ち（国家建設と国民形成）が文化的異質性と関係する。この関係は文化的異質性の程度を特徴づける。亀裂線を交叉する動員が多様であるなら、文化的異質性の高さが証明される。社会的同質性や文化的特異性では、亀裂強度（この場合、選挙不安定）の説明には限度がある。

言語、宗教、階級による社会の断片化は二項対立的であるので、すべての国で有効である。これは社会的同質性と文化的特異性からの説明である。図1で示せば、図の左側の平面を表わす。もちろん、実態はそれほど単純化できない。この二次元は様々な種類の亀裂（言語、宗教、階級）には有意義であると同時に、一国的な特徴を表わす指標となる。その結果、それが政党組織に見られる。例えば、図1の文化的異質性と組織的密度の二次元が創造する空間では好対照な立場を示す二カ国がある。ひとつは分節化と選挙不安定がともに低いスウェーデンであり、もうひとつは分節化が中程度でありながら選挙不安定が高いフランスである [Bartolini and Mair: 1990: 238]。

スウェーデンは少数言語や宗教の基礎では異質な（しかし分節化では低い）であり、選挙の不安定が低い事例である。フランスは言語と宗教では同質的であるが、選挙不安定が高い事例である。この例外的な二国は、選挙不安定の条件では、対照的な分節化の事例である。この説明に組織的密度の次元を加える必要がある。組織的密度の導入はもっと精確に亀裂強度を表わせる。両例の場合、スウェーデンの組織密度は高く、フランスでは低いのが特徴で

表3：文化的、組織的な分節化と選挙不安定（1918 - 1985）

	分節化の程度		
	高	中	低
	スイス オーストリア スウェーデン	イギリス	フィンランド
	ベルギー	ノルウェー オランダ デンマーク	
選挙の不安定			イタリア アイルランド フランス
		ドイツ	

出典、Bartolini and Mair, 1990: 242の一部を省略

ある。個々の選挙不安定や分節化の三つの範疇（高・中・低）との関係だけではなく、別の組織密度の測定条件で亀裂強度の再範疇化が考えられる。組織的密度次元の導入は分節化と選挙不安定の結合を高める役割を果たし、亀裂強度をより有意義に説明できる [Bartolini and Mair, 1990: 242-243]。この指標を加えると、分節化の高低は変動票の高低と比例する。

第三に組織密度の次元を考えておこう。組織的な観点から、亀裂の強度と分節化の関係は団体による回路（corporate channel）と政党組織の関係から特定の組織活動の社会構造への内的連結が理解できる [Rokkan, 1977: 565]。

三次元による亀裂強度は様々な国と各段階を特徴づける組織的密度を説明する。組織的密度は、個々の有権者や集団が組織的メンバーシップの立場を介して政党と結びつく。または、有権者は選挙市場の外から関与する選挙動員機関、つまり外部団体（例：利益集団）の組織的メンバーシップとしてある政党支持と結びつく。そうすると、有権者の組織的カプセル化が強いと、投票選択を変更する傾向が著しく低下する。この文脈では、三点が大切である。第一に有権者の政党の組織的ネットワークの密度に関係する。黨員、活動家、党職員、特定の傘下集団は組織的な単位と空間的な単位では重大な意味がある。ただし、これは政党が大衆メンバーシップ政党であることを前提とする。第二

に支持者数の固定化である。例えば、左翼陣営での労働組合員数である。労働組合員や労働者階級は左翼政党と密接な関係にあり、左翼政党に常に投票する、と推定できる。第三に組織構成員が全人口中にどのくらいの割合を占めるかである。例えば、労働組合が国家の全労働力に対してどの程度の割合であるかである。

表2の分節化と選挙不安定に組織密度を加え三次元で立体的により精緻な各国の亀裂強度が表3において整理してある。

第二章 社会構造と社会的亀裂

一、社会的亀裂の視点の必要性

社会には、階級、宗教、言語、人種、性という分割する線にそって人と人、集団と集団、共同体と共同体とを分け隔てる。社会的亀裂のパターン、相互関連性、特性、数と性格は、政党（システム）の競争政治の戦線（battle line）と、そこから生じる対立・協調など政治システムの安定・機能に影響する。現在、多くの民主国において、政党と有権者の固定した編成（alignment）が再編成（realignment）か脱編成（dealignment）かのいずれか（または部分的に）進行中である、とよく説明される。社会的亀裂は人々の政治的態度を解明する際には依然として有効な概念である。ほとんどの政党はひとつまたはそれ以上の亀裂に条件づけられ、諸政党の対立関係を規定する。社会がある種の亀裂パターンに基づいて構成されるとするなら、それによって政治生活はより複雑な様相を帯びるように考えられ、また別の亀裂が支配的であるなら、それまでの統治を正当化できなくなる。いわば社会的亀裂から成立する政党（システム）を考察することによって、当該国の社会・政治状況を理解できる。例えば、人種や宗教の亀裂が強いなら、階級亀裂よりも交渉や妥協によって管理するのが困難になる。なぜなら、それらが絶対的、非妥協的な要求を

生み出す可能性となるからである。亀裂間の相互作用は重要である。それらが相互に補強するなら、その結果、ひとつの亀裂にそって対立する二人、あるいは二集団が第二の亀裂線にそってさらに対立を深刻化するし、場合によっては反対に複数の亀裂が交叉して緩和することもありうる。その効果によって政治的軋轢が強くなったり弱くなったりする。社会的紛争と政党システムと、政治的競争を通じて適切な社会的利益・集団の関係が社会構造に見いだされる [Eith・Mielke, 2001: 11-15]。

「交叉」的な亀裂が見出されるところでは、強烈な衝突が回避される。仮に争点が言語であるとき、宗教紛争での当事者は同じ（あるいは反対の）立場にあることを認識し自らの立場を確認できる [cf. Broughton and Napel, 2005a: 1-2]。例えば、ベルギーでの言語政治が緊張を引き起こすひとつの理由、つまり社会や政治の不安定は、カトリックと反教権主義の対立や、経済をめぐる利害関係に符合するからである。対照的に、第二次世界大戦後のイタリアでは、カトリック政党であるキリスト教民主主義勢力は信仰をもって、多くの労働者票を獲得してきた。一方、政治に教権支配を嫌う中産階級の多くの投票者は非カトリック的な中道・左翼的な政党へ投票することになる。階級亀裂が信仰と世俗との亀裂の立場に対応していないという事実に基づくからである。

ある社会内の亀裂数は多党システムになるかどうかと関係する。したがって、不安定とみなされやすい連合政権による統治になる（「デヴルジェの法則」）。それは安定した一党政権を成立させない事情を生み出す。その種のパターンが亀裂間で展開されるなら、もちろん選挙制度とも関係するが、特に二次的な亀裂を通じておそらく複雑になると予測される立場でも、亀裂間の対立も政治システムの安定化と単純化に向かうこともある。例えば、オランダの宗教的な亀裂からでは、ひとつのカトリック系政党、二つのプロテスタント系政党が存在する。一九八〇年にひとつのキリスト教民主主義政党を結成するために三党（カトリック人民党、反革命党、キリスト教歴史同盟）がキリスト教

民主同盟（CDA）に合併した。他の諸政党も階級線にそって合同した。このことを一般論として解説するならば、現在、社会的亀裂の意義は低下しているからだと論じられる。だが、亀裂の重要性を理解すれば社会構造が変化したからといって、亀裂の意義を放置してよいものかどうか。亀裂はどのような社会や時代にあっても存在し、消滅せずにその社会や時代の下位社会として適合するはずである。

多くの亀裂は下位文化から社会集団を形成し、それに所属する人々を意識的、無意識的に同一のアイデンティティを育成する。これは宗教的亀裂によって分裂した北アイルランドの事例で証明される。そこではカトリック教徒か、無神論者か、プロテスタント無教会派信者かのいずれに所属するかをいまでも重視する政治文化が存続する。亀裂はその起源において歴史に深く根づいている。ある国民の歴史的な発展と結びつき、今後の歴史的展開においても生き延びている。

二、社会構造、社会的亀裂、政治との関係

社会は、各集団のメンバーが相互関係・交流のもと、各メンバーの社会的な地位と役割とに応じて営む行動の交流の反復から成立する「古屋野、一九五八・三四九」。私たちが社会を定義づけるものは何であろうか。機能主義的アプローチの視点では、社会は「説明できる継続的な構造（defisable, consistent structure）」に結晶化された「不変的な交流（permanent transaction）」のセットである。簡単に述べれば、それは「制度（institution）」である。ある制度は、制度が創造される際に生じる「感情（sentiment）」や「目的（purpose）」が消えた後でも、残存する「Martin, 2009: 1」。

社会構造（social structure, soziale Struktur, structure sociale）は、社会において人間の相互関係を識別できる枠組み、

形態、具体化のパターンである [Fontana Dictionary: 584]、とみなされる。特定の活動目的とその活動の帰結とその両方は、社会の主要要素・制度から分析される。社会には文化、経済、政治、法、軍、宗教、教育、家族などがある。これらは社会制度の形をとって社会内部に埋め込まれる。そして、その制度は、家族、宗教、法、所有関係、権威などと結びつく。集団に属する個人は様々な機能、役割、地位などを自己のあるべき「規範」とし遵守した行動を採用する [vgl. Reckwitz, 1997: 179, 184]。したがって、ある社会構造は制度が創造した特定の役割、そして役割のセットともみなすことができる。それらを個々の人間が履行することで社会秩序が安定する。その際、考慮すべきは社会の基本的な秩序づける原理はその社会（場合によっては下位社会）の文化である。社会システムにとって、文化、構造、パーソナリティの三者が重要な変数であるが、文化が常に構造とパーソナリティを規定する。文化的変数は社会システムをコントロールする要素である。構造は期待 (expectation) として文化の具体化であり、パーソナリティは社会化 (socialization) を介して文化の無意識の摂取 (introjection) である。そうすると、アクターの主観的観念 (conception) と行動パターンという文化と社会構造との間の区別が存在することは理解できても、その区別を示すのは困難である [Martin, 2009: 2, 6]。

社会構造は、ある方法で行動する規範的な責任を理解するので、相互作用の中の規則性を考慮しなければならぬ [Martin, 2009: 7]。要するに、社会構造の焦点は相互作用の構造である。その中でネットワークは「関係 (relation)」と「紐帯 (tie)」と言い換えることは可能である。もちろん、関係や紐帯は社会行動なしには成立しない。物事が規則的な等価物 (equivalence) が行動を案内する範囲・限度 (extent) まで発展した際、そのとき、私たちは構造でなく制度にそくして行動する。したがって、社会構造はある個人と特定の他人とを結びつける相互作用のパターンである [Martin, 2009: 7, 10, 11]。したがって、構造は構造化 (Strukturierung) の過程の中の存在する [Reckwitz, 1997:

1827°

社会の制度と構造は事実上の秩序 (order) を表現するのである。つまり、個々のメンバーの精神 (mind) の間に分配された知識でもある。ところが、個々人の知識は部分的で不完全でもある。個人は社会制度を構成する規範のいくつかを定式化できるかもしれないが、これらは行動のため現実的動機づけを形成するわけではない。個々人は、個人が社会実践の根拠を社会制度で説明する。それはコード化された規範であるが、もちろん個人は額面通りにその通りに従うわけではない。

個人はどのように人と人との交流 (transaction) において志向する目的 (meaning) に折り合いをつけるかに集中する。個人はコミュニケーションが不可能にならず交流状況をはっきりさせる「推論的な方法 (interpretative procedure)」に関心がある。制度的と関係の構造は、私たちが「埋め込まれた構造 (embodied structure)」と呼びもので理解される。関係的と制度的な構造が人々の自己に有用な知識の基礎をなす境遇の反応に位置づけたことに示される。この知識は別個の「事実」と「思考」のセットを構成するわけではない。しかし、この知識は個々人にその行動の意向 (disposition) を構造化し、実地的な適性 (competence) と能力 (ability) である規則づけられた社会行動を生み出す [López and Scott, 2000: 88-90]。社会構造は個人が社会状況を明確にし、調整された行動を創造するために配置する、無意識なルールと方法に存在する。社会構造は単に制度や関係の一群の配置ではない。人々が社会構造を想定するかぎり、ある価値の存在を意識する。アクターが関係的、制度的パターンを繰り返す際に採用するルールと資源のシステムは強調される [López and Scott, 2000: 94]。

このようなパターンは、地域 (下位) 社会を統合する機能としても存在し、常にひとつの秩序としてメンバーの行動を規定し、ひいては個人のパーソナリティにも影響を及ぼす。すなわち、人々は一定の社会構造のもとに生活

を営むので、一方においてその占める地位と役割にもとづく思考・態度行動を求められるとともに、他方において習俗、モーレス、信仰などからなる文化の複合体によってもその行動が規定される。社会からの個々人への要請は、（実際には社会全体を構成する社会の一部からではあるが）個々人のパーソナリティの形成にも反映する。もちろん反対に、社会構造はその構成員の社会的態度・行為によっても規定され、絶えず変化するが、また教育や制裁など人間の創造した制度によって、社会秩序の維持・存続が図られる。社会構造は、全体を構成する諸部分の社会的性格を反映するとともに、人間の社会的行為の複合体と理解できる（ジンメル、一九七九・第三章）。

S・M・リップセットは、『政治における人間』[Jipset, 1960: 220]において、「あらゆる近代民主国家では、様々な集団間の紛争は、階級闘争の民主的移行に関して、それが政党を通じて反映されている」と述べたことがある、とP・メアは引用する[Mair, 2006: 371-375]。それを単純化して述べれば、政党が下層階級、中産階級、上層階級のいずれかの階級にもとづいて、労働者階級政党かブルジョア政党かが構成される。近代化論的発想に立てば、民主化に向けての階級闘争は回避したい。もちろん、社会において集団間の紛争は階級闘争だけではない。リップセットとS・ロツカンがヨーロッパ政治発展モデルにおいて精緻化するように、階級間対立よりも、宗教、文化、地域といった形で、その社会の分裂状態（下位文化間対立の先鋭化によって）が政治的分割（political divide）に大きく影響する[Jipset and Rokkan, 1967]。さらに、それに加わる形で、文化や階級の対立が政治化される。このような分割状態が社会内で集団化し固定化するとき、その分割は社会的亀裂として機能することがある。民主国家内では、亀裂は様々なレベルと強度において政治に（もっと正確に述べれば政党という形をとって）反映する。例えば、アイルランドでは、階級対立は、アイルランドかイギリスかのいずれに属するかというナショナリズムに関して政治化してきた[Mair, 1992]。アイルランドでの一九一八年選挙では、労働党はナショナリスト運動を支持する際に、新しい有権者

を獲得するのに「傍観者」的存在であった。そのためか、同党は政治システムにおいて中心的な位置づけから離れている。つまり、社会構造にある社会的亀裂から生じる下位文化にいる潜在的支持者をいかに組織化できるかで支持者と政党の連結を固定化できる。

アメリカでの政党政治の領域では、上記のヨーロッパと同じことが生じることはない。確かに、階級と亀裂はアメリカ社会に存在するし、政治に反映するとしても、民主党と共和党の間の党派的支持の一部にあるだけである。労働者階級の支持は第二次世界大戦後の民主連合 (Democratic Coalition) [Hout et al., 1999] による政権樹立と維持には大きな役割を果たした。ただ、階級という亀裂から社会主義政党や社会民主主義政党による動員が不在という形態となる [Lipset and Marks, 2000]。その現象はヨーロッパ諸国と対照的な姿である。オランダやスイスのような国々では、階級対立が政党選択を決定的にする。それは分極化によってできた極ごとを架橋するには成功せず、他の分割への移行に際して示される現象は重要である。フランスやイタリアでは、階級対立は政治的な対抗関係 (opposition) を示す源泉のひとつであるだけでなく、最も急進的な別のひとつにもなる。両国では、共産党は競争政治において、組織労働者階級の利益を代表するという優位を占めたことがある。

政治と政党についての選択は社会的対立が映し出されるとすれば、亀裂がストレートに政党に移行するという、単純で直接的な過程と想定されるかもしれない。しかし現実には複雑な形態をとる。オランダ、スイス、ベルギー、イタリアでは、文化（宗教・言語）的な亀裂はきわめて重要である。もちろん、亀裂―政党の関係は自動的に形成されるものではない。それは時代や場所ごとに異なる。だから、そういった関係はある部分、ある時代、ある社会だけにしか成立しないこともある。

三、媒介機関の重要性

階級による分割は通常、政治の場面に移し替えられるが、必ずしもどの国でも同じ状態になるとはかぎらない。宗教的分裂は時折、政治に移し替えられるとしても、現実にはすべての場合が同一の形状になるとは結論づけられない。そして、いつも同じ強度でもない。例えば、ジェンダーの対立はあらゆる社会では重要な分割であるとしても、これもすべての国の政治に映し出されるわけではない。

では、何が各国ごとの多様な形態に至る事情となるのであろうか。サルトリーは、その形態の帰結は政治に表現しようとする人々 (translator)、それに実際に信念をもって行動する人々 (persuader) の努力次第であることを指摘する。言い換えれば、社会にある無数の分割が亀裂にという形で政治現象として固定化するのは、第一次媒介機関 (primary agency) が有効に機能し、それらの利害関係を政治化するのは政党 (または別形態の政治組織) に伝達できるかどうかである。政党政治は亀裂に基づく利害を促進する [Sartori, 1990: 169]。例えば、階級を亀裂の規準として取り上げれば、次のように述べることができる。

政党は「客観的」な社会経済的な条件ではなく、「主観的」な社会経済的な自己認識において成立する。だが、政党が社会経済条件だけから派生するのなら、このことは階級という社会経済のあり様よりも、その政治目的をどのように達成するかの主体的な動機・意思、つまり自己の社会認識が重要となる。その際に、社会 (の一部) における政党への要求 (demand) と供給 (supply) という期待が存在する。例えば、階級亀裂と社会主義政党との間を媒介するのは労働者組織 (通常は労働組合) であり、その結果、社会主義政党が労働者の利益を選挙において代弁する。分割—亀裂—組織・集団—政党という図式は選挙という政治現象に現われる。

同様な事情は他の分割、例えば教会やその傘下組織にも当てはまる。これはカトリック・アクションで表現され

ることがある。これらの制度・組織は、宗教的意味から支持者を動員する過程中、優位にある政党であればすぐにも弾みをつけて発展し、初期の創設者の意図よりも選挙編成にある宗教的な分割をはるかに明確に表明できる。S・N・カルバスは、宗教政党が歴史的にすでに存在するアイデンティティと対立が即、決定的、自動的に反映するものではないし、また社会構造の次元において近代化に向けた「解（開）放が宗教的紐帯を消滅させるものでもない、と結論づける [Kalyvas, 1996: 257]。つまり、亀裂から政党への移行は、その時々々の社会の厳しい制約のもので、ある圧力に直面する様々な団体・組織間の闘争の結果、したがって自己認識を社会において貫こうとする意思の現われとも言い換えられる。

要するに表4に示すように、その時々々の決定的な社会的事情から生じる亀裂の政治化への移行は、少なくとも社会における政治勢力の積極的な自己表現・表明を行う主体、そして集約機能・表出機能を実行できる媒介機関 (agency) を不可欠とする。この機能は（下位社会にいるそれぞれの）人々が欲することを代行することを民主主義という点で正当化する。ただし、分極化が著しいとかえて市民にとって利益集約・表出のためのコストが割高になる [Almond and Powell, 1996: 124]。

媒介機関の役割は亀裂と政党との間を仲介するうえで、非常に重要である [Kitschelt, 1992; Doorenspleet, 2005: 2-8]。「客観」的な社会構造状況だけでは説明できないし判断しきれない。すなわち、ある社会的事情を政治問題化しようとする「主観」的な実行者とその媒介機関が果たす社会と政治に対する「客観」的役割が重要である。

亀裂は、社会的、政治的、文化的な所与の部分とみなされるかどうか、あるいはダイナミックな視点を等閑視する傾向があるかどうか。ある場合、あたかも亀裂が社会階層 (social stratification) から自然の派生物 (outgrowth) であると取り扱われてしまうことがある。仮に社会を分割するものが存在しないとするならば、亀裂を前提とする立

表4：社会における利害関係にもとづく分割から政党への集約・表出機能の流れ

集約機能	表出機能
分割→亀裂→下位文化→集約・媒介機関（組織・団体・指導者）→政党→政治（政策）的要求	
（階級・宗教など）（社会・文化・経済の志向・配置）	（選挙競争空間での投票行動）
出典、Thomassen, 2005とGörl, 2007: 173を参考に作成	

場からすると、亀裂不在は政党や政治の不要を意味することになる。しかし、そのような状況はまずありえない。そうすると、社会にある分割を考えなければならぬ。そして、分割が時代に応じて変化するとすれば、古い亀裂線が消滅し新しい亀裂線が登場することになるはずである。この意味では、政治変動は社会事情の変化に応じて説明されるし、この点ではサルトリが「政治の社会学」と概念化したものは理解されるはずである [Sartori, 1990]。伝統的な亀裂は歴史的、構造的な要因が強固な形で各社会にネットワークやコミュニケーションの手段として「埋め込まれている」ので、時代の変化にも耐えうることも考慮すべきである [Steiner, 1974: cf. Ch.W.]。

政党の「編成 (alignment)」は、社会における社会的亀裂に基づいた有権者の政党支持を表現する。例えば第二次世界大戦後、イギリスの政党システムは階級亀裂に基づいて編成された、と言われる。労働者階級は労働党を、中産階級は保守党を支持してきた。フランスでは、カトリック教徒と反教権主義者との国民の相違は左翼と右翼の両陣営の政党の支持と不支持の判断材料となった。他の国々でも、政治編成は社会経済的階級、都市と農村、言語、宗教、地域、エスニシティなどの社会的亀裂に基づくのが普通である。もちろん、社会的亀裂すべてが実際に反映され、政党の形を採用するわけではない。

一国史のときどきの条件から、社会構造を分割する社会的亀裂に基づいた政党支持になる行動が配列される。このことは国民間の意思の多様性（＝複数の下位文化）を説明することになる。その点では、政治的行動に導く社会条件が消滅しても長期にわたり持続する。新しい

世代はその社会的亀裂と結合する価値に社会化される（刷り込みimprinting）。そのことは投票者と政党選択肢との関係が「凍結化」（freezing of party alternatives）されることを意味する。新しい価値（観）は、従来の亀裂を交叉して確立する政治再編成の過程において、現世代と次世代に割り込む形で若い世代に浸透する、と考えられる。複数の社会的亀裂は相互に交叉するとすぐに、各分野の利益を基礎に政党を結成する。このような状況の国では、政党間競争は英米モデルとは異なった多党システムの政治スタイルが一般的になる。社会的亀裂から下位文化という社会の中で部分文化、社会集団ごとの文化が社会の一角を占め、そのあとの政治的表現として特定政党への固定（凍結）化した支持となる [Rokkan and Campbell, 1960]。

人間の政治・社会観を形成するのは、個人を取り巻く政治的下位文化からである。下位文化は社会で特殊な集団は社会層に共有される態度、価値、信念、行動、習慣の集合体であり、そのようなネットワークに属する個人に決定的な影響を及ぼす。また、それは社会全体としての特徴をもつ国民文化とは区別される。そのことは準拠集団の文化を意味する。国家は種類、内容を異にする、多種多様な「不浸透性」の集団、文化集合体から成立する。その点で、社会的亀裂は政治活動を形成する社会構造内部のあり方をはっきりさせる。だからこそ、市民は国民の立場（国民的な政治文化）より自らの共同体社会に愛着を感じるがゆえに、下位文化的な共同体に生きることを選択する。

社会的亀裂の機能は分裂だけでなく、各亀裂の相互作用で均衡を図る場合もある。表5のように一〇〇人の社会が宗教と階級の亀裂に分裂し、それぞれの下位文化を構成すると考えると、A社会とB社会という、二つの状況を想定することが可能である。ある状況では亀裂が下位文化を交叉しつつ、それぞれの亀裂を相互補強する（表5ではA社会）。社会は亀裂の相互作用の有無に基づいて、B社会のような一国内においてまったく

表 5：社会的亀裂都会文化の状況（各社会計100人）

A 社会				B 社会			
	カトリック	プロテスタント	計		カトリック	プロテスタント	計
上層	25	25	50	上層	0	50	50
下層	25	25	50	下層	50	0	50
計	50	50	100	計	50	50	100

出典、Laver, 1987: 442

異質な二つ以上の下位文化集団を有することがある。そのため、一国の政治文化も複数の下位文化（＝部分社会）によって完全に分断されることもある。下位社会の自立性があるのは、単に分割される価値、経済、地域などの亀裂が存在するだけではなく、表 4にあるように、集約機能から表出機能までに至るある亀裂を中心とした組織化・構造化があるからである。だから、紛争を生じさせるような社会的亀裂に特定化される。

第三章 社会的亀裂から政党システムへ

一、社会的亀裂の特質

ヨーロッパでは、都市と農村（中心と周辺）の亀裂はプロテスタント諸国では重要である。他のヨーロッパ諸国では、その亀裂が宗教のそれと交叉して、カトリック教会が都市に対抗する農民利益を代弁する場合がある。言語亀裂はフィンランド、スペイン、イギリス（特にウェールズ）では、言語少数派の利益を表現するために地域に基礎をもった政党の形をとって発展してきた。例えば、ベルギーでは、二つの言語（フランダレン語、ワロン語）によって同一政党が組織を分割する。その一方でスイスは多言語国家（ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマニッシュ語）でありながら、主要政党は言語分割線を横断して支持を獲得する。

社会的亀裂の中で重視すべきは、宗教（特にヨーロッパ大陸諸国）と社会経済階級（特

に北ヨーロッパ諸国、英米系諸国）である。宗教的亀裂が重視される国々では、多くの労働者が宗教政党に投票する傾向がある。そのため、選挙選択の基礎として階級に力点を置かない、いわば「例外」が生まれる。例えば、北ヨーロッパ諸国では、中産階級は宗教的亀裂が投票行動において階級亀裂からの影響を制約されることがある。また、宗教政党が不在といっても、アイルランドのように歴史的に反教権主義の伝統のないカトリック諸国では、とくに宗教政党を名乗らない場合もある。ヨーロッパ大陸諸国では、教会出席者は宗教政党を支持し続け、名目的教会メンバーは宗教的亀裂に無関心であり、世俗化の進行とともに教会出席者が減少し、宗教政党の支持基盤が弱体化しつつある。

階級亀裂はほとんどの国に存在する。アメリカにおいて一九三〇年代のニューデールの再編成期に労働者が民主党を支持したため、社会主義政党の政治的伝統が形成できなかった。近年、北ヨーロッパ諸国やアングロ・サクソン系諸国では、階級にもとづいた投票は凋落気味でもある。だからといって、階級的視点はあらゆる国々において、現在の政党支持の基礎となっていることも事実である [Lipset] 1968]。

これまで西ヨーロッパの有権者の投票行動を分析した研究が指摘するように、亀裂は三つの特徴がある [Bartolini and Mair, 1990: 212-249; Bartolini, 2000: 15-24; Gallagher, Lavar, Mair, 2005: 264-272]。

① 亀裂は所属、地位 (status)、宗教、エスニシティのような形態で社会構造の基礎となる人間集団間を区別する。亀裂は社会にある個々の現実を反映する。それは社会を分割する要素を含む。

② 亀裂に基づく集団が農民、労働者、信徒、その他のそれぞれが共有するアイデンティティと利益を意識するにちがいない集団的アイデンティティの意味を理解しなければならない。例えば、その不在が女性の間でジェンダーの亀裂の政治的動員への障害のひとつを構成する。男女の不平等が解決しない一因には集団的アイデンティティ

が不在であるからである。

③ 亀裂は、政党、労働組合、教会、他の団体のいずれかの組織を通じて、自己主張を繰り返さなければならない。

これらの要素のいずれかが亀裂の本質的な部分を構成する。単に社会的な分割があるからと言っても、それが亀裂↓政治組織↓政党↓自己利益として集約・表出する機能を果たせるわけではない。バルトリニとメアは、この点に関して、従来の研究とは異なるアプローチを用いて様々な亀裂タイプを精査する [Bartolini and Mair, 1990: 211-220]。

亀裂概念は「政治的亀裂」「社会的亀裂」「価値の亀裂」などに分類される。いわゆる政治的亀裂では、例えば政治的対立や分割との相違があるとしても、「政治的」という形容詞をつける「亀裂」という専門用語をわざわざ使用する意味はありそうにない。つまり、政治の目的は「希少な資源の分配をめぐる争い」であるからである。「社会的亀裂」の概念を社会的な地位・所属・階層のそれと区別することは不可能である。そして、「亀裂」という専門用語にはその内容への追加的な価値は存在しないはずである。リップセットとロツカンは現代ヨーロッパの政党と政党システムをモデル化する際に [Lipset and Rokkan, 1967; Rokkan, 1970; Rokkan, 1990]、それらの人と人、集団との分割を考案の対象とした。亀裂の概念がそういった現象に該当する場合にのみ亀裂という専門用語を使用できる。

だから、社会に根源をもち、かつ人々を区別する根拠となるアイデンティティと組織は結合し、その結果、亀裂がある種の社会組織を介して政党という形態となり、その政策を表現する。

この現象は亀裂の一特性を表す。亀裂は深く構造化した分割であって、ある特定の集団・組織には時間と世代を超えて持続する。それらは次の事情があるからである。

① 亀裂は、社会を分割することにより、利益が自己にとって適切にままであり、その関係する集団が集団的アイデ

ンティティの意義にまで昇華し、それを維持したい理由があるがゆえに持続する。

② 新しい有権者が政治システムに参入する際に、そしてその過程が普通選挙権をもって政治参加を促そうとする際に、亀裂は人々の選択した政治的アイデンティティを動員する根拠をもって存続する。

③ 選挙制度の形態、議会制の構造、社会制度に規定され、いわゆる「政治ゲームのルール」に人びとが参加すると、政党が結成される根拠である亀裂の存続をさらに支える傾向がある。

④ 亀裂が政治的対立の条件をコントロールすることは、「選択の明確化は権力行使に至るための手段である」と考える [Schattschneider, 1983: 66] ように、自らを選挙市場に存続することに「限定」する。だから、自らの生き残りの形態は、政治的には分割→亀裂→組織→政党という過程に活路を見出そうとする。それゆえ、亀裂は政治勢力の生き残りの基盤となる。

ロツカンは政治、経済の変動によって歴史の変容を説明することの特徴づけ理論化した [Magone, 2011: 77-85]。その意味では、ロツカンの研究は私たちに知的関心だけでなく、それ以上の有益な「知見」を示唆する。ただ、注意すべきはその研究が一九七〇年代までの時期までに制限されること、と同時に文献やデータが特定地域と国に集中することも認識しておくべきである。その点では、ヨーロッパでもイベリア半島、バルカン、中欧・東欧、それにフランスが欠落する [Guillote, 1981: 390]。

それにもかかわらず、ロツカンはヨーロッパ政治について思考するために膨大な知的遺産、多くのデータ収集、発想法、比較規準法を残した [cf. Rokkan, 1970; Rokkan, 1980]。したがって一九七〇年代半ば以降、ヨーロッパ政治で生じてきた「変動」を理解するために、ロツカンの主要な理論的貢献にもっと注視することはきめて重要である。なぜなら、彼のモデルはヨーロッパ政治の現在までの変容を理解する前提となる理論的枠組みとなるからである。

「古田、二〇〇八・古田、二〇一五」。

実際にその後の研究経緯の中で、例えばひとつの重要な事実として、情報技術が促進されることで、グローバル化過程の重要性は表現される。ポスト近代化や、ヨーロッパ政治の「アメリカ化」が述べられる。ヨーロッパ統合過程は新たな「衝撃 (impetus)」を生み出すだけでなく、この過程にいつそう拍車をかける。しかし、アメリカの政治と社会のある特徴が様々な文化に依拠しながらも、ヨーロッパ各国だけでなく、世界で通用するようなことも事実であろう。もちろん他方において、ヨーロッパの国民国家の政治文化は、ヨーロッパ化・グローバル化が促進されたとしても、国民国家の回路を必要とする。これには「ひとつになった世界」になったわけではないことを証明する「古田、二〇〇九年参照」。

現代のポスト産業社会の階級を基礎としたシステムが柔軟な個人主義化した市場志向のシステムに変化してきたので、ヨーロッパ化・グローバル化も可能になってきた。知識の生産に基づく、新しい階級システムは古い産業階級システムに取って代わるかもしれない。そのため、これまでの集団間の相違はあいまいになっている。今一度ロッカンの社会的亀裂論を確認する必要がある。

ロツカン・モデルはヨーロッパ政治の現在までの変容を理解するうえで、理論的枠組みを考える道標の役割を担う。昨今のヨーロッパ統合などの状況を考えれば、収斂する傾向があるので、ヨーロッパ社会を成立させるものには様々な類似と相違がある。それにもかかわらず、国民国家を単位とする政治は依然として重要であり、それに基づいた予見可能な、近未来の事象が議論されるべきである。そのことは近代社会成立以降の様々な対立から合意と非暴力的な政策決定に向かう流れが中世以来の歴史が読み取れる。ヨーロッパの国民政治文化は現在、ヨーロッパ化・グローバル化が重視されるとしても、国民的単位の回路が重要であることを意味する。だからこそ、ヨーロッ

バを比較体系的に考察したロツカン・モデルは大切である。現在もそこから学ぶ知見は多くある [Rokkan, 1980]。ロツカンは次の三つの関心があった。

① 国民形成 (nation-building) 過程と国民国家政治の出現はどう解説できるか。これには包摂的なシチズンシップ形成の過程が含まれる。

② どのように様々な下位文化が国民国家(単位)の政党システムを通じて表現されるのか。その解明のヒントには歴史的な「遺産」からの様々な社会的亀裂の研究に焦点を当てることである。

③ 中心・周辺 of 亀裂が過去・現在・未来にどのような形態で政治に影響してきたか。ロツカンは母国ノルウェーの背景と自国内の北部と沿岸部という地域的亀裂がヨーロッパを交差して、中心・周辺を比較する際に強い関心をもっていた。¹⁾

二、社会的亀裂を考える視点

ロツカンは、その歴史理論において、ヨーロッパ諸国に登場するシチズンシップがどのように認識され、いかに実現されたかを描こうとした。それは、現在に至るまでのヨーロッパや他の大陸においての民主化に関する研究規範となる。

ロツカンは、初期の民主化、後期の民主化、持続的民主化、不連続な民主化をヨーロッパ内での分化を認識する [Rokkan, 1970: 17-23]。ロツカンは西ヨーロッパ諸国の研究では集中したが、北ヨーロッパでのそのような過程にも強い関心があった。南ヨーロッパ、中央ヨーロッパ、東ヨーロッパの民主化に関しては、ヨーロッパ諸国間の非対称的な民主化だけで図式化するだけになったのである。

ロツカンは中世から二〇世紀に至るまでの国家建設、国民形成、大衆民主主義、福祉国家までの国民国家の政治の樹立に関係する変動過程を研究した。その目的はヨーロッパにおける民主化過程を一般化することにあった。様々な国民単位の政治統合と民主化での政治過程をより多様になるものと理解される〔古田、二〇〇八・古田、二〇一五参照〕。

社会は異質な要素から成立し、個々の要素は社会的亀裂によって特徴づける。ロツカンは社会的亀裂にもとづく議論をするが、その概念を自ら詳細には明示しない。ロツカンは政党（システム）が登場する以前に社会的亀裂構造が出現していたことを強調し、亀裂を現実機能する点から亀裂を定義づけようとした〔Flora 1994: 36〕。

もちろん、その着想を一国単位で検証した研究は数多くある。中心と周辺という亀裂を取り上げれば、例えばE・ウェーバーは、フランスの農村が一八六〇年から一九一四年にかけて大衆政治に統合される過程を証明した。それは大衆の国民化（nationalization）とシチズンシップの創設の過程である。どのようにフランスの農村の社会構造（social fabric）が不安定となり、いかに中心からの影響が浸透するか、都市という中心から農村という周辺にもたらす時代の影響が支配的になるかを説明する〔Weber, 1976〕。各国事例から亀裂の機能を一般化すると以下のようなになる。

亀裂はいくつかの要因からなり、それを保守する閉鎖性（closure）を通じて確立する。この閉鎖性は日常生活の中で社会的同質性と分化的特異性を組織し、そして次世代に継承される。人々はこの環境で過ごせば、高レベルの同質性を身につける。だから、文化的特異性は、共同体の生活様式を防衛するために、社会的、政治的制度の確立を導くことになる。

さきに述べた、①文化的特異性、②社会的同質性、③緊密な組織構造という要因は、長期の安定した下位社会に

寄与する。このメンバースhipを政党選択や選挙政治に際しての支持を固定化する傾向をもたらす [Bartolini and Mair, 1990: 225]。もともと、ウェーバーがフランスの農村の環境変化が下位文化に影響することも忘れてはならない。その防衛手段として、例えばカトリック・アクションのような宗教的共同体を人々の社会移動のから擁護する対策が採用される。

ロツカンは、ヨーロッパ社会・政治過程と、時代を画する重大な時期 (critical period) とを結びつけて考えた。ロツカンは、重大な時期に応じて、ヨーロッパ諸国の共通する出来事・事件を取りあげる。そこには「社会的」と亀裂の前におく事情がある。さきにも述べたように社会的亀裂はそれほど頻繁に適用する事例は多くはないからである。

社会的亀裂を導く三つの主要時期がある [Lipset and Rokkan, 1967: 36-37]。

第一に宗教改革 (Reformation) において、領域が国民国家の単位となり、その枠内で宗教組織の支配をめぐる攻防が生じる。第二に一七八九年以降、「民主革命 (Democratic Revolution)」のために「国民」を動員する。国民国家建設、特に国民形成 (nation-building) のために大衆教育の (もっと俗な表現をすると住民の精神的な) 支配権をめぐる聖・俗の闘争が開始される。第三に産業革命 (Industrial Revolution) の初期段階中に農村の土地利益と都市で勃興する商業・産業リーダーシップをめぐる主張が対決する。

第一から第三までの時期から、下記の①から④までの四つの亀裂が成立する (表6参照)。

- ① エスニシティ・言語の亀裂…一七八九年フランス革命後の中央集権化をめぐる「中心と周辺」の対立、いわゆる国家建設をめざすエリートと地方において権益に固守しようとする周辺エリートとの間の亀裂
- ② 国家―教会の亀裂…一八世紀以来の教育の支配権をめぐる「国家と教会」の対立、いわゆる宗教亀裂

③ 都市—農村の亀裂…一八世紀後半以来の産業革命中に登場した「農村と都市」の対立、いわゆる第一次産業と第二次産業の亀裂

④ 所有—労働の亀裂…一八世紀以来の産業革命の結果として、出現した「労働者と雇用者」の対立、いわゆる階級対立

ロツカンは三つの決定的な事件（宗教改革、国民革命、産業革命）によって成立した亀裂以外にその後の新しい亀裂の出現の可能性を排除したわけではない。ただ、ロツカンの理論的枠組みはヨーロッパに共通する四つの社会的亀裂を生み出す決定的な時期をめぐって組織（同質化・特異化）される点に注目しなければならない。一九一七年ロシア革命は重大な時期である。新しく登場した労働者間の亀裂である社会主義対共產主義は別個の亀裂を見なしてよいかどうかは確定しがたい。もちろん、一九世紀に生じた雇用者対労働者という亀裂とは異なる亀裂であることも確かである [Rokkan, 1999 : 305, 310]。

ロツカンは、比較の視点から普通選挙に向けた発展を研究するために、歴史を区分する亀裂に関心があった [Flora, 1996: 252, 253]。この視点は単に亀裂構造だけを問題視したわけではない。つまり、ロツカンは国民国家政治への無名の住民の関与・参加する方途にも注目したのである。政治的民主化（例…普通選挙権の実施）を経て「一国民」「一国家」に達成する手段・制度が人々を代表する政党である。政党システムへの亀裂構造の移行が彼のいわゆる亀裂—政党—投票者編成の理論やモデルの中心部分である。彼の亀裂構造モデルは国民形成モデル、そしてその結果と成果を表現する政党（システム）の理論やモデルにおいてきわめて重要な部分をなす。

亀裂—政党に至る過程は長期間をかけて完成する。それには国家の民主化は、各国の政党システムを機能させるために、四つの「敷居 (threshold)」を乗り越えなければならない。国家建設エリートに対決する政治運動・組織は

これらの「敷居」を乗り越え、反体制的なアウトサイダー的存在が体制内化したインサイダーとして平和裏に政治システム内に取り込まれる。通常、制限選挙から普通選挙という政治的権利の拡大が採用されなければならない。そのため、次の四つの「敷居」が越えられて普通平等の参政権の拡大に行きつく。

① 正当性の敷居…政治システム内に抗議を正当なものと承認するレベル

正当性 (legitimation) は、政治システムが増大する抗議運動を取り扱う際には、重要な「敷居」とみなされる。もちろん、政治活動のための政治システムを開放することは、既成の政治に反体制勢力の抗議を正当な回路に参入させ、したがって参加を通じて政治システムを正当化させる機能を果たすのである。

② 編入の敷居…政治システムにおいて政治的シチズンシップを拒否するか承認するかのレベル

編入 (incorporation) は、住民の大部分のために政治権利を承認することである。政治的シチズンシップの拒絶は政治システムを圧政的な性格し、かえって不安定化するかもしれない。段階的な普通選挙権の拡大は、イギリスや北ヨーロッパ諸国が経験したように、民主主義に向かう秩序だった過程を進展させる [cf. Heidar, 2001]。南ヨーロッパ、中央ヨーロッパ、東ヨーロッパの諸国では、反体制勢力の編入過程は暴力をともなう衝突が見られた。

③ 代表性の敷居…政治システムにおいて代表(権)を確保できる運動能力レベル

代表性 (representation) は、政治システムにおいて、代表(権)が所持できる能力を意味する。すなわち、反体制勢力が政治システム内に平和裡に代表者を派遣できることを意味する。この「敷居」の低下は政治システムをさらに正当化し、具体的な影響力をシステム内に編入させる意味がある。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、労働者階級の出現、そして国民国家内に位置づけられた政党に託された代表は、この「敷居」を克服

する際には重要な過程とみなされる。選挙制度を整備することを通じて代表制は社会的上層から下層へと拡大する。その制度設計しだいで政治的暴力やテロ行為が生じかねない。

④ 行政の敷居・政治システムにおいて主要な政治アクター間で同意された選挙ルールを定義するレベル

行政 (executive) は、多数決による政権獲得を可能にする選挙政治上のルールである。これは暴力をとまわず、お互いが (多数の勝利の) 結果を承認し合う措置である。政治システム内での政治的亀裂に属する個々の立場を超えた国民として統合できるかどうかの判断規準となる。合法的な社会集団が自己の支持する政党を通じて適切に代表権を獲得できることは、政治システムの安定と維持には大切である。この好例は第一次世界大戦中と戦後のオランダの和平政策である。このことで比例代表制が確立され、そこに合法化された集団は政治システムにおいて自らの居場所を見いだせる。例えば、信仰を基礎とする私立学校の設立のような争点は、様々な亀裂から生じる紛争を回避し、この安定の模索を通じて平和裡に解決できる [Lijphart, 1975: 70-72]。

ロッキンによれば、四つの「敷居」には関連性が存在する。それらは、連続的な順番になるとは限らず、いくつかの種類が関係して、すべて相互に影響しあう。システムの内部が安定すると亀裂にもとづく下位文化の関係する影響力は政治システム内で亀裂を構造化できるし、政治システムの維持・統合に貢献する。そして、政党を成立させやすくする。政党は、一方で紛争を引き起こす政治組織であるが、他方同時に安定や統合に貢献できる組織でもある。政党は、政治システム内において、表出機能 (express function)、手段機能 (instrumental function)、代表機能 (representative function) という三機能を果たす。

表出機能は、政党が一国内のある特定の社会的亀裂や下位文化の思考と要求を表現し構造化することを指す。手段機能は、政党の活用がある特定の社会的亀裂や下部構造からの要求を達成するために構造化することである。こ

のことは政党が国民（の一部）を代表する回路として機能する政治参加の機能を果たす。代表機能は、議会のような制度での参加を意味する。代表機能によって反対勢力は、平和手段を通じて、政治システムに参入し、特定の有権者の要求を体制側に認めさせることが可能となる。

ロツカンは、政党の主要な役割を民主国家が長期間の政治的な安定を維持できる統合回路を順次に提供できることを強調する。政党間競争によって、単独か連合かの政権を通じて、社会の様々な亀裂からの要求の履行が正当であることが承認される。競争政党システムは、市民の不同意にその権利を保証することで、現政治システム内での紛争を予防する。対立する利益を表出・手段・集約する正規の回路の確立は、国民国家の政治的、社会的な安定に貢献する。様々な宗派の地位への平等化は宗教争点をめぐる紛争を予防することにもなる。政治的主張を参政権拡大や基本的自由権の実行で保証することは、国民国家の正当性（ひいては民主化）を強化するのに役立つ。特権階級と非特権階級の間にある顕在的、潜在的な対立を表現する平和的解決手段への回路が開放されることを意味する。国民国家の初期段階での不平等な制度の改革は、時間を経るにしたがって団体を通じた政治（body politics）を促進する。この対立・統合の弁証法は政党を社会の中心的な位置を占めさせる [Lipset and Rokkan, 1967: 45]。

三、ロツカンの「凍結」テーゼ

ロツカン・テーゼに関する論争のひとつは、ヨーロッパ政党システムが戦間期に「凍結」したことである。これは、一九六〇年代後半において、市民が戦間期に成立した大衆メンバーシップ政党（mass membership party）を選択するか否かを意味する。ロツカンは「一九六〇年代の政党システムは、若干の重要な例外を除けば、一九二〇年代の社会的亀裂構造を反映している」 [Lipset and Rokkan, 1967: 50] と述べる。いわゆる「凍結テーゼ（freezing these）」

である。実際、ロッカンの「凍結仮説」はその発表後すぐに批判が現われた。ある国の政党システムの変動は多くのヨーロッパ諸国で、特にデンマークやオランダでは、高レベルの変動票 (volatility) があつた [cf. Pedersen, 1979]。リブセツとロッカンは、西ヨーロッパにおける多くの市民が年少の頃から、または初めて投票したときに既成政党を当然視する。言い換えれば、これは亀裂が社会の一部分に構造化されたことを意味する。この意味でさらに次世代以降も亀裂が継承される。特定の下位文化が社会化されてきた。次に論争から批判を考察しなければならない。

ここで再度、社会的亀裂の機能を二つの点で考えておきたい。ひとつは亀裂が紛争の原因となるより、国民形成の完成する過程において異質な存在を各自が承認しあうことによって、各亀裂の共存が国民としての一体感を確保できる点である。つまりロッカンは、国民形成の完成した一九二〇年代において新たな亀裂の出現は社会構造化させない、と判断した。もうひとつは亀裂が社会構造化されるほど社会全体の一部になって社会としては不可欠なまでの存在になっていることである。つまり、亀裂↓社会集団↓政党(システム)という組織化を必要とする。この二点での見解について相違が「凍結仮説」についての論争を引き起こす。現在の亀裂の変容や新たな亀裂の出現を主張する見解は、上記の二点のロッカンの発想では根拠薄弱と考えてよいかどうか。ロッカニアンから反論すれば、社会的亀裂が単純に人々を分割するだけとするような定義でよいのか。

社会的分化・動員から政党を概観すれば、社会的亀裂の構造が政党(システム)の形を整えて組織され、個人の行動様式の配置までも規定する「亀裂―媒介機関・組織―政党」の関連したモデルが考えられる。例えば、宗教的な亀裂なら、信徒―教会などの団体・宗教政党であり、労働者階級―労働組合―社会主義政党のような連結である。その連結を単純に各アクターに並べて配列するだけでなく、考慮すべきはどのように、どの順番で各社会的亀裂が政治問題化し、いかなる方法で、またいかなる意図・意思で結束しどの組み合わせで、社会的亀裂が政党対立の国

表 6：4つの基本対立パターン

中心	
所有一労働の亀裂④ (雇用者対労働者)	国家－教会の亀裂② (宗教・教育をめぐる対立)
経済	文化 機能次元
都市－農村の亀裂③ (第一次産業対第二次産業)	エスニシティ・言語の亀裂① (中心対周辺)
周辺	
領域次元	

出典 Rokkan, 1980b: 12

民的、地域的、領域的システム形成の基礎を提供したのか、ということである。これを四つの基本的な社会的亀裂を用いるモデルで説明される。四つのうち二つが文化的亀裂であり、他の二つは経済的な亀裂である。表6の両側面にあるひとつの亀裂が領域の中心的傾向を、もうひとつの亀裂が周辺の傾向をもつ[Rokkan, 1980b: 12]; 古田、一九九七：二二―二五]。

文化の機能次元の亀裂①において、中心と周辺の亀裂はエスニシティの対立、支配言語と少数言語をめぐる紛争が持続する。もうひとつの国家と教会の亀裂②は世俗化した国家と、既成の教会または大衆に信望ある宗派が中心と宗教・教育をめぐる主導権争いを繰り返す。経済の機能次元において周辺の亀裂③では、都市ネットワークと農村同盟が対決し、中心との亀裂④が所有者階級と労働者階級の対立が存在する。さらに、労働者階級の志向が第一次世界大戦中から戦後にかけて分裂する亀裂⑤が生まれる。

次に、亀裂が構造化する歴史過程を考察しよう[Rokkan, 1968: 199-202]。西ヨーロッパには一六世紀以降、四つの「危機的時期(critical period)」があり、その際採用された措置により基本的な亀裂が生じ、そこから社会集団を介して政党の中核となる部分が結成される(表6、表7)。最初の二つの亀裂は宗教改革と国民革命の直接的な産物であり、①中央集権的な国民文化と地方・周辺のエスニシティ・言語・文化との紛争(支配文化対従属文化)、②国家と教会の団体

表 7：危機的時期と社会的亀裂

危機的時期	社会的亀裂	主要争点
I. 宗教改革/反宗教改革 II. 国民革命 III. 産業革命	①中心－周辺 ②国家－教会 ③第 1 次産業－第 2 次産業 ④資本家/有産者－労働者 ⑤社会主義－共産主義	国教対超国家宗教、ラテン語対自国語 大衆教育の世俗化対教会の教育支配 関税政策：農業保護対自由貿易 経済政策：国家統制対自由経済 資本家の権利対労働者の権利 国民国家へ統合対国際革命運動の支援
IV. 国際革命		

出典、Flora, 1981: 429

特権をめぐる紛争（国家対教会）である。あとの二つは産業革命から派生する、③土地利益と産業・企業家階級との紛争（第一次産業対第二次産業）、④所有者・雇業者階級と小作人・労働者階級との紛争（企業家対労働者）である。さらに、⑤政治的市民権を獲得した労働者は国民として国家を承認するか、それとも労働者階級の国際的な連帯に関与するかで分裂する（社会主義対共産主義）。

「中心－周辺」と「国家－教会」の各亀裂は、産業革命から生じる亀裂に影響する。例えば、中部ヨーロッパではカトリック政治運動は都市と農村の経済利益の亀裂と交叉し、そのためカトリック政党が存在する国では農民政党は原則的に不在である。プロテスタント諸国では、農民利益を代表する農民政党が存在する。また、産業の発展は労働市場を拡大し、そのことで下層階級の大衆政党を政治舞台に押し出す。もちろん、大衆政党も政治システムへの統合という点では各国に相違があり、労働者階級の政治的性格に応じて、「国家を容認」する社会主義と、それに対抗するプロレタリア国際主義に分類され、第一次世界大戦とロシア革命を介して二つの労働者政党が競合する。各国の歴史的段階での相違が、政党あるいは政党システムにヴァリエーションを加えていく。

一般化するなら、最初の三つの亀裂が現代の政党システムの基盤を形成し、各国の相違を創造したのである。だから、「システム内の政党の決定的な配置は政治舞台に労働者階級政党が参入する以前に出現していた」のである。第四の亀裂

はその枠組みを拡大し、さらに第五の亀裂は現代政党システムにさらなる複雑さを追加した。それゆえ、「一九六〇年代の政党システムは、若干の重要な例外を別にすれば、一九二〇年代（まで形成された）の社会的亀裂構造を反映している」[Lipset and Rokkan, 1967: 50] となる。国民的規模での競争が制度をめぐる紛争となって国民間に一定集団の形で亀裂が「凍結」するなら、亀裂＝政党は歴史的に継承した各政治的「パッケージ」と考えられる。社会に断片化した下位文化があれば、人は価値秩序への評価をそれに関連づける。下位文化は国民全体の政治文化の中で部分的な形態をとりながらも、個人の政治的態度と国民全体の政治文化の調整を図ることもできる。そのような社会構造は各国の投票者編成と政党システムとが密接に関係する、と述べてよいであろう。

以上の社会的、政治的な文脈において、リブセットとロツカンはヨーロッパの四世紀にわたる歴史を分析し、四つ決定的な亀裂 (critical cleavage) を抽出する。再度確認すると、その四つの亀裂とは、フランス革命から派生した「国家・教会の亀裂」、国民国家の建設をめぐる「中心―周辺の亀裂」、産業革命以降の「第一次―第二次産業の亀裂」、資本主義社会の発展に伴う「所有者階級―労働者階級の亀裂」である。²⁾

社会的亀裂の機能のひとつは社会の分割だけでなく、各自の相互作用にもあるとともに注意しなければならない。表5のように百人からなる社会が宗教と階級という二つの社会的亀裂に分裂し、それぞれの下位文化を構成すると仮定する。二つの状況を想定することが可能である。ある状況では社会的亀裂が下位文化を交叉し、それぞれの社会的亀裂を相互補強する（表5ではA社会）。別の状況では各社会的亀裂を交叉し、二つの孤立した下位文化を構成化する（表5ではB社会）。社会は社会的亀裂の相互作用の有無に基づいて、B社会のような一国内においてまったく異質な二つ以上の分断された下位文化集団を有することが多々ある（例…ベルギーの三つの言語、北アイルランドの宗教対立）。そのため、一国の政治文化も下位文化によって完全に分断された形になることもある。

例えばドイツ第二帝政期において、労働者階級を基盤とする社会主義文化の亀裂は「公認のドイツ文化」の浸透から労働者を防衛した。また、少数派のカトリック下位文化は多数派のプロテスタント文化に対抗して独自性を発揮しようとした。いわば「強制的」ともいえる下位文化の集団への忠誠は、それへの所属意識を強化・平均化する。カトリック教徒はカトリック系学校で学び、カトリック系新聞を読み、キリスト教系労働組合に所属し、交際・婚姻の相手はカトリック教徒に限定し、カトリック志向の政党に投票する。この所属意識は下位文化間の対立を強めてきたことも事実である。例えば、戦間期のオーストリアでの社会主義陣営とカトリック陣営の対立、近年では北アイルランドのカトリック信者の政治的立場、レバノンの宗教内紛、世界各地での少数派の立場などに見受けられる。

ただ、下位文化の自立性が一国全体の統合を阻んではかりではない。安定した政治システムは各社会的亀裂（＝各社会集団）を政党システム、利益集団、行政構造といった形を通じて政治過程の中でうまく代表させる術がある。例えば、オランダでは社会全体が下位文化を代表する四つから五つ（カトリック、二つのプロテスタント、社会主義、自由主義）の下位文化の「ブロック」間の異質性を認めつつ、それらの各エリートの協調、協力が安定した政治に貢献してきた。この多極共存型民主主義（consociational democracy）は西ヨーロッパ諸国の中小国では日常的に見られる政治形態である。

もちろん、ベルギーのように宗教と階級の分裂に言語が加わって複雑な統合形態になったため、多極共存型民主主義の成立条件を阻害する国もあるし、一九七〇年代以降、多極共存型民主主義と言われた国々においても、従来の「協調関係」が崩壊し、政治の安定条件を満たせなくなり、この理論は西ヨーロッパでなく、第三世界の政治構造だけの説明しか通用しなくなったという批判もある。

近年の西ヨーロッパを考える場合、従来の下位文化に代わって、新たな下位文化（例…エスニシティの再生、人種問題、第三世界からの移民・外国人労働者、難民の定住など）の出現は、多極共存型民主主義理論を再度引用する状況をもたらす。さらに、多極共存型民主主義は、一九八九年冷戦終了以降、世界各国の地域・宗教・民族紛争の原因となっている「民族問題」への有効な解決策のひとつの参考にもなりうる可能性を秘めている〔Wolf and Yakinthou, 2003〕。

社会に断片化した文化があれば、人は価値秩序への評価をその下位文化に関係づけられる。下位文化は政治文化の部分的な形態を取りながらも、個人の政治的態度と国民全体の政治文化の調整を図ることもできる。そのような社会構造は各国の投票者編成と政党システムとが密接に関係すると言ってよいであろう〔cf. Gunlicks, 2011: ch.5, 6〕。

第四章 社会的亀裂の再考

一、価値の亀裂論

リブセツとロツカンは、長期間から考察した政治アクターと政党の間にある無数の分割の中から四つの亀裂を精査した。P・フローラは、これらの亀裂が「社会構造に根づいた、多種多様な分割の中から精査された、基本的な対立 (opposition) である」と述べる〔Flora 1999〕。したがって、私たちが亀裂を語ることは近代的民主主義の発展の初期から歴史的に成立してきた構成要素 (building block) を論じることであり、そして現代政治においてその役割を演じることを依然として認識すべきである〔Mair, 1993〕。そして、亀裂は次の三つの理由からその構成要素そのものが衰退することも認識すべきである。

① 社会の近代化と都市化によって亀裂と社会的現実の乖離が拡大する場合である。例えば、近代化と都市化は北

ヨーロッパの農民党がもつ伝統的な社会的基礎を浸食し、脱物質主義的価値観 (post-materialist value) による社会変動はこれまで階級などに基づく亀裂が保持してきた社会状況を変更し、それまで当然視してきた社会的現実を新たなそれへと変更する。既存の亀裂＝政党は個々の国々の政党システム内のポジションを維持する努力を強いられ、包括的な中道政党になることを方向づける。

② 亀裂に基づく集団的なアイデンティティが維持できなくなることがあることである。集団的アイデンティティの意味が希薄化・断片化し、既存の利益がもはや人々に意味をもたなくするとき亀裂はまさに衰退するかもしれない。

③ 亀裂を代弁する政治組織や政党が政治戦略への野望をより広範囲に展開すると、亀裂の本来のもつ支持層への依存度を低下させるために、亀裂はそのものの影響力を低下させ始めることである。例えば、政党の包括政党化現象である「古田、2012」。

近年のアプローチとして、亀裂は個々人の信念体系 (belief system) であるとする見解がある。例えば、その見解は、階級や宗教のように、社会的に構造化された分割が衰退したとみなすからである。古い亀裂に代わって、「選好 (preference)」、「個人特有の考え方 (mind-set)」、「価値 (value)」から構成されるものに置き換えられる [Deth and Scabrough, 1995; Flanagan, 1987; Ingelhardt, 1990; Kriesi, 1998]。そして、価値の亀裂が社会全般において適切に説明できるなら、社会構造にある他の要因は考慮されなくてよくなる。

西ヨーロッパ各国では、社会的亀裂に基づく「凍結」状態とそれを代表とする政党とがパッケージされた人々の投票行動に影響し続けてきたと言われた。一九六〇年代後半から、この投票行動が変化しつつある。つまり、これまでの社会的亀裂構造が変容し、新たな社会的亀裂の出現が指摘されている。その代表的なものは、価値変動によ

る「物質主義 (materialism)」と「脱物質主義 (post-materialism)」という新たな価値意識を規準とする社会的亀裂 [Inglehart, 1977]、あるいは「消費」と「生産」における公的部門と私的部門を基準とする社会的亀裂から、人々の投票行動を説明する理論がある [Taylor-Gooby, 1984]。

これらの選択肢が完全に満たさないことは明らかである。例えば、価値判断に基づかない (value-free) 宗教動員は明らかに矛盾する。価値判断にもとづかない階級対立も認めがたい。大衆政治の初期段階では動員を徹底した (tryed-in-wool work) 運動はほとんど見られない。実際に、その要求が労働者の権利や社会正義を強調する枠組み内で表わせるかどうか、または要求が無階級社会を予測されるのだろうか。特定の社会構造的な分割による政治は、集团的連帯やイデオロギーへの関与にまとめられる。別の点では、たとえ亀裂として物質主義—脱物質主義を分割とみなしても、価値だけで構築される分裂をいわゆる社会的亀裂とは考えがたい。本来、社会的亀裂はその支持者を組織化、さらには社会の一部として構造化できるかどうか、である。例えば、その分割される一方の側にいる、若く、高学歴で合理的で豊かな市民 (つまり、脱物質主義者) によって、その価値は支持される。つまり、そのことは一時的にそれ自身が社会的な影響力で一定の場所を位置づけられ、その潜在的な支持に向かうはずである。例えば、緑の党が低学歴、低階級からの票を得られないことを証明する。これは亀裂とみなせそうである。

ある社会において大きな波紋を投げかける価値であつたとして、そしてある事情において社会に位置づけられるだけだとして、その亀裂はある役割を演じる。O・クヌッツェンとE・スカーボローは次のように説明する。「価値にもとづく亀裂は政治的対立の構造的基礎が浸食されたとしてもっと柔軟に対応する。同時に私たちは構造変数が重要なでないことを記すべきであり、そして価値志向 (value orientation) がもつ独自のインパクトが亀裂モデルに含まれる、重要な要素である」と価値にもとづく亀裂を積極的に評価する [Knutzen and Scarbrough, 1995: 519]。

もちろん、この見解も、様々な要素がどのように、どの程度の正確さと持続性で測定されるか次第である。

大衆政治が二〇世紀初め最初に出現し、それが一九五〇年代、一九六〇年代に常態化されたとき、一九七三年から一九九〇年までの時期からはじめて価値志向の重要性は注目されてきた。しかし、必要な測定方法が不明なので、真の価値志向は測定されにくい。すでに測定された内容は社会構造の一部になっている事実であることを必ずしも意味するわけではない。

もちろん、社会構造と価値は亀裂を理解するのに有用であろうが、そこにはとくに関わる「何か」が存在することを考えるべきである。それは価値を社会・政治へと媒介する集団・組織である。それは亀裂に結束する意思をもつ人々を必要とする（表1参照）。人々を分け隔てるものは社会内に存在する。それは特定の価値やアイデンティティと結合するかもしれない。しかし、それらが政治的に継続的に機能するとは必ずしも意味するものではない。サルトーリは社会から政治への移行と信念（persuasion）の重要性を強調する [Sartori, 1990]。

さらに、いくつかのアイデンティティと価値が追加されてもよい。政治に組織される争点を語るとき、ある亀裂が社会から政治への移行は、特定の社会的分割が価値やアイデンティティのセットと結びつく際に生じる [Schattschneider, 1983]。その後、亀裂にもとづく組織化された集団という媒介手段によって、これは、政治の世界において、政党によって表現され、政治的、そして社会的に認知される。これらの要素は、分析レベルにおいて、それぞれを区別するが、実践においてそれらは強い相互依存の関係にある。その関係強化は共通する集合的アイデンティティの意味と価値体系の出現を容易にする。そして、その出現は組織化されてはじめて効果も生まれる。それが可能であれば、その亀裂を支持する人々のアイデンティティをさらに強めるし、政治的に有効になる。ある場合では、社会集団がすでに凝集的であり、他の非政治組織のネットワークに加わることもあるが、フォーマルな政

治組織がおそらく必要とされる。他の場合、アイデンティティは起業家的な志向をもつ政治リーダー（や集団）によって提議されるまで、ほぼ表明化することはなさそうである。

例えば、北アイルランドとスコットランドでそれぞれのナショナルリストの政治動員の仕方にはちがいがあ
[MacAlister, 1981]。また、例えば緑の党の支持者に代表される価値（観）にもとづく亀裂は社会構造化したが、社会全般にその価値の共有はみられ、組織化されたとはいえ、ロッキン流の亀裂になっただろうか。後者と同様に移民・難民・外国人労働者に反対する極右勢力に賛同する人々には、同様な価値があってもその支持者を組織化しているのだろうか。

二、ロッキン後の亀裂理論

二〇世紀前半にみられた、劇的な社会経済変動にもかかわらず、社会的亀裂にもとづいた政党システムの基本的特徴は、一九六〇年代まで変化しなかった、とロッキンは述べる。当然、過去の歴史的な社会的亀裂＝政党（システム）の「凍結した徴候」は、人々の選挙選択を支配し続けてきた。ところが、一九六八年ごろから政党システムは競争に拡大方向に向かうになった。

最近の傾向として、社会構造は継続的に変動し、それとともに政党選択の基盤となる社会的亀裂の「動揺」も生じてきた。変動のひとつとしては、スコットランド、ウェールズ、バスク、カタルーニャ、フランドレン、ワロン、ケベックなどのエスニック政党（ethnic party, nationalist party）の台頭である。もともと、これらの運動と小政党は全有権者を巻き込めずに特定地域に限定される。

新しい社会的亀裂も登場するとの主張もある。例えば、脱物質主義、消費パターンといった新しい亀裂が提示さ

れる。エコロジー、フェミニズム、移民・難民・外国人労働者、原子力発電などをめぐる争点は、古い社会運動の利益とはまったく異なる、新しい社会運動（NSM）を成立させた。これらの争点をめぐる「争点投票」の登場は、社会構造にある固定的であったものを無視できるのだろうか。また、「争点投票」を常に創造できるほど新しい社会的亀裂が社会の中で構造化・定着化できるか、という論争がある。確かに、これらの新しい利益の対立は社会で反映することは確かであろうが、まだ社会構造内での何らかの自らの基礎を確保したことは実証できたかどうか疑問が残る。

階級、宗教、言語、エスニシティ、人種、世代、ジェンダー、環境保護、移民・難民・外国人労働者の受け入れのような社会を分裂させやすい「亀裂」は、各国において社会を構造的に変更するだろうか。一九六〇年代まで、特定政党を支持する社会集団（下位文化）が政党編成を具体化してきた。社会構造と政党編成の関係を考察するなら、社会構造が政党の中心的な要素を構成する。ただ、政党編成に起因する社会構造の特定次元において様相を異にする。多種多様な原因（例：階級・宗教）を認めるかどうか、あるいは単一の原因が諸政党を編成する際に還元されるかどうか。社会的亀裂にもとづく社会構造が政治共同体の分割した表現として、政党編成に、さらに政党システムに、そして各党の政策に影響することになる。これまでの議論を整理できる。

- ① 社会的亀裂は各下位文化（各社会集団の形で明示）を代表する政党を組織化する誘因となる。ただし、すべてがそうなるとはかぎらない。
- ② ある政党は特定の（利益を求める）有権者から支持を得る。
- ③ 政党はそれぞれ社会的という形で（自己の）利益（政策という形で）を訴えかけることで、幅広く有権者の獲得を求めて競争する。

④ 政党が提示する政策が政党間の相違を明確にする。

上記の点は社会集団、その根拠となる亀裂にもとづく下位文化が社会構造の一部にまでなっているかどうかの再確認を必要とする。

ロッキンが指摘するように、いったん形成された亀裂がその存在の意味を失ったとしても、その後長期にわたり存続することがある。また、現代政治でまれに生じることが、亀裂の大規模な取り替え (wholesale substitution) も起こりうる。ある消滅しそうな亀裂—政党編成 (party alignment) が別に登場する分割 (から将来、亀裂—集団—政党) に置き換えられることである。その証拠には脱編成 (dealignment) で表現される。弱体化した亀裂はそれを支持してきた人々を非構造化された選挙民にする。それまで社会階層、集団的アイデンティティ、組織的表現の点で協調関係にあった結合は、個人化し別の特定化した関係に変更し、固定化する要因がなければ、より変動、あるいは変動しやすい選好の組み合わせを登場させる。それは一九七〇年代から、いわゆる「新しい政治 (new politics)」で登場しており、それにもとづいた変動票を獲得しようとする場合は、一方では緑の党の動員のケース、他方では極右ポピュリスト政党の動員のケースで見られるのではないか。新しい争点と新しい関心が時折、不活発な亀裂を活性化させることもある。例えば、北ヨーロッパ諸国では、中心—周辺の亀裂から結成された農民政党は第一次産業の衰退とともに政党自らが現在の社会状況 (例…環境保護) に合わせて存続を図る。

ある亀裂が衰退すると、集合的な選挙行動での不安定さの増加が明白になる。有権者が複数の亀裂の境界を交差し、政党間を移動する傾向が目立っている。したがって、有権者の行動は予測できずに「任意 (random)」となるかにみえる「古田、一九九八」。しかし、選挙変動は必ずしも亀裂の低下・衰退・消滅を意味するとはかぎらないことをもっと強調すべきである [Bartolini and Mair, 1990 ; Mair, 2001]。

むしろ、変動票のタイプがどのような形態であり、それが政党システム内のどこに位置づけられているかに注目するのが大切である。亀裂間を移動する票は、その意味では、競合する政党間を移動する票より重要だとは考えられない。なぜなら、変動票自体とそれが政党システム内での位置づけの両方が既成政党組織の足場 (hold) の弱体化を指摘するだけかもしれないからである。ただ一見、亀裂のもつ基盤を弱体化させ、そして支持の点で競合する政党間を移動するようだが、集合的な選挙支持では減少したとしてもまだ強固である。注目すべきは変化する部分を強調し、あたかも全体に変化したと誇張することへ「危険性」があることである [Mair, 1993]。

二〇世紀初期、社会主義政党から共産主義政党に、そして後半に共産主義政党から社会民主主義政党に票が移動するが、亀裂から政党 (システム) の関係を表面的な理解は、政党システムがどう変化したかだけを説明する。ところが、亀裂理論を否定的に考える見解は亀裂終了のみを語るだけであろう。例えば、オランダではひとつのプロテスタント政党から他党へのシフト、あるいはフランスではブルジョア政党から他党への移動などがあるものの、全体の亀裂構造を一変するほどかどうか。もちろん、分割が亀裂となり、そしてどのように政党支持へと成就するかという問いかけのほうがもっともな主張だと考えられる。このため、一方ではシステム内の安定と不安定、不動と変動の間を明確にする必要がある、他方では様々な亀裂構造があるように地域間 (inter-area) や陣営間 (inter-block) の関係のあり様の検証は不可欠である [Mair, 1983: 408-414; Bartolini and Mair, 1990: 4146]。そのように考えると、ロツカンが四つ (場合によって五つ) の社会的亀裂にこだわり、また限定した視点は現在からしてもきわめて意義深い着眼点である。

一世紀以上の大衆政治が示すように、現在の社会変動に関して述べるならば、有権者は、亀裂線を交差するより、個々の政党を区別する領域を交差しようとするだけではないだろうか。だから、政党の栄枯盛衰を経ても亀裂は存

続する。再度確認するなら、社会を分割する「何か」は時代に関係なく存在する。ただ、それが社会的亀裂となり、集団化・組織化され、政党という集約・手段・表出機能を兼ね備えるまでの作業はそう簡単ではない。社会に对立・反対・分裂があるといつて、それを即、社会的亀裂と簡単に見なすのは早計でなからうか。また何かも亀裂という言葉を限定なしに使用することは学問的な意義を喪失させる。だからこそ、現在の社会に適用できる社会的亀裂理論の再構築が必要となる。

三、社会構造の多次元的性格

投票行動を決定する要素と、それに対する政治構造との関係において、三つの要因に注意する必要がある。

①政治エリートとその組織の形態である。政治リーダーまたはエリートは、その政党に票を集めるためか、組織化されるかでは大きな役割を演じる。政党リーダーは、全有権者に対して、ある特定の利益をもつ社会集団に訴えかけるか否か、有権者間の社会的相違を無視して有権者全体にアピールをする包括政党 (catch-all party, Volkspartei) になるか否かを判断できる。

②選挙制度の相違である。多党による連合政府を促す比例代表選挙制度は、有権者の五分の一から一〇分の一程度で構成される集団への固定票 (例…農民、言語少数派) があれば、連合政権の一角を構成する「優先座席」を確保できる。このことは比例代表制を採用する国では可能である。英米系諸国 (それにフランス) の小選挙区制度は、選挙に勝利 (＝政権獲得) するためには、より広範囲に有権者に訴えなければならない。

③社会構造による決定理論への代案がある。人々が投票を決定する際に社会構造内の有権者の社会的配置とは無関係に、その時々々の価値、争点、政治的パーソナリティ、その他の要因に動機づけられることも考えておく必要が

ある。社会構造のもつ影響力は現在の激しい社会変動では徐々に凋落し、時々の争点や価値の対立を基礎とした相違が投票行動の新しいタイプを重視されるべきとする視点が有力になってきた。

社会構造と政党編成について考察するとき、注意すべきは、①政党が支持を特定の社会集団にアピールするかどうか、そしてそれはどの状況のもとで可能なのか、②政党がその支持を獲得するのにどの範囲にまでアピールするのか、を検証しなければならない。社会構造や政党システムの変動は、政党編成の初期の源泉となる亀裂理論を適応、応用する必要がある。初期に仮説化された諸関係への最も重要な修正として、亀裂—政党の理論とは別に、以下の現在の点にも注目すべきである。

① 政治システム内で合併、分裂、変容する政党についての政党リーダーの選択

② 政党が最大限に集票するため、政党が利用する選択的アピール（例：バーソナリティ、統治能力、新しい価値観、マニフェスト、公約、綱領、ウィッシュ・リストなど）

③ 経済状態の影響と政権の政策パフォーマンス

④ 政党編成とは別に社会的利益に適合するために政党間や、政党や利益集団のエリート間の協定

この①から④の点は、場合によっては、政党組織を変容させるかもしれない。つまり、①から④が消極的だと、従来の社会的亀裂にもとづく政党（組織）を再考し、現在の状況に適合した形、例えば包括政党やカルテル政党といった新たな政党組織論を考えなければならない。

第五章 政党選択の解釈

一、政党選択の社会構造

社会変動過程は、選挙民の構成と、社会的立場や選挙行動の関係において、市民の政治的関与と投票率の低下との関係で変化を引き起こす。両方の観点から、有権者は政党選択を決定する。諸要因の変化に基づいて、いったん社会構造と政治、つまり社会的立場と政党選択との因果関係が崩れると、人々が特定政党に忠実でなくなる、と述べられる。では、伝統的な亀裂を反映させるイデオロギーは、人々の政治態度や政党選択を決定する要因として、重要でなくなったのであろうか [Thomasson, 2005: 7-9]。

有権者はさきの選挙から次の選挙までの期間に自分がどの政党に投票するかを決定する。その判断は、その時の争点、個々の政党リーダーへの信頼、現政権のパフォーマンスなどを考慮するので、次の選挙結果に大きな波動をもたらし場合もある。そうすると、私たちは古典的な民主主義理論の想定する合理的な有権者を考えざるをえない [Dalton, 1996]。

社会変動過程で仮定される結果として、選挙に関わる概念的枠組みと組織的原則から、変動の効果はあると予測される。人々の投票行動が社会構造の立場によって決定されるとする。このモデルは、選挙研究の中で政治社会的アプローチの基本的な考え方である、通常、これはP・ラザースフェルドを代表とするコロンビア学派の立場である [ラザースフェルド、一九八七]。

ヨーロッパの研究では、リブセットとロツカンによる『政党システムと投票者編成』[Lipset and Rokkan, 1967]が政治社会的アプローチの代表的な理論である。このアプローチは亀裂構造が価値志向を反映する。人々の態度、認識、行動としての「政党一体感 (party identification)」は、政治心理学学派、つまりミシガン学派の中核的要素でもある。有権者と政党とをつなぐ情報コストとして、また左翼―右翼の次元としてのイデオロギー的連続性の考えは、A・ダウنزの民主主義の経済理論の中核的要素である [ダウنز、一九八〇]。政治的な争点や政府のパ

I、Ⅲ」。同時に、リブセットも含めたアメリカの研究者によって階級亀裂に基づくイデオロギーが衰退する「イデオロギーの終焉 (end of ideology)」[ベル、一九六九]が喧伝された一九六〇年代には、拡大した世俗化と大量消費志向の現況下において、階級亀裂(線)は流動的で希薄化し、それ自身が決定的な存在でなくなった、とキルヒハイマーは説明する [Kirchheimer, 1966]。それまでの階級に基づく大衆メンバーシップ政党と宗派的な政党は、包括的な国民党になる運命にある、と述べられる⁽³⁾。

二〇世紀後半において、伝統的亀裂、特に階級と宗教は、人々の政党選択には重要でなくなったかのようにみなされる。その評価は疑いがないとされる議論もある。その議論は世俗化傾向を論拠にする [Dalton, 1984; Franklin, 1992]。社会的亀裂のインパクトが二重の意味で衰退する証拠がある [Kase and Klingemann, 1994] と説明されることがある。

①構成効果 (composition effect) の変化のために、亀裂に統合される数が社会変動のため減少する。例えば、定期的に教会に出席するカトリック教徒数が減少する。

②社会の特定部分の所属と政党選択との関係が衰退する。例えば、教会に出席しないカトリック教徒がカトリック政党やキリスト教民主主義政党に投票しなくなった。

しかし、選挙政治にとって「社会的亀裂構造の重要性の低下という結論」はそう簡単に下されてよいのだろうか。バルトリニとメアは、「凍結」した政党仮説が依然として有効である [Bartolini and Mai, 1990] と反論する。

近年、階級衰退仮説はイギリス選挙研究者の中から疑問が提示される。社会学的な決定論アプローチから、政治的な結果に向かって亀裂の進展への重要性を考慮しない、と述べられる。社会的亀裂を政治化する政治・制度の重要性を無視していることになる [De Gaat, 2001]。選挙行動での長期的な変動は、それが政治環境の長期の、徐々の

世俗的な社会変動の所産とみなされる [Currice, 2002: 164]。

二、社会的亀裂からの政党システムの概観

有権者の社会における政党選択や自己の所属との相関関係は、これまでの選挙研究や政治社会学において当然視されてきた [Osikerson, 2006]。投票行動研究が開始されて以来、例えば労働者は左翼政党、中産階級は保守政党、宗教志向をもつ者はキリスト教民主主義政党へ投票する傾向が大きい、と言われてきた [Alford, 1963; Rose, 1974]。

近年、人々の社会的立場・属性と政党選択の結びつきは必ずしも一致しなくなった、と言われるが、それでも現行の政党システムは社会的亀裂がほとんどの場合、政党システムの起源に反映する。

リブセットとロツカンは、多くの社会的亀裂や分裂にそって、集団が社会の歴史的發展に固定されることを理論化する。社会的立場・属性と政党選択の関係が多くの様々な理論的視点から研究されたとしても、社会的亀裂モデルはまだ中心的な位置を占めている [Nieuwbeerta, 1995; Flankin, 1992: ch.1]、と考えられないだろうか。

さきに示した、四つの社会的亀裂モデルは、西側世界において政党システムを構造化した国民革命と産業革命との関係で歴史的過程において生じた。歴史的経験と政治構造的な決定に依拠しつつ、宗教亀裂線（特に国家対カトリック教会）、中心と周辺（国民国家エリート対地方・周辺化された人々のエリート）、都市と農村の亀裂（産業対土地利益）、階級亀裂（雇用者対労働者）などが民主化過程を通じて政党（システム）を形成してきた。それぞれの亀裂は社会と政党組織に残存する。リブセットとロツカンの結論のひとつは、これらの編成が非常に安定し、それゆえ政党システムが「凍結」されていることにある [Lipset and Rokkan, 1967: 50; Rose and Urwin, 1970; Maguire, 1983]。その点で、社会構造にもとづいた影響があると考ええるならば、歴史的に形成されてきた社会集団と政党の編成はヨーロッパ政党

システムでの安定を説明する。

今日のヨーロッパの有権者票を獲得する主要政党のルーツは一九世紀にあつた事実（同時に国民形成の集中した事実でもあること）が明らかにされる。その点を理解したうえで、社会的立場・属性と政党選択との間の伝統的關係（世代間の価値志向の伝達）の基盤が変化してきた。

現在、社会的亀裂をめぐる議論の中心点は、政党システムが亀裂構造を単に反映していないことである。政党—支持者の編成過程は様々に起因する要素がある。それは歴史的な民主化過程である時機での制度的な脈絡に結びつく。政党はいったん結成すると存続を追求する。有権者との編成はその利益を維持するなどの理由によるからである。その意味で、政党は有権者の社会的亀裂を適切に取り込む「受け皿」である。サルトリーは政党を階級という亀裂の「帰結」でなく、むしろ政党からアイデンティティを階級が受け取った、と反対方向から説明する〔Sartori, 1997: 169; Przeworski and Sprague, 1986: 100-101; Bartolini and Mair, 1990〕。確かに、そのような相互作用の關係がある。

これらの視点では結局、政党選択は社会的亀裂の重要性を証明する。亀裂の性格や強度に依存するだけでなく、亀裂に政党がどのように関わるかも証明する。例えば、社会民主主義政党が急進的になれば、ブルジョア階級に對抗する労働者階級の権利・利益を擁護することになる。これは階級政党化である。逆の場合だと、例えば支持拡大のために有権者全般に訴えかける、穏健な包括政党に近づくことになる。これはあくまでも単純化した議論である。ある集団が代表と認める政党が不在ならいざ知らず、通常、集団メンバーは一貫したパターンである特定の政党に投票しつづける。そのことは亀裂に基づく投票は社会構造的な集団と政党との間の相互作用を表現する。リップセツトとロツカンとは、そのような場面を「社会的亀裂と政治編成 (Social Cleavage and Political Alignments)」と表現する。

[Lipset and Rokkan, 1967; Sainsbury, 1990; Mair, 1997; Curice, 2002]。政党も有権者もその時々現状に柔軟に対応するであろう。例えば、現在の西ヨーロッパ諸国の問題である移民・難民・外国人労働者の争点での政治家、政党、有権者の「一時的」な立場の変更を示す場合である。

今日の西側民主国の社会構造は、社会的立場・属性と政党選択の間にあった、経験的結びつきを示す一九七〇年代までのそれと同じではない。産業社会はポスト産業社会に進展する。つまり、伝統的産業に従事する人々は減少する一方である。世俗化の傾向は宗教の立場を変更した。社会的亀裂に基づく政党の伝統的な中核集団が動揺する。他方で、政党は伝統的な「中核集団」を超えて、一見有権者すべてに「満足」させるような戦略を採用しようとしてきた。様々な政治的な争点を取り込む戦略が編み出されてきた。包括政党やカルテル政党への政党の変化がそれである。中核集団の動員をさらに弱体化させる事態が予測される。では、「社会的亀裂モデルはいまだに有効であるのか？」

三、社会的亀裂モデルの実証分析

ロッキンアンの立場にあれば、投票行動研究において社会的亀裂にもとづく投票と競い合うものは存在しないであろう。すなわち、社会的立場・属性と政党選択との関係を示す。この関係が持続するか否かに関する論争は続く [Dalton et al., 1984; Franklin et al., 1992; Clark and Lipset, 2000; Evans, 1999]。やはりその中でもっとも関心あるのは、有権者の階級上の立場と政党選択との関係についてである。確かに、階級投票の凋落が疑問視される部分もある [Heath, 1985, 1987; Heath et al., 1991; Clark et al., 1993; Manza, 1995; Evans, 1999]。国々の階級投票レベルでの重要な相違もあることに注意すべきである [Nieuwbeerta, 1995]。北ヨーロッパとイギリスの国々では、第二次世界大戦後

に生じた階級投票にもとづく投票行動の凋落が見られる。その凋落は北ヨーロッパ諸国、ドイツでも確認できると言われる [Neuwbeerta, 1995: 195; Knutsen, 2003]。ある研究は社会的要因を取りあげる。例えば、社会経済的構成、経済発展、組織構造のそれぞれの変化などが階級投票の凋落をもたらす要因である [Franklin, 1992; Oskarson, 1994; Neuwbeerta, 1995]。とはいえ、何が変わったかの説明は総体的になされているかどうか。確かに、多くの事例での社会的立場・属性と政党選択との関係の弱体化を示す、という印象がある。

政党選択にとって社会的立場・属性の重要性についての議論は、はっきりした状態に達する。ただ、階級より他の亀裂の展開は本当の意味で分析、論争されただろうか。私たちは、表層的傾向だけを念頭において、社会的立場・属性が政党選択には重要でなくなった、と述べているのでないだろうか [Franklin, 1992; Dogan, 2007]。

亀裂投票に関する政治的視点は、政党の条件と戦略とが亀裂にもとづく投票と結びつく、と考えられる。政党は亀裂線にそって動員する「大衆メンバーシップ政党」から社会のあらゆる集団を取り込もうとする「包括政党」「カルテル政党」に変容している、と言われる [Kirchheimer, 1966; Katz and Mair, 1997: 93-120; Mair, 1997; Kitschelt, 1994; 古田, 2012]。これらの傾向は相関関係にある。有権者が社会的立場・属性と一致する投票を行うなら、政党にとって合理的な根拠 (rationale) は集団向けだけのアピールに徹することである。亀裂に基づく投票が「有権者側」から理解されることができない議論が新奇でないとしても、そのことは経験的検証を考慮しなくてよいことにならない。例えば、G・エヴァンズらの経験的な分析 [Evans, 1999: 9] を参考にすれば、左翼と右翼のイデオロギー次元にそった分極化がイギリスの階級投票において、どのように変化したのか。彼らの結論によれば、政党の立場が有権者の認識に影響し、これを通じて様々な社会階級の投票行動において、時間を越えたヴァリエーションを醸し出す明らかな証拠 (prima facie) が存在する、と論じる。同様なアプローチはオランダでの政党システムの変容に関

連した亀裂に基づいた投票分析においても提出される [De Graaf 2001]。

社会的亀裂モデルは次の三つの主要な変数 (variable) と見方 (aspect) を含む。

①個人の社会的立場・属性とその個人の選択の相関関係である。ある社会に存する社会的亀裂にそった社会構成はどのような形態をなすのか。

②主要な社会集団の総体的規模は構成 (composition) の強度で表す。亀裂にもとづいて組織された社会集団と政党との編成の強度がいかなる状況にあるのか。

③政党アピールは政党の示す戦略と政策を意味する。社会集団を代表する際に政党の明確な方針があるかどうか。また、どのような形で表現するのか。

社会的亀裂モデルは、この三変数にそって展開する。多くの産業民主国では、もともと普遍的な亀裂は階級である。この亀裂はほとんどの国でみられるからである。それは社会主義政党や社会民主主義政党を通じて明らかになる。当然、その反対に非社会主義政党を表すことにもなる。宗教にもとづく亀裂もやはり重要である。特に、プロテスタント集団とカトリック集団の両方が存在する国々では、キリスト教民主主義政党は政党システムでは中心的存在である。

宗教亀裂は二つの視点で説明される。第一は宗教を信じるか信じないかである。第二はプロテスタント教徒かカトリック教徒かのいずれかである。ドイツ、オランダ、イギリス、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンの六か国において、ドイツ、オランダでは二つの亀裂である階級と宗教、イギリス、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンではひとつの亀裂である階級は大きな影響力がいまだある [Ygi, Pelinka, 2005: Kap.6]。

第六章 現在の政党システム

一、伝統的亀裂構造の存続

現在、西ヨーロッパ各国の亀裂状況はどうなっているのだろうか。一九七〇年代以降から二一世紀初頭までの主要国の亀裂状況を簡単に概観しておこう [Callagher, Laver, Mar: 2001: 240]。

フランスでは、①階級亀裂、②宗教亀裂、③中心—周辺亀裂の三つが第二次世界大戦後では重要である。①は国民の立場を左翼と右翼を分断する。②は一方にゴースト、国民戦線、カトリック集団、他方に社会党、共産党、自由主義者、一部保守主義者を分ける。③の緊張はすべての国民にパリ支配への対応のあり方を認めるか否かで浸透する。近年、新たな分割で注目されるのは、移民問題をめぐって、極右の国民戦線と左翼・中道右派との対立である。左翼・右翼の分割がフランスでは比較安定するとはいえ、左翼と右翼で動員する個々の政党や他の組織はとりわけ強固なわけではない。

ドイツでは、戦後の支配的な亀裂は階級亀裂である。国家と教会の亀裂がそれに交叉する。都市・農村の緊張は一九世紀には重視されたが、現在では消滅しつつある。ところが、一九九〇年東西再統一後、中心（豊かな西部）—周辺（貧しい東部）の利害をめぐる亀裂が再登場する。また、「新しい政治」をからの挑戦が、伝統的な左・右が競合する範囲内に吸収されるとはいえ、古い政治と対決で左翼陣営の分割を反映する。

イタリアでは、フランスと同様、戦後も階級、宗教、中心—周辺の亀裂にもとづく政治を経験してきた。世俗化の増大は宗教をめぐる分割の特徴を削減する。例えば、離婚や人工中絶を法的に承認する。一九九〇年代、それまで支配的なキリスト教民主党が解体し、他の要因もあって、一部が世俗的な「フォルツァ・イタリア (Forza Italia)」

を結党した。階級亀裂も衰退し、共産党内の分裂と、それにもなつて穏健な左翼民主党が結成された。中心—周辺の亀裂に関しては、周辺からの緊張は新たな強力な形が登場する。これは従来からの豊かな北部と貧しい南部という不平等が存続するうえに、北部側の離脱を代表する北部同盟 (Lega Nord) が (分離独立・連邦制を求める意味で) 積極的な地域政党として勢力拡大を図る。

オランダでは、階級と宗教の両亀裂は支配的である。それでも、増加する世俗化と階級格差の削減が伝統的な亀裂構造の依拠した「柱状化」した下位文化 ("pillarized" subculture) を浸食する傾向がある。国家が小さいために、中心—周辺の緊張はあまり見られない。ローカルなアイデンティティは不均等に地理的に配置されるため様々な宗教集団に支えられる。

スペインでは、階級亀裂と中心—周辺亀裂という二つの亀裂がスペインでは支配的である。社会労働党の強さは階級基盤にもとづく。多様な地域政党とエスニック・ナショナリスト政党が各地に点在する。それは同時に階級亀裂も、ローカルな連帯を交叉した左・右の分割のある地域政党システム内でも機能する。もちろん、国家と教会の長い対立の歴史もあつて、宗教は民主化への移行後も社会に大きな影響力を行使する。

スウェーデンでは、階級亀裂が支配的である。他の北ヨーロッパ諸国と同様に、都市・農村の亀裂はとりわけ重要である。一九五七年にそれまでの農民党は中央党 (Center Party) と党名を変更し、有権者に幅広くアピールしはじめたが、この亀裂の有意性は消滅しつつある。宗教亀裂は小さいが、キリスト教民主党である程度得票を伸ばす。これは「反寛容」と「禁酒」を主張するプロテスタント政党である。

イギリスでは、西ヨーロッパ諸国中でもっとも支配的な亀裂は階級亀裂である。それは、一九世紀に消滅した宗教亀裂と都市—農村亀裂を凌駕した。しかし、中心・周辺亀裂はスコットランド、ウェールズ、北アイルランドの

多民族的性格が中心のイングランドとの対抗関係に反映する。それは各地域への自治権承認の形を取る。二〇一四年には、スコットランド独立を是非を問う住民投票が実施された（が否決された）。一九九九年末、北アイルランドでは長年の、ナシヨナリストとユニオニストとの紛争のめざす平和協定が成立した。

以上の各国の社会的亀裂状況から、現在ではどのように政党（システム）を構成するかを次に確認しておこう。

二、政党システムと社会的亀裂の関係

政党システムの伝統的な亀裂の基礎のうえに、三つの観点から考察する。最初の観点は二つの主要亀裂（階級・宗教）にそつた中核集団に属する有権者の投票行動を調査することである。第二の観点は社会構造の変動の意味を精査することである。第三の観点は政党システムでの分極化の程度を考察することである。

以上の観点を念頭において、各国の政党システムの中で亀裂にもとづく投票と分極化との関係を考えておこう。亀裂にもとづく投票のヴァリエーションが政党システムの分極化の度合いに依存するかどうかである。その分析は二つの視点を検討する必要がある。ひとつは労働者階級の有権者と社会民主主義政党との支持・不支持の関係を検証することであり、もうひとつは信仰心ある人々とキリスト教民主主義政党との支持・不支持の関係を検証することである。ひとつの亀裂だけでもとづく政党や集団が政党システムを構成することを述べるのではない。というのは、分析はひとつの亀裂に基づく一元モデルとなるか、ふたつの亀裂にもとづく二元モデルとなるかの区分が大切であるからである。つまり、ある社会にある複数の亀裂にもとづく社会関係が政党システムを規定する。例えば、階級にもとづく二大政党システムの場合は一元的モデルであり、階級と宗教にもとづく多党システムの場合は二元（多元）的モデルとなるその検証を敷衍すれば、該当する政治システムにある下位文化の「姿」が次第に浮びあがる。

例えば、一九八一年以前のノルウェー研究では、職業集団での自己の位置づけが有効であった。宗教亀裂に関しては教会出席率にもとづくことを参考にする。ひと月に一度は教会の礼拝に出席するか、それとも頻繁に参拝するかで宗教亀裂の有無を識別できる。教会出席は一九七七年のノルウェーを除いて、すべての研究で測定される。これらの変数はノルウェーの投票行動には有益な変数である。

イギリスの政党システムでは、一般的に階級亀裂を基礎にした一元モデルで説明されてきた [Butler and Stokes, 1974]。しかし、一九一八年以前では、支配的な亀裂は宗教であった。保守党はイギリス国教会に支援された。一九〇〇年代初期に労働党は、普通選挙権導入で次第に支持を増大する。イギリス政治は階級亀裂が宗教亀裂に取って代わるようになる。だから、ある社会的亀裂は人々の世界観や政党選択では重要ではなくなった。その社会的亀裂は、総体的に見れば、特定政党を成立させなかった。多数決選挙制度のために政治代表を獲得する政党数を制約することを忘れてはならない。つまり、選挙制度は階級亀裂だけという一元的な政党システムを展開してきた。もちろん、イギリスの場合、「中心—周辺」の亀裂はスコットランド、ウェールズ、北アイルランドでは重視されるべきである [cf. Hechter, 1975]。

イギリスの現在の亀裂と政党との因果関係を考えると、階級投票は低下したか否かについての論争が焦点となる。そのことによって、「方向性の見えない波動 (trendless fluctuation)」や「世俗的にもとづく凋落 (secular decline)」と説明される現象が存在するかどうか。前者の傾向が有力であるという結論がある [cf. Evans, 1999]。今日、宗教がイギリスで中心的な亀裂ではないとしても、人々は伝統をまだ堅持する点を忘れてはならない。イギリス国教会を信頼し、宗教的立場から保守党を支持する人々が存在するからである [Rose and MacAllister, 1986 : 48-49]。

イギリスでは、労働党は、第三の自由民主党が支持を増加させているとはいえ、一九六四年から一九八三年まで

支持を減少する傾向があった。一九八三年以降、労働党は票を増加させ、一九九七年から二〇〇一年までの選挙では第一党になっている。

選挙制度は政党システムの政党数に影響する。そのことは北ヨーロッパ諸国では明白である。デンマーク、ノルウェー、スウェーデンでは比例代表制と多党システムという点では選挙制度が政党数を規定する。ただし、政党システムは一元的な階級亀裂にそった結果であることも考慮する必要がある。確かに、ノルウェーとスウェーデンでは、階級と政党選択の相関関係がきわめて強いからである [Franklin and Valen, 1992; Knutsen, 2001; Andersen, 1984]。スウェーデンとノルウェーでは、伝統的に都市—農村の亀裂は後者の代表である農民政党の存在が一元モデルでない、もうひとつの亀裂の意味を示してきたが、現在ではそれは階級亀裂より重要でなくなったことも確かである。デンマークでも、都市・農村亀裂は以前よりも大幅に減少する。それよりも近年では、三国とも階級という職業部門別の亀裂か、ジェンダーにもとづく政党への支持選択が主流になってきている [Knutsen, 2006; Berglund, 2003; Oskarson, 1992, 1994; Holmberg, 2000]。後者は三国にかぎらず、性別による新しい「亀裂」現象である [cf. Woodward, 2015]。言い方を換えれば、男・女と「中心と周辺」の軋轢が現在の社会事情を反映し、それを既成政党がどう取り込もうとするかが試される。

ノルウェーでは労働党 (DNA) は、一九八一年保守党が急接近したことを除き、二〇〇一年選挙まで支配政党である。二〇〇一年選挙では労働党は保守政党より大きな政党である。キリスト教人民党 (KtF) は有権者の約一〇%から一五%と安定した支持を獲得した。

スウェーデンでは、社会民主労働党 (SDA) は毎選挙でトップである。デンマークでは、政党システムは断片化している。しかし、同党は二〇〇一年まで毎選挙ではトップであったが、一九八〇年代後半以降、同党より自由

主義政党への強い支持が有権者には存在する。

ほとんどの国では、キリスト教民主主義政党が存在する。ノルウェーではキリスト教人民党 (Christian People's Party) は一九三三年に政党システムに参入した。スウェーデンとデンマークでは、キリスト教民主主義政党は一九六〇年代に結党した。スウェーデンでは、一九八五年までに議会に議席をもたなかったが、道徳的な争点では伝統的な立場を堅持し、その起源 (＝亀裂) となる宗教的価値 (教育、人工中絶、倫理観など) においては重要な存在となる根拠が同国民には根づいている。

ドイツでは、社会民主党 (SPD) とキリスト教民主同盟・社会同盟 (CDU/CSU) は (近年では社民党は低迷するが) 同程度の力量であった。ドイツは二元的な亀裂にもとづく政党システムが存在する。キリスト教民主主義政党と社会民主主義政党は重要な政党とみなされる。ドイツでは、旧西ドイツでの階級と宗教という両亀裂が重要であったが、今では凋落気味であり、現在では二大政党に小政党 (自由民主党、緑の党、左翼党) からなる穏健な多党システムを形成する [Bake, 1981; Padgett, 1993: 39-41; Nieuwbeerta, 1995]。

オランダでは、主要政党には支持の点では波動がある。一九六〇年代に宗教政党は特にカトリックのキリスト教人民党 (KVP) は急速に支持を低下し、キリスト教系の三党 (カトリック人民党、キリスト教歴史同盟、反革命党) の合同以降、キリスト教民主アピール (CDA) は中心政党のひとつになっている。しかし一九六三年でもまだ、KVPのみが一九七七年ではCDAに匹敵するぐらい強力な存在であった。一九九〇年代にCDAは低下傾向を脱し後の選挙では票を増加させた。社会民主主義政党は一九七九年から一九八九年まで安定した時期であり、その後支持が波動する。

オランダは、カトリック、プロテスタント、世俗という三つの柱状化システム (three-pillar system) で特徴づけら

れてきた。それぞれの「柱」を根拠に二つの世俗政党（自由主義政党、社会主義政党）、カトリック政党、二つのプロテスタント政党という五政党が二〇世紀前半を支配していた。しかし一九六〇年代後半から、政党システムはいくつかの変化と分裂を経験し、今日ではそれが断片化している。一九六六年には民主66 (Demokraten 66) が結党され、それが中産階級の支持を得て自由主義的な立場の左翼政党として進展した [De Graaf, 2001: 6]。一九七七年には三つの宗教政党が合併し、一九八〇年にキリスト教民主連合 (CDA) を結党した。これらの変化から理解すべき点として、多くの小政党が出現しては消えることである。その意味では、階級投票はオランダではそれほど強くない。他方、宗教に基づく亀裂は政党選択では相変わらず重要である [Nieuwbeerta, 1995; De Graaf, 2001]。もちろん、階級亀裂が顕在だから世俗政党が存続するという解釈も成り立つ。

以上からみるかぎり、階級投票と宗教投票について議論には依然として意義がある。

一九六〇年代以降の六か国の政党システムでは、中心的な活動を占める社会民主主義政党とキリスト教民主主義政党である。

しかし、社会的亀裂にもとづいた政党（システム）に関して論じるなら、リブセツトとロッカンが「凍結テーゼ」を宣言した一九六〇年代と同じく、社会的亀裂モデルが今日においても有権者と政党の間の関係を説明するのにまだ有効である。社会的亀裂＝政党モデルの立場からすれば、集団メンバーシップと政党選択の間の関係は充分な結びつきがある、と言えよう。

三、社会的立場・属性と政党選択の傾向

社会的立場・属性と政党選択との関係を測定する方法は長く論争されてきた。広範に使用された測定方法は、

R・R・アルフォードの階級投票指標である。左翼に投票する中産階級の割合を差し引いた残りの分が労働者階級の割合を示す。[Alford, 1963; Alford, 1967; Nieuwbeerta, 1995]。この指標が階級投票を定義つけた。この指標が階級と政党投票の二項対立的な変数を採用するとしても疑問を残す。アルフォードは政党の人気度 (popularity)、言い換えれば変動票についての有権者のその時々志向の変化を考慮していな。[Nieuwbeerta, 1995: 39]、と言われる。現在では、政党の「人気度」での変化まで取り込む手法を必要とするかもしれない。それは厄介な課題となる。つまり、その時々「人気度」はどう評価し、一般化しうるのかどうかである。それを導入することは、階級や宗教と、投票の相関関係の変化を測定する際に混乱をきたすおそれがある。以下、階級と宗教という亀裂にもとづく投票行動を概観しておこう。両亀裂にもとづかない票はその時々状況に左右される変動票と考えられる。

イギリスでは、階級投票は、キリスト教民主主義政党の不在もあって、宗教投票よりも高レベルの結果を示す。他方で、階級投票は一九六四年より二〇〇一年のほうが低くなる。階級投票の減少は直線的ではないが、一九六四年から一九七〇年まではっきりした減少を示す。一九七二年から一九九二年まで波動を示すが、それ以降では再度減少傾向を見せる。

ドイツでは、宗教投票が強力であることを示すが、それでも一九六一年から一九八四年まで宗教投票が減少する。階級投票は高レベルだが、一九六一年から一九八四年まで減少し、その時から階級投票は波動傾向を示す [cf. Franklin, 1985: ch.3]。

オランダでは、宗教投票は階級投票よりも高いレベルにある。それでも、宗教を規準とする投票は一九七一年から一九八六年まで減少し、それ以来増加するV字的傾向を示す。他方、階級投票は一九七一年から一九八一年まで高く、その後は低下するという波動を経験する。

ノルウェーとスウェーデンでは、階級亀裂が非常に支配的であると説明されてきたが、階級投票が低下する。両国の階級投票は確実に低下傾向にある。スウェーデンでは、それは、一九七〇年代には安定的であったが、一九六〇年代から一九八〇年代まではつきりと減少するが、再度、一九九〇年代には安定に戻る傾向である。ノルウェーでは、階級投票は減少傾向にある。宗教投票は減少するが一九八五年をピークに曲線パターンとなり階級投票よりも高レベルにある。ノルウェーを一元的な政党システムとみなすことは不適切となった。デンマークでは、一九七〇年代に階級投票の明らかな低下が示される。しかし、それは波動的な傾向にある。

六カ国の階級投票と宗教投票の一般的傾向を要約しておこう。

階級投票は、イギリスでは一元的だが、もちろん他国でも確かに重要だが、イギリスほどではない。イギリスを除けば、もつとも適応できるのはスウェーデン、ノルウェーである、それでも全体として述べられることでは、階級投票において、最も定期的な減少傾向が窺われる。イギリスでは、階級投票の傾向が低下すると説明される場合が多く、現在の階級投票の高レベル国はスウェーデンとドイツである。ただ、階級亀裂の衰退が宗教亀裂の増加につながるかという点と必ずしもそうでなく、従来まで有効な亀裂・政党編成モデルとは合致しなくなる。オランダとノルウェーでは、宗教投票は波動的傾向を見せる。ドイツだけが宗教投票での減少傾向を示す。

結論的に述べれば、階級投票と宗教投票はまだ機能する、と述べるのが可能である。リブセットとロッカンが解説した一九六〇年代の時点と比べると、確かに階級投票は減少する。しかし過去数十年間、その傾向は波動的な揺れ動きが将来、消滅を意味する方向とみなせるのか、そうでなく多少の現象があっても現状を維持するとみなせるのか、という捉え方のちがいが現在・未来の方向性と可能性を異にする。宗教投票も、直線的ではないが、減少傾向を示し、そして明らかにそれが過去のものとなりつつあるのもひとつの見方かもしれない [cf. Knutsen, 2004: ch.7]。

第七章 近年の社会変動の効果

一、社会的亀裂の凋落の議論

伝統的政党と市民の間の連結の弱体化を主張する研究は多くある。この見解を紹介しておこう [Blondel and Thibout, 2010 : 17-19]。

二〇世紀最後の数一〇年間で政党の基礎構造とする社会的亀裂は、西ヨーロッパ諸国において衰退した事実を否定しようがない。一九五〇年代後半から一九六〇年代前半にかけて、政党は、フランスを除き、西ヨーロッパの政治風景では強固な「岩」のような存在であった。そのイメージは次第に非現実的になってきた。三つ要因で説明される。三要因は、①大規模な「変動票」、②徐々に進行する「凋落」、③政党の「崩壊」、である。

①最初の徴候は「変動票」の増加である。変動票は有権者がある政党から別の政党に支持を移動することを意味する。同時に、有権者が棄権すること増加した。M・ペデルセンは各国の選挙ごとに生じる変動票があることを示した [Pedersen, 1997]。それ以降、変動票は増加する。

②「凋落」は支配的であった政党がかつての優位さを失うことである。その原因の一部は小政党の出現による既成政党票が浸食された結果である。例えば、デンマークとノルウェーの労働党はヨーロッパ共同体 (EC) の加盟をめぐる分裂した。デンマークとノルウェーの両党は分裂後再び支配的な地位に復帰できなかった。イタリアのキリスト教民主党は第二次世界大戦後四〇年間万年与党にあったが、その間徐々に凋落に苦しむことになった。オランダでは、第二次世界大戦後数一〇年間で、キリスト教徒 (カトリックとプロテスタント) が支持政党では分裂していた。得票の伸び悩みの影響はひとつのキリスト教民主同盟 (CDA) として合併しなければならなかった。

それでも、同党はその後凋落を続けた。伝統的に大政党も他国で凋落した。イギリスでは、一九五〇年代に得票をほぼ独占した二大政党は一九八〇年代までに票は三分の二以下になった。

③「崩壊」は政党そのものの消失である。一九五〇年代フランスの初のキリスト教民主主義政党である人民共和派(MRP)の崩壊、一九八〇年代初めに崩壊したスペイン民主連合(UCD)などがその事例である。フランスの場合、政党組織が亀裂を通じて国民から忠実な支持者を育成する前に崩壊した。この「崩壊」はイタリアのキリスト教民主党、社会党には適用できない。従来、政党を支えてきた多極共存型民主国の「柱」が突然危機に陥った。

このような三つの展開は西ヨーロッパの政党では理解される。したがって、カットとメアは、政党組織に関して、「政党の生き残り (party survival)」の問題を取上げる。彼らは、政党を財政的に支えるのは、おそらく黨員・支持者に依存するよりも国家が救済するのは解決策となり、政党助成金を国家財政に頼る。つまり、政党は社会(的亀裂)に依存するというより国家組織の一部として存続を図るとする見解である。そのため、「国家は政党の生き残り(復活)には疑いなく重要である」とし、そしてそうすることで「政党は自らの存続を図る」と指摘する [Katz and Mair, 1994: 11]。

したがって、西ヨーロッパでは、市民と政党の間で解決しがたい上記の三要因の「何か」が生じている。しかし、その「何か」への解決(策)が政党にとって国家の手助けで、政党を救済すると信じることは困難である。この種の「何か」への「対応策 (adjustment)」は国家からの支援で一時的には凌ぐことができる。この展開は別の角度から考えれば、社会的亀裂の有効性が喪失したことを意味する。しかし、国家(財政)が政党の支持基盤としての社会的亀裂の代替とはなりえない。これは「変動票」「凋落」「崩壊」の一時的な「治癒策 (remedy)」となっても三要

因を遅延させるだけである。カットとメアは現在の政党が支持を回復するかどうか、そしてどの方法で可能かを示していない。社会的亀裂にもとづいた現政党が過去に得た支持を再度、確保できるかどうか。

大切なのは、時代を経るにしたがつて、リブセットとロツカンがモデル化した社会的亀裂構造が有権者に支持されなくなったという「事実」の認識である。したがって、ある社会的亀裂（にもとづく票）から他の亀裂（にもとづく票）に移動したことは証明できるし、そして「より古い」（たぶんより物質主義的な）亀裂の優越性と、「より新しい」（たぶんより脱物質的な）亀裂」の交代途中の、いわば一時的な共存 (iii) が今である。リブセットとロツカンの四つ（または五つ）の社会的亀裂構造を完全に「凍結」状況は倒壊した。階級、宗教、都市・農村（中心・周辺）はヨーロッパでは大政党を維持するのにもはや十分に説得力を喪失している。新たな「亀裂の階統制 (hierarchy of cleavage)」の構築がすでに開始する [Blondel and Thibout, 2010: 18-19]。三つの根拠がある。

①新しい亀裂が古い亀裂に置き換えられる見解では、そうなる方向性を見出す証拠が存在する。確かに、新しい政党は、例えば緑の党のような形で登場するが、しばしば既成政党の分裂の結果でもある。例えば、オランダ、デンマーク、ノルウェーのように、一部個人化した対立と結びつく。新しい政党は新・旧の団体と市民の結びつきでの緩和、そして断片化を引き起こす。もちろん、その現象は新しい亀裂が出現したからではない。旧来の亀裂のもつ「拘束力」が弱まったからである。

②大政党は、ダウンズが一九五〇年代に示唆し、キルヒハイマーが一九六〇年代に論じたように、イデオロギー的、綱領的に左翼・右翼の立場から中央に接近する。いわゆる、政党の「中道化」である。この展開は、例えば一九五〇年代の西ドイツの社会民主党 (SPD)・キリスト教民主同盟 (CDU)、一九八〇年代のフランス社会党、一九八〇年代から一九九〇年代までのイギリス労働党のように、ほとんどリーダーシップによる、ある

種の「煽動」で組織編成替えの企図を反映する。政党組織の基礎は「新しい」タイプのリーダーをめぐる論じられる。

③多くの政党が「崩壊」するにつれ、古典的政治家とは縁遠い（と思われる）リーダーが組織化を図るようになる。そのうち何人かのリーダーは、ノルウェー、デンマーク、フランス、オーストリア、イタリアなどのように、一九八〇年代以降、移民・難民・外国人労働者の排斥を掲げている。極右政治勢力は時間をかけて自らの組織を社会に適応させてきた。その際のある個人化（personalization）した政党は自国の政党システムにおいて定位置を占めるようになった。そのような事例は、極右勢力ではないが、一九五〇年代初期にフランスのゴースト政党の場合がそうであったし、一九九〇年代ではイタリアのS・ベルルスコーニのフォルツァ・イタリアの場合にすでに経験している。したがって、西ヨーロッパの政党（システム）を通じて述べられるのは、古典的な亀裂の役割のあきらかな衰微である。

全体的に述べられるのは、政党支持に関する社会的亀裂にもとづく理論が現在の多価値化した政治状況と乖離していることである。例えば一九九〇年代東ヨーロッパ諸国で生じた政治変動の結果、一党体制の解体後の現状を社会的亀裂理論で説明できるかどうか。そのことで亀裂理論が有効であるとする実証性で論じられるのか [cf. Berglund and Dellenbrant, 1994: 11]。要するに、リブセツトとロツカンの亀裂理論による政党分析の適用範囲は限定される [cf. Evans and Whitefield, 1993; Kischelt, 1999]。当然、一九九〇年代以降生じる展開は政党と支持者の結合が新たな社会的亀裂にもとづく化、その時々だけの争点で左右されるのかを示す。変動票、新しい政党、リーダーのパフォーマンス（党首力）が決定的な役割を演じることも示している [Blondel and Thiebout, 2010: 19]。

以上の現在の有権者と政党（さらに政党システム）の関係が変わってきたことは理解できる。しかし、ここで簡単

に疑問点を指摘しておこう。①に関しては、歴史という社会構造を形成してきた各国の特異性がもたらす「遺産」が無視されていないか。②と③に関しては、新しい「リーダーシップ」は現在の政治を語っているようだが、「煽動型」のタイプは短期的な評価にしかつながらない。逆に支持者の長期的な支援の（言い換えれば表8のような）枠組みがあつてこそ意味があるのではないか。社会的亀裂にもとづく政党―投票者編成を批判する議論には現象面にとらわれすぎているだろうか。政党の得票という観点から変動票について検証しておこう。

二、変動票の一般的傾向

変動票は、「ある選挙から次の選挙までに投票パターンを変更すること」を意味する。これを「攪拌 (churning)」という用語で表すこともある [Newson and Deth, 2010: 428]。この用語はある有権者を下位社会の一員から、一時的か永続的かを別に、亀裂・政党支持から離脱させることを意味する。第二次世界大戦後、とりわけ一九七〇年代以降の戦後世代の登場で旧来の社会的亀裂の有効性が疑問視されることが増えた、と言われる。西ヨーロッパの主だった国々の状況を簡単に確認しておこう [Gallagher, Lavar, 2001: 264-265]。

フランスでは、非構造的な政党システムと、様々な政治リーダー間の同盟と敵対のために、常に西ヨーロッパ諸国中、もっとも変動的な有権者 (volatile electorate) が存在してきた。政党システムが第五共和制下で統合され始めてから、変動票は一九七〇年代に初めて一〇%以下に減少する傾向となった。一九八〇年代には変動票は再度、増加し、一九九〇年代の選挙では一九五〇年代以来の高水準の変動票が記録された。

ドイツでは、特に戦間期や戦争直後、極端に変動する有権者と性格づけられてきた。しかし一九六〇年代西ドイツでは、政党システムが統合されたので、変動票は低下傾向に転じた。だが、緑の党の登場によって、一九八〇年

代により不安定な状況になるが、変動票は増えていない。近年の選挙では一九九〇年再統一選挙を除き、変動票は一一％以上を記録する。しかし一九五〇年代以来、変動票の平均は常に一〇％以下であった。

イタリアでは、戦後の不安定な政権にかかわらず、長く選挙編成の安定したパターンが特徴的であった。一九五〇年代から一九八〇年代まで一〇年ごとの変動票は一〇％以下であった。ところが一九九〇年代、政党システムの再編とともに、変動票は上昇する。例えば、一九九四年に、いわゆる「第二共和制」での最初の選挙において、変動票は三六％にまでに達した。その後、政情が落ち着いた一九九六年でも、一時的とはいえ、変動票は、戦後西ヨーロッパの平均の二倍の一八％であった。

オランダでは、デンマークやノルウェーと同様、一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけて選挙変動の増加がある。その後、変動票は低下傾向にあり、政党システムは一九六〇年代に登場した新パターンで安定した。例えば一九八九年選挙では、投票の移動は五％を超えた。一九七〇年代に記録されたレベルの半分以下である、しかし、この事情は一九九〇年代に大きく変わり、変動票は一九九四年選挙ではほぼ二二％まで達した。変動票の急上昇はCDAと労働党の支持低下に起因する。その四年後の一九九八年選挙でも約一七％に達する変動票があった。この数字は一九五〇年代、一九六〇年代、一九七〇年代、一九八〇年代の変動票の記録を上回った。

スペインでは、他の民主化した国々の政党システムと同様に、民主化後の選挙では変動票の平均レベルは高く、その特徴を見分けるのが困難なパターンが続いた。一九八〇年代平均変動票は一四％以上であるが、他の西ヨーロッパ民主国の同時期と比べ約二倍であった。この高い数字は一九八二年の例外的な選挙事情から説明できる。この選挙では、民主中道連合(UDC)が支持率を三五％から七％に激減し、その反対に社会労働党票は三一％から四七％に急増した。その選挙では、変動票は三六％以上の高さまで到達した。しかし、その前後の選挙では、変動

票の平均は低く、一九九〇年代では他の西ヨーロッパ諸国のそれに比べ、スペインはその三分の二と逆方向の低下の傾向にあった。

スウェーデンでは、北ヨーロッパ諸国と同様、長期間の選挙支持では安定を示してきた。それでも、一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけて、多くの選挙変動票を経験する。しかしスウェーデンでは、デンマークやノルウェーで生じた変化ほどではなかった。一九九〇年代以前に票の移動は一〇％に達しなかった。変動票は一九九〇年代には高レベルが続いた。それでも平均一四％までであり、ノルウェーのそれよりも低かった。スウェーデンには、この変動票率は伝統的なパターンにおいては重大な変化を経験する。

イギリスでは、一九七〇年代に一時的、急激な選挙波動が第三政党票の増加をもたらした。同じことが一九八〇年代に自由党と社会民主党の同盟が大きな存在となった。選挙変動票は常に戦後の選挙では相対的に低く安定してきた。もともと大規模な変動票は一九七二年二月選挙であった。二大政党以外の自由党、スコットランド民族党、ウェールズ党が票を伸ばした。同選挙では保守党が大勝し、労働党が戦後最低を記録した。同選挙での変動票は約一五％であった。一九九七年選挙では、変動票が一三％以上と急上昇し、その結果、労働党は地滑り的な大勝を得た。

三、社会変動の効果

社会集団に結びつく政党は、社会構造の変動に影響を受けやすい。政党が新たな有権者を獲得できなければ、中核集団の規模が縮小し、即、政党の得票数の減少に直結する。

一方において、政党が新しい支持者や集団の獲得に成功すれば、「中核的な有権者」がもはやその政党を認めず、

したがってその政党を見捨てるというリスクに直面することになる。これは「選挙のジレンマ (Electoral Dilemma)」と名づけられる。その典型例は社会民主主義政党やキリスト教民主主義政党に観察される。中核的な支持者は産業労働者であり、また熱心な信者である。しかし、この支持層は大幅に減少する。例えば、労働者階級の出身の有権者比率は成人の五〇%以下まで減少し続けている。熱心な信者である有権者も時代を経るごとに減少傾向に歯止めはかからない。例えば、オランダでは、一九七〇年代に約六〇から七〇%までの人々は教会に月一回は出席した。それが一九九〇年代には約二五%にまで低下した。たとえ政党が中核集団から支持されたとしても、社会変動の影響が政党支持を減少させる。

他方、社会集団の政党への忠誠、政党への一体感に変化している。亀裂にもとづく政党票の政党の総得票中での割合を考えなければならない。有権者の構成（労働者階級と熱心な信者のそれぞれの割合）は政党に投票する集団の同じ比率であるはずである。集団と政党との編成が同じであれば、以前の票の比率が同じである。政党に投票する集団の比率が同じであるのは、社会的立場・属性と集団に属する政党選択の割合を基礎にする。同様に、キリスト教民主主義政党と宗教上熱心な信者か否かで計算する。

構造変化は継続的な手段を標準化する。その手段とは、集団の比率が最初の選挙からある価値で固定化され、政党へ投票する集団比率が持続されることである。そこから得られた知見は次の点である。

① 実際の政党得票と、その政党を支持する集団による支持の比率が持続すると、構造的変化が影響なく、得票とのギャップは少なく表れる。

② 亀裂のもとづいた投票行動が持続されるにもかかわらず、ギャップがあれば集団の投票傾向での変化の影響がある。

多くの政党には集団の比率のネガティブな影響、そして集団の投票行動の変化のより影響を受け、亀裂にもとづく政党は階級投票や宗教投票の比率が減少しなくても、政党を支える中核的な集団に属する有権者が減少するので、実際には少ない得票しか獲得できそうにない。

イギリスの労働党への支持は、労働者階級に属する支持者の比率の変化で説明されるとはかぎらない。階級構造が同じように存続するなら、実際の支持は計算上の支持と無関係ではないのである。むしろ、そのことは一九八〇年代に労働党にはネガティブに影響する。それは階級投票のヴァリエーションとなった。

他方において、ドイツのキリスト教民主同盟は熱心な信者の減少の点では、社会民主主義政党の労働者階級の減少よりも深刻な問題となるはずである。無宗派の人々と信仰心のない人々の間において、投票行動の変化はあまり重要でない場合もある。デンマークでは、一九七二年、一九八〇年、一九九八年の選挙を除いて、労働党 (PvdA) は階級が同規模程度なら、宗教亀裂はあまり重要でないかもしれない。もともと、一九八一年と一九九四年の選挙はこのパターンから偏りがある。デンマークのキリスト教民主党は一九七〇年代初期と同じであれば、もともと大きな存在であるはずである。しかし、小政党であるキリスト教民主党は、熱心な信者の投票行動の変動にかかわらず、熱心な信者でない人々からも支持を獲得する。

スウェーデンの社会民主労働党は階級構成の変化のために支持を減らす。その影響は年ごとに増大する。他方において、階級投票の変化の影響は年を経るごとにネガティブとポジティブの両面を示す。一九六〇年代に社会民主主義政党は労働者階級以外からの支持を増やしたが、後年低下する階級投票のために、それが社会民主主義政党にはネガティブに影響した。デンマーク社会民主党も階級構成の変化の影響で苦しんだ。変化する投票行動は一九七〇年代後半に回復するが、一九八〇年代に再度低下する。その後の選挙では、投票行動の変化の影響は小さくなる。

社会的亀裂モデルは社会と政治との関係において三つの点で説明される。

① 中心的な社会的亀裂にそった社会構成

② 各国ごとの国民国家形成段階で登場した、特有の亀裂にそった社会構成

③ 政党が集団の代表として行動する度合い

政党支持の分析において、①と②の変化は政党に影響する。中核集団の規模やその縮小と、亀裂に基づく投票の現象レベルは、ほとんどの場合、中核集団以外からの支持に依存しなければならなくなる。例えば、オランダのCDAは熱心な信者集団と密接に結びつくので、その規模が相対的に縮小する。その点だけを取り上げれば、社会的亀裂モデルは有権者と政党との関係を説明するのに有効でなくなった。もっとも、それが不適切だと説明されるものでもない。では、政党システムのタイプと社会的亀裂モデルをどう考えるべきか。

政党選択の社会的亀裂の影響力はどのくらい深く依存するかだけではなく、それに関連する政党にどの程度有権者と関連づけられるかの判断規準となる。政党が亀裂に強く関係すると政策が特定化するので、有権者の政党選択に亀裂が影響することが予測される。その事情については、政党のマニフェストからそれを確認できる [Budge, 2001]。政党は、マニフェストにおいて、選挙前に自らの政治状況分析を提示する。マニフェストは有権者が選挙に直面し、政党選択に重要な判断材料になると予想される。実際上の選択を行う際に意味がある。

それでは、次の仮説が可能であろう。政党システムの分極化状況が強ければ、様々な影響があるはずである。階級投票と宗教投票の相関関係の場合、分極化は分析対象のある選挙での政党のマニフェストに現れる。その指標の分極度指標は次のとおりである。①左翼・右翼の項目、②計画経済での項目、③市場経済に基づく項目、④福祉政策についての項目、⑤宗教亀裂を理解する「伝統的価値」に関する項目に基づく [Budge, 2001]。これらの分析から、

大ざっぱだが、主要な亀裂がひとつかそれ以上かで、政党システムの二つのタイプに分類できる。

① 階級亀裂と宗教亀裂の二つが社会を大きく分ける二元亀裂システム (dual cleavage system)

② 政党選択が主に階級亀裂である一元亀裂システム (single cleavage system)

ドイツ、オランダ、ノルウェーは二元亀裂システムであり、イギリス、スウェーデン、デンマークは一元亀裂システムである。政党システムの分極度合いを分析する際、二元亀裂システムと一元亀裂システムとは異なるが、両者が関係する可能性は充分にある。その関係では、① 様々な亀裂が有権者にどのくらい十分に政党選択を説明できるか、そして② 政党システムの中でどちらの次元が優先事項であるかの可能性である。その理由のため、二元亀裂システムと一元亀裂システムを別々に提示される。

階級投票は五つの分極度指標のうち四つと関係する。⑤ 伝統的価値についての分極化を測定する指標は階級投票と相関関係がない。もっとも強い相関関係は、④ 福祉政策に関しての分極化で見られる。他方、⑤ 宗教亀裂にもとづく投票は③ 市場経済と⑤ 伝統的価値に関して相関関係がある。社会における分極化が徹底すれば、社会的亀裂を根拠とする投票も高まる傾向を示す。

政党システムにおいて、分極化度が亀裂にもとづく投票に影響する仮説は正当化されそうである。政党間の相違が大きければ、有権者は亀裂線にそって動員される傾向がまだ充分にある。その傾向の歴史的変遷を次に確認しておこう。

第八章 社会経済的变化と三段階モデル

一、三段階モデルの概要

図2はⅠの社会的亀裂にもとづいた投票行動パターンを下敷きに各段階の特徴を明示したものである [Smith, 1990]。 「中核的モデル (core model)」は図のⅠAに該当する。これは分極化した社会集団が固定的にある特定政党を支持し続ける段階を示している (大衆メンバースhip政党の成立)。分極化の内容が相当多様であるとしても、各社会集団と各政党との提携関係が一致していた。そのことは社会的亀裂に基づく動員に見られ投票行動を安定させるが、政党システムを断片化させた、かつ遠心的な状態、言い換えれば分極化した状態の固定状態を表す。ⅠAから時代と社会経済的变化は政党システムを投票行動と政党間競争の内容をⅠB、Ⅱ、Ⅲの各段階に移行する [cf. Heath, Jowell, Currice, 1985; Part I]。

ⅠBは第一段階に属し、下位文化が断片化した状態ではⅠAと同じであり、ある国々では不均等、不安定な選挙動員に基づいた投票行動によって政治システムも不安定になる場合が存在する (例…ヴァイマル・ドイツ、戦争直後のイタリア、フランス)。

Ⅱの段階の場合は第二次世界大戦後の政治、経済、社会が安定した状態を表す。戦後の「合意」をめぐって投票行動が二つの政治勢力に収斂する状況がある。Ⅱの段階は包括政党 (catch-all party) 論の登場がこの時代を象徴する。政党は前段階と異なり求心的方向 (中道路線化) をめざすので、政党システムは (同時に政治システムも) 安定することになる。

Ⅲの段階は投票行動と政党間競争において不一致が生じるか、あるいは支持の点においてズレが現われる。つまり、投票行動は変化しやすくなる、と同時に政党システムは断片化する現象が現われる。ところが、政治システムは比較的安定したままである。

もっと近年になると、多様な変動の徴候が示される。その中のひとつに有権者と政党の関係が変化してきた、と

指摘される。その徴候として、政党支持がこれまで安定、固定していたが、それが変動票として非常に流動 (flux) になった。有権者の政党への帰属意識が弱体化した意味で、選挙の脱編成、あるいは根本的な再編成がみられる [Flanagan, Dalton, 1987; Dalton Flanagan and Beck, 1984]。

西側先進諸国の第二次世界大戦後の三つの段階に分けて考えておきたい。図のⅠA・ⅠBに当たる第一段階は政党と支持者の固定的な支持関係を社会的亀裂から定式化した「凍結テーゼ (freezing these)」が有効と言われ、一九二〇年代の代表的な社会的亀裂に基づく政党と有権者の編成が一九六〇年代まで固定した。Ⅱに当たる第二段階は一九五〇年代、一九六〇年代以降から一九八〇年代まで政治システムが求心的傾向と政党が包括政党に変貌しようとした時代である。Ⅲに当たる第三段階は一九八〇年代以降、政治システムが安定しているにもかかわらず、政党と有権者の関係が流動的になった時代である。

第一段階の内容は次の段階になっても完全に消滅するわけではない。全体的な時系列的な判断からすれば、第三段階は第一と第二の段階の特徴の一部を受け継いで、さらにその段階で生じた特質を追加し混合した展開があることに留意しなければならない。

三つの時系列的な発展段階は、各段階の投票行動と政党 (システム) に関係する特徴から便宜上、区分されるが、その時々々の社会構造の変化に支配される。もちろん、これらの社会構造は変化した後でさえ、有権者と政党はそれ以前の段階からの「遺産」の影響を受ける。歴史的な展開は選挙への対応の性格に影響するし、現在の政党システムの構造化にも影響し続ける。

政党間競争の一般的パターンは、三段階それぞれの選挙行動の基本的な特徴とそれぞれの方向性を組み合わせることによって明確にできる。

二、適応と求心的な競争

図2の第一段階では、政党と支持者の関係は社会的亀裂が「凍結化 (freezing)」し、リプセットとロツカンの命

図2の西ヨーロッパの政党システムの各段階の時系列的な流れを簡単に表9でまとめておこう。



出典: Smith, 1990, p.263に若干追加

図2：選挙行動と政党間競争

表9：西ヨーロッパ政党システムと各段階

段 階	期 間	内 容
第1段階 (I A)	1880年代－ 1920年代	発生的段階。危機・革新・流動性をはっきりする。自由民主主義への移行での動員と編成。1920年代は注目すべき例外 (イタリア、ドイツ、スペイン、ポルトガル、ギリシャ)、他国は相対的に安定化する。
第2段階 (I B)	1920年代－ 1960年代	動員化された安定。構造的に強化された政治システム (イタリアとドイツは1940年代後半から)。
第3段階 (II)	1960年代－	競争と脱分極化の増加。「包括政党」化した政党がアピールする範囲を拡張。投票者が政党の脱編成に向かう。
第4段階 (III)	1970年代－	構造的流動化。政党の脱集中化と投票者の支持の拡散。エリート間、エリートと市民の間で学習・挑戦・刷新が存在。1970年代半ばよりギリシャ、スペイン、ポルトガルが加わる。1990年代中欧・東欧諸国の政党システムの登場。1970年代以降増加する変動票、1980年代末から1990年代に中核政党の回復・刷新・変容が開始。

出典、Donovan and Broughton, 1999: 262

(注) 各段階の括弧内の数字は図2 参照

題 [Lipset and Rokkan, 1976] が説得力のある時代である。それぞれの亀裂に基づく下位社会が他のそれとは隔絶できた。だから戦争直後では、サルトーリの「分極的多元主義 (polarized pluralism)」の状況が実際に観察できた [Sartori, 1976]。

有権者はある社会集団と自己、それに自己の利益との一体感があり、その所属の意味はある特定政党への政治的忠誠心を抱くのである。社会的亀裂はある集団利益を他の集団利益と区別する。そこには集団メンバーは特定政党の支持を逸脱させない。しかし現実には、変動の潜在能力はすでに表面化する。社会構造の変容ともなって、社会的亀裂に基づく支持は減少し始めてきた。

では、そのことにどのように注目すべきか。二つの見方がある。

①投票行動でさらなる流動性 (fluidity) がはつきりすることである。それは政党や集団が支持者を捕捉できず、逆に有権者は別の刺激、動機、誘因などから意思決定を行う。

②政党自身がそれまでの支持者の関係を希薄化する。新たな戦略を様式化することである。有権者が政党からの「拘束」を離れて「自主的」に行動するかどうか、また政党が有権者の投票に決定的な存在であるかどうかである。それに応じて有権者は支持を変更する可能性が高くなる。例えば、有権者がある政党を自己に不適当な存在とみなすなら、政党は自らの立場を修正しなければならない。政党は政治市場に生き残れるか否かの極めて重大な局面を迎える。

政党は、伝統的な亀裂の伝統にこだわるかぎり、進行する状況に遅れを取る。この意味では、政党が有権者への対応に意味がある。しかし、その説明では社会構造の変化の意味が無視される。その変化は有権者に影響する。政党は変化する社会経済的な環境に順応しなければならない。このことは第二段階へ向けた前提条件となる。

第二段階の開始は一九五〇年以降の時期にあたる。経済再建・回復から安定した経済成長の時期と結びつく。戦前の社会における紛争・対立は、戦争がもたらした転換・非連続・断絶とともに社会変動をスピードアップさせた。例えば、ナチス・ドイツは「近代化」を促進した「ダーレンドルフ、二〇〇二」。ファシズム、戦争、経済再建、戦後の豊かさは、先進西側諸国の社会構造の変化には大きなそれも急激な効果をもたらした。

一九五〇年代から一九六〇年代にかけてのキルヒハイマーの社会分析は示唆に富んでいる。彼は政党システムの変動に関しての内在的な原因を追究しただけでなく、その後のヨーロッパ各国が展開するシナリオも提示した [Kirchheimer, 1966]。

キルヒハイマーの見解によれば、社会が収斂するにつれてその影響を受けて、政党は求心的競争（中道路線の採用）に向かう。社会的対立の鈍化は政治的分極化の低下と同一歩調で進展する。そのことは政治システムの安定と求心的傾向を強める。新しい社会的な現実への政党の適応は、政党にはイデオロギーの劇的な修正が求められる。つまり、政党はほとんど「分極化・分節化されない社会」への適合を強要されるか、共存する途を選ぶかあるいは「非イデオロギー政治」（「イデオロギーの終焉」）の形態を求められる。

第二次世界大戦後、政治システムの求心的競争は合意事項となった。各政党は支持の点では重なり合う部分を意識する。伝統的な政党はその現実に適応できず凋落するケースもある。だからこそ新しいタイプの政党が下位社会（社会的亀裂）の境界を交叉するようなアピールを採択するようになった。すなわち、戦後の高度経済成長による社会的状況の変化は、新しい政党タイプを生み出す機会を設ける。キルヒハイマーは「求心的な競争現象」と新しいタイプの政党を現在の状況に見合う帰結を予測し、包括政党と呼ばれるタイプの政党は古い社会的亀裂を横断し、それを超越する能力があることを証明した。つまり、全有権者から支持を獲得するのである。他の政党は自らの基

盤を浸食され、そのため「永遠の野党」になることを恐れ、包括政党でなければ、選挙市場において置いてきぼりを食らう [Krippendorf, 1962]。

そうするとある政党システムは二つか三つの政党のみが存続できる。そのうちいずれかの政党が多数の支持を獲得する。つまり、政党は現実主義的な対応を志向しなければならない。

だが、実際はそう簡単にはことを運ばせなかった。西側先進諸国の政党システムは一九六〇年代以降、この予測通りでもあり、反対にそうでないことも証明もした。包括政党タイプは確かに成立したとはいえ、決して他の政党を一掃できなかったし、また政党数の減少の徴候は劇的には見られなかった [Wolinetz, 1979]。

大政党は明確なイデオロギーに固執する中小政党と同様に「弱点」を抱える。ただ、キルヒハイマーのテーマを「事実と異なる」と簡単に否定もできない。政党間競争の求心的性格、それと政党システムの予測される変容結果との間を明確にしなければならない。キルヒハイマーの予測と現実には完全な一致はありえない。社会変動が引き起こす政党間競争に課された「求心的な傾向への束縛」は、重要な影響のひとつと見なければならぬ。他方、社会的亀裂の構造化は西側先進諸国の政治を考える場合、決して消去されない刻印を残す。もっとも次の第三段階では、第一、二段階の現実を踏まえたうえで、また新たな変化が既成政党に影響を与える変数になりうる。

第二段階には、政党間競争は分極的傾向であるより、むしろ求心的になった。政党は、一般的な見地からは求心的な方向性に向かうと想定されるが、現実にはまだ政党が社会の限定的、部分的な利益に固執する点で「分極化」した一面も残す。

政党の包括政党化は、新たな支持者を獲得するだろうが、これまで政党の中核部分をなす社会的亀裂にもとづく「顧客 (client)」からの支持を失うこととおそれる意識が作用する。もちろん、ある政治システム内での政党間競

争を一般的傾向だけで判断してはならない。ある特定国家だけの政党システムには歴史のちがいでウェイトの置かれたの異なる指標が存在する。例えば、政党綱領は特定の方針を語るだけかもしれない。ところが、政党の行動は、政局ごとの選挙キャンペーン、連合政権での駆け引き、野党の立場などでは一般論だけでは考えられないことを明らかにする。

サルトリーが論じた「分極的多元主義 (polarized pluralism)」は「過去の遺物」のようになったようだし、戦後の先進西側諸国ではそれはほぼ不在となった。もちろん、一九九〇年代以降のネオ・ファシズム現象は新たな考慮の対象にしなければならない。ただ、政治システムの性格と、その中の政党システムのあり方は基本的に求心的傾向を否定できなくなった。

三、包括政党化現象

M・デュヴェルジェは幹部政党 (Parti de Cadre) と大衆政党 (Parti de Masse) に分類したが、これに続く第三の類型として包括政党が登場した。キルヒハイマーは包括政党論を編み出した。エプシュタインはアメリカの政党を第三の類型とし、西ヨーロッパの政党もアメリカ型のタイプとなることを予測した [Epstein, 1981]。また、J・シャルロは政党タイプを名望家政党 (parti de notable)、活動家政党 (parti de militant)、それに加えて第三タイプとして選挙民政党 (parti de delecteur) を提示した [シャルロ、一九七三]。

各研究者の包括政党論の背景には、経済成長、労働者階級のブルジョア化、新中間層の増大など社会構造上の変化がある。

キルヒハイマーは包括政党の特徴を次のように述べる。

①脱イデオロギー化・キルヒハイマーが一九六六年に論文を発表したとき、当時脱イデオロギー化（「イデオロギーの終焉」）が盛んに取り上げられた時期である、例えば一九五九年に西ドイツ社会民主党は、マルクス主義を放棄したバート・ゴードスベルク綱領を発表、実行した。

②トップリーダーの強化・党員の存在の希薄化・現代型の政党の寡頭制化が説明された。その背景には、現代の政党は選挙に勝利することを最優先し、そのために党首のイメージを有権者に売り込もうとする。党を中心にジャーナリスティックな宣伝を必要とするが、同時に個々の党員の存在意義が低くなる。例えば西ドイツでは、当時のキリスト教民主同盟党首のアデナウアーや社会民主党党首のブランドを党看板に「宰相民主主義（Kanzlerdemokratie）」論が唱えられた。

③党員の不在・②との関連で党員、特にイデオロギーに固執する活動家を必要とせず、有権者全体にアピールする党や党首による運営が必要になる。

④特定階層との関係を解消・例えばキリスト教民主同盟も社会民主党も新中間層を獲得するために、有権者すべてに訴えかける（catch-all）。キリスト教民主同盟はカトリック教徒だけでなくプロテスタント教徒にも支持を拡大し、本来の自党名「キリスト教（christlich）」に適合させたい。

⑤多様な圧力団体との友好関係・包括政党は種々の圧力団体との友好関係を維持しようとする。政党は特定の圧力団体との協力関係からあらゆる社会集団と協調関係を維持しなければならない。

エプシュタインは、幹部政党が「左翼からの感染」によって大衆政党化することだけでなく、「右翼から感染」も生じるとし、左翼政党も包括政党化すると論じた。第一に選挙運動のマスコミの利用である。大統領選挙では、それは顕著となっており、政党組織は不必要になる。第二に大衆メンバーシップ政党は党員からの党費に依存し、

当然、党員拡大が党財政の安定につながる。しかし政党は党費に依存しなくても、国家からの政党助成金、労働組合や企業からの寄付・献金、新聞などによる収入の確保が可能となる。大衆メンバーシップ政党は党財政の観点から考えて、特定の人々（＝固定した支持者）を必要としなくなった。西側先進諸国の政党はアメリカの政党が行ってきたことに追従し始めた。エプシュタインは、アメリカの政党が世界のモデルになると結論づけた。

シャルロは、フランスにおいてド・ゴール派の成立から、名望家層を当てにせずにド・ゴールのカリスマ的魅力で有権者を獲得する手法を政党が身に付けたことを指摘する。さきのドイツの「宰相民主主義」のような形態である。フランスでは、従来、幹部政党が大衆政党かの区別をしたが、もうひとつ別の選挙民政党 (*parti delecteur*) の存在があることを証明したかもしれない「シャルロ、一九七六」。

(西) ドイツでは、キリスト教民主同盟も社会民主党も包括政党になったと言われるが、もちろん批判もあった。西ドイツでは、包括政党を国民政党 (*Allerweltpartei, Volkspartei*) と通常は呼称する。これは階級政党 (*Klassenpartei*) に対する概念である。キルヒハイマーは社会構造の発展史のひとつの発想から包括政党を歴史的必然と見なした。

H・ラシュケとH・カーステは、包括政党であることと、本来の社会的亀裂を基盤とする階層との矛盾がますます明確になる、と指摘する [Raschke und Kaste, 1977]。ということは、包括政党成立以前に立ち戻るということを意味するのだろうか。ドイツの場合を取り上げれば、一九八〇年の選挙で社会民主党内の活動家・労働者が批判する傾向が見られ、それに反発した新中間層が社民党から離脱する様相が加わった。この現象は旧来の大衆メンバーシップの党組織を維持する側と、有権者すべてにもっと開放的な党組織運営を求める側の相違を示しており、後者から新しい社会運動 (*new social movement*) を出現させた。例えば、緑の党の登場である。

政党が包括政党化すれば、各亀裂を取り込めた政党は二大政党だけと測定されるはずだが、包括政党や国民政党

という言葉が定着した途端に、現実には政党の断片化 (fragmentation) が生じている。本来の支持基盤の階層と包括政党の間の矛盾が拡大し、従来の亀裂にもとづく投票行動を維持できなくなった。同時に人々を分割するような、新しい「亀裂」も登場したのだろうか。その亀裂は「物質主義対脱物質主義」という価値観から成立するのであるうか。ドイツの緑の党であり、別の意味ではイギリスでの労働党を脱退した人々による社会民主党の結党である、と考えてよいのか。

第九章 脱集中化と拡散化

一、第三段階の概要

第二段階において、求心的な政党間競争が一般的になっている。それを受けての第三段階では、政党システムの「脱集中化」や有権者の投票行動が「拡散化」や「変動票 (volatility)」の増大が見られる。この傾向は求心的な政党間競争を導くわけではない。その効果は「脱集中化」と「拡散化」、それに「変動票」の形態をとることになる。

一九六〇年代末までの多くの有権者は社会的亀裂に基づいて特定政党を支持してきた。その結果、選挙変動の範囲は限定されたものとみなせた。ただ一九七〇年代初めから西側先進諸国の共通現象として、「変動票」が顕著になり始めた。前二段階の特徴を残す中で、この第三段階の特徴が顕著な現象として登場した。つまり、有権者の中に政党支持を変更する傾向が示されるだけでなく、投票を差し控える、つまり棄権の選択も増えだした。そのため選挙ごとに政党選好での劇的な変化が生じる。その結果、政治システムそのものは安定しているとはいえ、政党選択では継続的な支持 (＝亀裂にもとづく投票) が確保されずに変動だけが促進される。

「変動票」は極端な形を繰り返す政党間の移動とは考えられない。二、三の既成政党間の投票選択の移動がほと

んどであり、その点では有権者の選択では、諸政党が属す左翼と右翼の各陣営内において票が移動するとみなせる。その結果、政治システムの求心的な性格を基礎に「移動・回復・維持」の形で、有権者が投票する選挙戦術を繰り返す。

だから、その移動は、①イデオロギー的に近くにある政党間への移動であるかどうか、それとも、②まったく対極にある左翼から右翼（またはその反対）への陣営内の政党への移動かどうかでかなりの相違がある。つまり、有権者がある程度抑制された形で票の移動・変更を繰り返すか、それとも投票先を非抑制的に移動するのかがまったく異なる効果が現われる。

①の場合は一種の「陣営内の領域での移動 (intra-area transfer)」である。投票は、例えば左翼か右翼のいずれかの陣営内での移動にとどまる。具体的には、左翼陣営内の社会民主主義党から共産主義政党へと支持を一時的に変えたり戻ったりするケース、同様に右翼陣営内の自由主義政党からキリスト教民主主義党か保守主義政党のいづれかに票を移すか戻すか、といった投票行動が想定できる。いわば政党による支持者への拘束が緩んだ分だけ、有権者は次善の政党 (second party preference) の選択肢を考える。

それに対して、②の場合は「陣営の境を交差した移動」であり、左翼と右翼の境界を越えて票が大きく移動する場合である。例えば、共産党の支持が次回選挙では極右政党支持になる場合である。それは投票の「流動化・液化現象」を指している。そこまででなくとも、左・右陣営の垣根を超えてより自己の時々的心情に近い政党間に移動する。例えば、社会民主主義政党から自由主義政党か保守主義政党への移動かその反対が想定できる。

また、「変動票」を考える場合、第二段階での想定できない新タイプの政党が出現し、「変動票」が新しい小政党への支持に移行することもある (例…環境保護政党、争点政党)。政治システムが不安定にならないとしても、従来の

亀裂の影響力が弱体化することは政党システムの断片化を引き起こし、たとえ政治体制が脅威にさらされることなく、政権レベルでは不安定さが募る。R・ローズとI・マクアリスターはイギリスの状況を例に「求心的不安定」を指摘する [Rose and McAllister, 1986]。

IからⅢの各段階は戦後の先進西側諸国を全般的に説明するには便利である。とりわけ、Ⅲの段階では、選挙ごとの有権者と政党との結びつき（＝社会的亀裂）が弛緩した状態を象徴する。このことは必ずしも社会的亀裂、政党と政党システムの関係が不安定であるわけではない。それは投票行動の実態を表現する。各段階は個々の段階を独立、区分されるのではなく、前段階からの連続性を持って現在まで影響力が残され、そして新しく生じた要素を追加する。それは現在に至るほど過去から蓄積されて、次の段階で生じる複雑な要素が絡み合うからである。もちろん、影響力のなくなった要素もある。

二、現在の有権者像

西側先進各国の特質は、その政党システムに形で長期にわたり形成され、具体的には「凍結 (freezing)」されてきた。それが一九六〇年代までに完成した政党—支持編成構造である。ところが一九四五年以降の社会変動は、いくつかの点で伝統的な政党に影響した。それは歴史的に形成された社会的亀裂線の弱体化によるものである。社会的亀裂による政党（システム）モデルは次第に説得力を失ってきた、と説明される。社会経済構造の変動は、第一次産業から第二次産業、そして第三・四次産業へと就業人口の重点を移行させ、人々の社会的移動に影響する重要な要因となる。まず、第一次産業の凋落がある。農業を中心とする第一次産業を基盤とする社会が衰退する。同様に時代の経過とともに産業構造はだんだん二次産業が凋落する [vgl. Müller-Jentsch, 2007]。そのことによって、ある政党は支

持票の減少に直面することになった。

北ヨーロッパ諸国やイギリスでは、この傾向が顕著であつた。もちろん、同傾向は、産業の発展では遅れる南ヨーロッパ諸国でも進展した。西ヨーロッパ諸国のそれぞれの社会は現在、都市化された様相を示す。西ヨーロッパ諸国の伝統的産業の基盤が縮小した後、第二次産業型、さらに今では第三・四次産業に雇用の中心が移動してきた。そのことは、第二次産業型の労働者も就業人口の中、「古い」部分として社会の端に追いやられるようになる。新しい産業の勃興は生活水準の上昇や教育の高レベルを伴ってきた帰結である。また、これまでの社会階級内の対立・分裂を鈍化し、それが政治的な傾向、具体的には政党支持に影響してきた。

第三次・第四次産業に従事する、いわゆる「新中間層」・「新中産階級」・「新労働者階級」に属する人々は、類似する目標、共通の消費者行動、同質的な大衆文化を共有するようになる。だから、例えばカトリック・アクション、労働者の下位文化などから生まれた、従来の固定的な政治的忠誠は衰退し、その古い社会的ネットワークの有効性は弱体化する。それは西ヨーロッパ社会の二つの重要な政治勢力のための支持の根底部分に掘り崩す。二つの政治勢力とは、中道・右翼の自由主義政党、キリスト教民主主義政党、保守主義政党、左翼の社会民主主義政党や共産主義政党である。

世俗化の進行はキリスト教民主主義政党を教会メンバーや宗教的な立場からの信者を監視する機能を低下させ、キリスト教に基づいた規範やアピールを希薄させる。結局、宗教政党の根拠である国家―教会や宗教教育をめぐる対立が派生する社会的亀裂に基づく支持を持続・補強できなくなる。

他方、左翼政党は組織労働者が提供した支持が衰退し、そのことによって労働組合と労働者の諸団体とのフォーマルな結びつきが存続するか否かが問われるようになった。第二次産業は衰退し、それともなつて労働者の連帯

感が低下し、それに代わり第三次、第四次産業のホワイトカラーの自立的な傾向は増加している。もちろん、ホワイトカラー層は労働組合に加入することはある。しかし、従来までの左翼政党と労働組合との同じ結びつきとは必ずしも言えなくなった。それは自己の意識に応じて自分の一票を手段的・道具的に左翼政党に支持することもある。その意味は階級という亀裂の持つ個々人の拘束を弛緩させることになる。

新たな社会経済的傾向がもたらす影響によって、西ヨーロッパ各国の有権者の姿勢や動向は簡単に予測できない。とはいえ、伝統的な社会的亀裂は完全に消滅していないことも理解しておかなければならない。主要な社会・経済指標は相変わらず「職業は何か」、「労働組合員であるかどうか」、「どの宗教を信仰しているのか否か」など、それらは自己の属性であるし、自らがどこにアイデンティティにあるのを示す根拠であり、他の変数より投票行動の行方を説明し続けている。たとえば、社会的属性からの説明が数一〇年前よりも弱まったとはいえ、まだ人々の行動を規定する要因を備える。

変化する社会構造は、歴史的な社会的亀裂モデルを修正、変更することを促す。これまでの社会的亀裂は消滅したわけではない。同時に新しい亀裂が出現しているかどうかも確認する必要がある。労働者とホワイトカラーとは異なる思考を持つかもしれないし、景気後退があれば、雇用確保のためには、通常では表面化しない階級意識をもつて、両者とも同じぐらい戦闘的であるかもしれない。宗教に基づく支持では、フォーマルなメンバーシップと出席率の低下は顕著になったとはいえ、例えばある個人が異教徒に遭遇すると、自己のアイデンティティを確認したい感情にかられ、その点では政治における判断において「宗教要素」「階級要素」が不要になったとはいえない。例えば、宗教は個々人の倫理観で表現するはずである。また、世代間による新旧の価値観、生産者と消費者の立場のちがいが、中心と周辺の対立なども衣替えして社会的亀裂として再生する。もちろん、戦後から現在に至る

時間の経過の中で、人々の態度や行動を大きく決定した社会的亀裂の影響力はIA、IBの第一段階でよりも低下した、と述べられる。

では、既成政党は変化する社会条件にどう対応するのだろうか。ひとつの大胆な可能な対応として考えれば、古からの代表的な連結を放棄することがある。ある判断において、政党内でそのイデオロギー・綱領に影響を及ぼす決定的なスイッチ役が存在するかもしれない。ところが、既成政党は伝統的なクライエントをなおざりにすることは許されそうにない。当然、政党はその背後にあるメンバーシップと伝統を無視できない。大胆な転換は支持票の減少に直結する。この試練にどう対処すべきか。これは自らの政党組織形態に関係する。そうすれば、その方策として、政党は従来の支持者に向けたアピールを希薄化するにせよ、政党が採用する戦略はこれまでの政党支持を危うくすることなしに、新しい支持者を獲得しなければならない。

ここで社会的亀裂モデルが無意味となったとする近年の傾向に再考を促したい。社会的亀裂が弱まり変容したとしても、本当にそれらが無意味になったのだろうか、ということ問い直さなければならいだろう。私たちは、新しい現象に目を奪われて、本質的なものを等閑視する恐れがあるのではないだろうか。西ヨーロッパ諸国における投票行動において、実際に、社会的亀裂モデルは重要な意味をいまだに失わずに機能し続ける。古い社会的亀裂の弱体化、それと関係する社会的分極化の衰退にかかわらず、有権者の社会経済的な位置づけ、各自の社会的属性は政党を選択する決定要素である。それに、個々の社会的亀裂が変容、衰退、消滅したとしても、社会的亀裂モデルが無効になったと言えるのだろうか〔古田、一九九八、Mair, 1993; Moreno, 1999; Knutsen, 2006〕。

三、変動をどう捉えるか

変動票がどのようなものであれ、その投票行動の変化は証拠づけられる。特定の政党を常に支持することから、選挙ごとに変更を繰り返す現象は一般化される根拠がある。それを「党派性の脱編成 (partisan dealignment)」の概念と考えておこう。それは投票行動の拡散、あるいは政党との一体感 (party identification) の衰退を表現しているかもしれない。党派性は通常、政党への一体感の形を取ることで、常に一定の政党を支持し続け、同時に家族・仲間・周辺地域・世代間に共有し、それを連続させる。特に古い社会的亀裂を基礎とする政党には、その一体感は大きな選挙資源となってきた。しかし、「変動票」の増大が意味するのは、新しく明確な社会的亀裂が登場したわけでないのに、政党への一体感と忠誠からの紐帯関係の弱体化しか示唆していないのではないか。

現時点では、一体感レベルの低下は「変動票」の割合よりも「多い」と言われる。それは増大する政党と支持者の再編成 (realignment)・脱編成 (dealignment) に至る潜在的な事情を意味する [cf. Mack 2010: ch. 3, 4]。むしろ、脱編成された、有権者、特に若者は新たに編成されそうにない存在と見なされそうである。争点投票 (issue voting) は均一的なひとつの政治的方向性からの脱却、または分散を示す。これは選挙ごとの拡散化現象と一致することも考慮に入れておく必要がある。つまり、こういった脱編成を前提と考えるなら、有権者も、政治場面ごとに、あるいは政局ごとに変化があると理解しなければならない。

政治的再編成 (political realignment) は民主体制において選挙政治のダイナミクスを理解する概念である [Franklin 1985: 520-521]。たいていの選挙では、選挙後、予想される立法府内議席数の「自然」の政党間の均衡が維持される。例外的に絶対多数を獲得するかもしれない。次の選挙で「自然」のバランスが回復することがこの考え方の前提にある。もちろん、「自然の」バランスそのものが変化することがある。これまでの多数党に代わって、周辺の役割割だけを演じる政党が突出した動きがある。もし変化した状況が持続的と証明されるなら、そうすると新しい政党

(間) バランスが「自然」と見なされるようになる。そのような変化が生じると、それは政党システムの「再編成」と説明される。

厳密に述べれば、政党システムは一国の社会構造内の主要な亀裂で編成される、と言われてきた。再編成は新しい政治的亀裂が支配的になると生じる。しかし、「再編成」という用語は、新しい政党間バランスが確立される際に、例えば一八六〇年南北戦争、一九三〇年代のニューデール期において、アメリカの歴史家や政治学者がよく使用してきた用語である〔Key, 1955; Burham, 1970; Sundquist, 1973〕。この文脈において、社会構造と政党編成の間の連結は必ずしも明確とは限らない。例えば、イギリスの労働党は自由党に代わって一九二〇年代に与党に対抗する競争政党になって政党システムを再編成させた〔Butler and Stoke, 1974〕。

どのように再編成が生じるかという論争がある。古典的民主主義論者は有権者が出来事や争点への対応で政治的立場を見直し、ある党から別の党に投票を変更するものを再編成と定義した。選挙での大変化はこの種の投票を反映する仮説がある。しかし、この仮説は「公益」が客観的に判断できるタイプの有権者を想定するが、しかし実際は、ほとんどの有権者が政党に対して無視せず、選挙を棄権しないとすると政治的忠誠心があるとする見解と適合しない。従来 of 忠誠を放棄した有権者は次の選挙で元に戻るかもしれない。だから、完全な再編成がどのように現有権者から生じるかを理解するのは困難である。

再編成はそのメカニズムの新しい理解を必要とする。そのシナリオは単一の政治綱領を支持する若い有権者の動員を要求するであろう。どのような綱領が選挙上の動員に役立つかを判断するのが困難となる。ある政党からの有権者の離反は党派の一体感よりむしろ争点を判断する投票に次第に変更するようである。M・フランクリンは、有権者の社会階級による政党への投票傾向が若者では凋落する、と指摘する。所属集団への忠誠よりむしろ争点を個

人の迷惑によって、選択的投票になる」と説明される [Franklin, 1985]。

政党システムの「編成」は政党支持が社会構造の中で政治的な分裂の方向性・支持を意味する。戦後イギリスの政党システムは、階級亀裂で編成される、と言われてきた。労働者階級に属する有権者は労働党を支持し、中産階級に属する有権者は保守党を支持する。新しい社会的亀裂線にそった政党システムの抜本的な再構造化の説明には再編成という用語が採用された。政治的脱編成という用語は選挙政治において変化を説明する概念である [Crewe, Sartvik, Alt, 1977]。

「脱編成」という用語は、アメリカでは、一九六〇年代半ば以降、民主党の選挙での主導権の喪失を説明するのに使用された [Inglehart and Hochstein, 1972; Dalton et al, 1984]。イギリスでは、社会民主党と自由党の同盟が提示した二大政党のヘゲモニーに挑戦する条件で、「脱編成」がみられる。イギリスの政党システムの脱編成は一九七二年に開始した。戦後の選挙で労働党と保守党以外の候補者が議席を獲得した。一九七四年の選挙分析によれば、その一〇年前に比べて、多くの労働者階級が保守党の有権者であり、その反対に多くの中産階級が労働党の有権者となっている。その意味では、社会構造と政党編成との関係づけの説明が必要になる。

「脱編成」はイギリスの投票選択である階級基礎の低下と一致することを説明する。ヒース、ジョウエル、カーチスらはイギリスの投票行動での判断が階級機能の低下していることを主張する [Heath, Jowell, Curtis, 1985] が、フランクリンは小政党への投票が増加する前に、この低下がすでに一九七〇年に明らかであることを指摘する [Franklin, 1985]。この観点からだと、「脱編成」と投票行動の変化には因果関係が強いことを意味することになる。

変動する有権者が時々の争点に応じて投票行動を変更するなら、争点への認識と争点への判断にもとづく投票を考えておかねばならない。

政治的な対立が政治的な争点として一致しない場合がある。その不一致は顕在的なものか潜在的なものか、事実であるのか仮定であるのか。エリート（政党、候補者）間レベルなのか、大衆間の不同意であるのか。このような項目は際限なく述べなければならなくなる。

合理的選択（rational choice）モデルによれば、有権者が政治的な争点についてあるポジションを採用すれば、今度はその争点について政党や候補者のポジションとの関係を測る。そして有権者は、争点に関して自己に最も近い政党や候補者に投票する「三宅、一九八一参照」。

ところが、このモデルは、いくつかの前提をもつと考慮すべきである。第一に争点は多くあり、それゆえ、有権者はある基準に応じてある争点についての選択を決定しなければならない。このモデルは争点を単純に見なし過ぎている。第二にひとつの争点について政党がどのようなポジションを採用するかを仮定できても、多様な有権者が様々な認識をもって、ある政党のポジションと解釈する。そのことは政党と有権者の解釈のズレを無視する結果となる。第三に有権者はあらゆる争点についてすでに表明されるポジションを認めるとはかぎらない。争点は外部の事情から派生する。他方、有権者はある特定環境において生活する。だから、ある争点はそれが提示されると、それをも影響力が現在の政治的態度や関与との複雑な関係において制約を受けたりする。

争点は四つの効果を考えなければならない。その四つとは、顕在効果（salience effect）、説得効果（persuasion effect）、同調効果（projection effect）、抑制効果（damping effect）である。有権者は、その争点の重要性を否定すること（顕在効果）で、政党の政策を受容すること（説得効果）で、政党が有権者と同じ政策を主張すると感じ、その政策を誤認すること（同調効果）で、重要な争点について公然たる不一致にもかかわらずある政党を支持すること（抑制効果）で、新しい争点に反応するかもしれない。党派性は社会的に統合、構成された自己の支持政党に忠誠心が残るかぎ

り、争点の不一致と一致を区別できる規準となる。

これらすべての効果が機能する。ただ、争点のインパクトは通常、合理的選択モデルが想定するよりもずっと小さい、とも言われる。しかし、いくつかの争点は四つの効果にかかわらず、実質的な影響がある場合もある。もっと一般的に述べれば、より弱い政治的関与への場合である。アメリカでは、一九六〇年代半ばに「争点投票」が主張された[Nie et al. 1976]が、争点投票に関してはその傾向と因果関係には疑問がある。第一に政治分析の争点への態度を測定方法である。この技術の向上は有権者の争点への態度、そしてそれにもとづく投票選択との関連性をより精確にしてきた[Abramson, 1983]。とはいえ、測定技術は必ずしも有権者のもつ長期的な傾向を説明するとはかぎらない。第二に争点と、それへの態度や投票選択との間の静態的な相関関係は認識されとしても、争点への態度、党派的忠誠心、投票との関係や相互作用はどうか、またそれぞれへの判断根拠はいまいままである[Markus and Converse, 1979, Page and Jones, 1979, Miller, 1983]。

第一〇章 現在の政党システムと投票者編成

一、現在の有権者をめぐる状況

政党システムの視点から投票行動が変化するパターンとその効果を考えると、政党システムの「脱集中化」は次の三つの要因が考えられる。それにそれぞれの要因をどのように根拠づけるか、言い換えればどのように測定するかによって、さきの図2の第三段階の特徴をより浮き彫りにできる。その三要因は次の点である。

① 政党の強さの分散・政党数の細分化 (fractionalization) の指標によって政党数の増加と相対的規模の変化を測定する。

② 主要政党の得票率…二大政党を支持する有権者の割合の低下で測定する。

③ 政治的アジェンダ…新たな争点を設定する、新しいタイプの政党の出現をそのイデオロギーから測定する。

西側先進諸国の政党システムには「拡散化」と「脱集中化」の傾向が、程度の差があるものの、それが見られ、同時に第一段階と第二段階の特徴も残っており、次に続く第三段階に影響することが観察できる。

西側先進諸国では、一方に拡散と脱集中を最大化しているイスラエル、イタリア、ベルギー、デンマークなどがあり、他方に相対的にそれらがあまり目立たないスウェーデン、スイス、ニュージーランド、リヒテンシュタインなどの両極の場合がある。その中間的な立場には変動の種類が相当多様であるが、典型例と見なせるかどうか、あるいは特有の進展を見せるかどうか不確実な国がある。

イギリスでは、主要二党の得票は低下して、確かに脱集中化を示すようだが、とりわけ「変動票」が特に多いほどではない。もともと。スコットランド民族党などの地域政党が存在することを考慮しなければならない。

ドイツでは第三党として、自由民主党、緑の党、左翼党などが考慮するだけの政党として進出する。(西)ドイツでは二大政党の得票は減少し、同時に棄権率が高くなっている。一九八〇年代最も顕著な変動は緑の党の登場という衝撃がある。それにドイツ(再)統一以降、その利害関係を反映してか、社会民主党から離党した左翼党(Linkepartei)も登場する。この現象は政党支持の拡散化傾向を示す。緑の党は古い政党編成から新しい価値観の登場による世代間の価値変動が生じるが、左翼党は従前の亀裂を反映させようとする。

オランダ、ベルギー、デンマークでは、元々多党システムなので、二大政党の得票を論じることには意味がない。三国とも党派性の脱編成現象が生じる。ベルギーやデンマークでは、政党と有権者の結びつきが弱体化する。

オーストリアは上記の中間グループの代表国である。変化の徴候は示されるが、政党システムの基本的な再構造

化の指摘はない。最近までオーストリアは拡散と脱集中が見られない国と見なされた。一九四五年以降、オーストリアは二大政党（国民党、社会党）の絶対的安定とも言える支配によって特徴づけられたし、近年では選挙ごとの「変動票」の低さゆえに、強い政党への一体感が存在する、と考えられた。ところが、オーストリアでも、一九八〇年代に拡散化と脱集中化の傾向が現われ始めた。二大政党の得票率の低下、選挙ごとの増大する「変動票」、凋落しつつある政党への一体感、増加する政党の細分化（政党数の増加）などの現象が見られるようになった。それにもかかわらず、二大政党は比較的安定する、と言える。別の場合ではスウェーデン、スペインなどでは大政党の相対的に安定が見られる。

多くの変動は政党をめぐる環境と状況に影響する。これは政治的アジェンダに関連するだろう。例えば一九八一年にはイギリス労働党内の分裂は、党内の左派と右派の抗争をそれまでの党内の意思統一を取りまとめなければならぬという「選挙上の制約」を抑制したが、社会民主党を結党した労働党員の離党で解決した。ベルギーでは断片化した政党システムは言語をめぐる争点から派生した。ドイツの緑の党の登場は脱物質主義の影響と政治文化の変化に起因する。緑の党は、社民党が一九八二年政権離脱後に急進的な精神を失わなければ、選挙において成功しなかった。

ここで分析する際に注意すべきは、すべての場合に「特殊な環境（special circumstance）」を根拠にすると、またはある段階で生じる変動を引き金程度と過小評価したり、あるいは歴史のある時点の「物音」を過大評価したりすると、全体の流れを誤解する可能性が生じることである。

選挙ごとの投票行動の不安定と求心的な政党間競争は、左翼と右翼の立場を区別することの不適切さを指摘してしまう。自己の利益が凝集的な社会集団によって代表されないなら、過去のような対立をもって再現されないだろ

う。各国社会に根づいている、歴史的に持続してきた社会的亀裂構造は、人々の帰属意識を生み出し、それに応じた態度・行動を促してきた。ところが現在、あまりに多様な変動が人々に影響するため、選挙において特定政党に支持を統合できないことが指摘される。第三段階では個人と社会、支持者と政党の間をつなぐ社会的亀裂に基づく社会集団を媒介した結びつきが劇的に弱まったかもしれない。

社会集団は特定利益に固執しがちであり、各集団利益を統合し調整する政党はある方向に引っ張られる傾向にある。その点では、社会的亀裂は各国の政治事情に根づく、と考えたほうがよい。もちろん、それは、図2のIの時代のように絶対的でなくなった。例えば、たとえ宗教的な勢力に対応する政党が中道・右翼近くに配置されることは支持者の支持構造の変動結果でもあることを留意しておかなければならない。それは投票行動とそれに対応しようとする政党（編成）の対応である、と考えられる。例えば中心と周辺の亀裂では、地域主義者やエスニック・ナシヨナリストの運動も中心と周辺の対立で考えれば、その対立を測る尺度とは、国民国家の枠組みそのものを問題にすることとか、国家内の社会経済的な格差から自らの存在が不当な差別を受けることへの抗議を表現するからとかが考えられる [cf. De Winter and Tursan, 1998]。

地域からの抗議運動は、戦後の政党システムの脱集中化を導いた。その注目すべき例は、マイノリティ・ナシヨナリズム、エスニック・ナシヨナリズムなどと呼称される存在である。それをスペイン、ベルギーなど先進国だけでなく第三世界の国々にも散見される現象である。このサブ・ナシヨナリズムの持つ潜在的な能力は過小評価すべきではない。いわば、エスニシティやマイノリティは自らの集団への忠誠心にもとづいた形を取っており、単にある限定した場所でなく、どの国々でも生じる社会変動の起因となりうる。例えばベルギー（フランドレンとワロン）、スペイン（カタルーニャとバスク）、カナダ（ケベック）にエスニシティに関わる亀裂（言語、宗教、地域、文化などの亀裂）

は主に言語をめぐる紛争であるとしても、宗教的分裂に結びついている。エスニシティはナショナルなアイデンティティを分裂させることもある。実際にこのような事例は枚挙をいとわない。例えば、二〇一四年スコットランド独立をめぐる住民投票、同年スペインのカタルーニャ独立投票をめぐる支持多数などがそうである。

二、選挙変動と左—右次元の有効性

先進西側諸国の特質を表現する方法のひとつである左翼—右翼で測る一次元の尺度に、さきに述べた「政治システムは求心的だが、政党システムは不安定である」という新しい現象を当てはめると、適応しづらいことがある。拡散化と脱集中化へ向かう現在の傾向は、左—右の次元では測りかねないことを指摘でき、また測定基準の再定義を必要とする。西ヨーロッパ政治における「新しい政治 (new politics)」の衝撃は否定されそうにない。そうすると、それは便宜上、左翼のカテゴリーに入れるのが通常であるが、左—右の次元で整理すれば、という旧来の一次元的測定での結果である。現在の現象をどのように理解すればよいのか。また、左翼・右翼による位置づけは有効でなくなったという疑問が浮上する。

しかし、左—右次元の規準が必要な理由は次の事情があるからである。

- ① 各国の社会階級に関係する社会的亀裂は持続する。
- ② 社会階級をめぐる争点を論じる場合、社会民主主義政党や共産主義政党の対応能力を過小評価すべきではない。やはり依然として、労働者階級の立場を判断する際に、左—右の次元は説明として有効である。
- ③ 政党は自ら左翼か右翼かの条件で自己の存在場所を示したうえで、他党との差別化を図ろうとする。
- ④ 政党間競争力と連合パートナーを見出す際には左—右軸のどこに位置するかを示すことは、どのような政党の

立場と連合を組むかどうかの判断材料となる。

この四つの規準は、政党システム内での政党の位置づけを確認する際に、有権者が持つ政党への認識次第によって、さらに強化される場合も考えられる。この次元に他の規準（例：争点）を追加することで、多次元的な視点からの配置が有効となったとしても、政党間競争を左翼の立場か右翼のそれかという一次元的な規準は、大ざっぱだが、理解しやすいはずである。

①から④までの規準は先進西側諸国の政治の左―右次元の視点を説明している。政党間競争の求心的性格は、政党に一方において政治的に極端な主張を弱めさせるし、他方において競争上の幅広い支持を得るために、自らの綱領・公約・方針などを穏健化させることになった。結果的に、左―右軸の幅は縮小傾向にある。大ざっぱに述べれば、包括政党化して二つの大政党だけに収斂しそうである。社会経済の主要な争点は依然として存続するとはいえ、多党化しても分極化状況にはなりそうにない。ということは、既成政党間の票の移動はより容易となるので、選挙結果は激変する可能性がある。

有権者は特定の争点に優先順位をつけて、以前よりもより自由に政党を選択することが可能となったようである。また、争点ごとに政党支持を変更する可能性があることになる。それらの争点（その背後にある社会運動）が組上のせられると、左と右の立場に分けるといふ伝統的手法を使用しがちとなる。しかし、その論点には適用しがたい点が多く存在する。例えば、平和、環境保護、反核・反原発、フェミニズム、少数民族の主張・運動などがそれである。これらの争点は政党を分けるラインを超える事柄であり、それらは古い社会的亀裂構造とは一致しなくなっている。同様なことはエスニック政党にも適用できるかもしれない。

争点政治ともいえる判断はその時その場で変化する。その判断は本質的に異なる分節化された集団 (sectional group)

には別次元の問題である。その争点についての優先順位は任意の選別 (random collection) として取り扱われる。これは、全体的な視点からすれば、支持構造の点では脱構造化に移行することになる。有権者は争点ごとに政党支持を変更するかもしれない。それは「政治の先行きが読めなくなる」状況を作り出す。

「新しい政治」の概念は、左―右次元で測る伝統的政党の「古い」政治への反発を示す。「新しい政治」の具体的な表現形態は、経済成長と物質主義的な価値観に反対する脱物質主義の価値観に基づく [Inghardt, 1977]。その考え方には、自己実現、コミュニティ内での協働関係、社会参加の徹底などといった、従来の社会的、伝統的な束縛からの解放をめざすリベタリアニズム (libertarianism) がある。社会参加を促進する文化は、議会制民主主義とそのシステムを支える政党幹部によるエリート主義的な非参加構造に批判的である。だから、エリート主義と既成政党を拒絶する。「新しい政治」は、特定争点を推進する手段として、それに自己の目的の達成手段として直接行動を採用しがちとなる。「新しい政治」からすれば、現在の左―右次元は「古い政治」次元の発想の域を出ない。それゆえ、「新しい政治」は左―右次元を否定する反エスタブリッシュメントな立場を代表する。

西側先進諸国において、環境保護政党は選挙結果においては「控えめ」といえども、社会に大きな衝撃を与えている [Miller-Rommel, 1989]。だが、「新しい政治」は社会変動のひとつの事実とみられるので、それは歴史上何度も見られた社会変動の一種と同様の現象とも考えられる。だから、これを過大評価することは注意を要する。社会運動は既成政党と連結せずに自らの直接行動に依拠する。このことは「新しい政治」を新しい政党形成の源泉と見なされないかもしれない。

「新しい政治」は社会の触媒的な存在と見なせる。それが現在の社会に新しい刺激を与え、社会に変化を促すからである。もちろん、「新しい政治」は、左と右のいずれに帰属するかという意味では、環境保護政党は環境や資

源の保護やそれに関連する争点で既成政党政治に挑戦し、社会変動をもたらす点で左翼政党と見なされる。なぜなら、社会的な「束縛」からの解放と人々の平等のような理念を追求する観点からすれば、伝統的な左翼政党と同じ思考を持つ、と見なせるからである。

もともと政治的表現として、「平等」の概念は多くの解釈が可能である。西ヨーロッパ政治では、戦後の「社会民主主義的合意」を厳しく糾弾するネオリベリズムに対抗する効果的なアピールを必要とするとき、旧来の左翼や社会民主主義の諸政党とは別の「平等」を掲げた政治勢力の一翼を担うと理解される。もちろん、「新しい政治」からのイデオロギーの吸収が簡単には可能でないことも留意すべきである。なぜなら、左翼政党が共有する「古い政治」の優先するもの（例…持続的な経済成長）は必ずしも「新しい政治」の脱物質主義的価値観と共鳴できるとはかぎらない。

現代の西側先進諸国の政治は「流動中」にある。とりわけ、左翼陣営での「再建」という点では困難な事情を反映する。左翼政党は、いわば求心的競争という圧力を受けて身動きできなくなった、と考えられる。反対に右翼政党はその経済観となった「市場の力（market force）」の哲学を公然と声高に主張できる。

社会的・経済的な考えに捉えられると、①脱中央集権化・分権化に応じられないこと、しかしそれにこだわると、②中央集権国家の場合、そのシステムから疎外を甘受しなければならないこと、になる。

左翼と右翼の概念は過度に単純化された政治的現実を表そうとする。既成政党組織や政党間の区分線は、「政党への一体感」が低下し、争点投票の判断が政党への一票に置き換えられるときに、政党が有する過去からの遺産が明らかになる。そうすると、現在の西ヨーロッパの政党システム論をうまく説明できる規準が構築できていない、と判断されるだけになる。

三、政党システムの変化と政治的安定

先進西側諸国における政党システムと投票行動を整理しておこう。

- ① 三段階のアプローチはその歴史的文脈、つまり各段階における変動をマクロの視点から評価できる。
- ② ある段階から次の段階への移行において、前段階からの継続性は次段階で生じる変動の性格に影響する。
- ③ 左翼と右翼の概念は、社会的亀裂＝政党とともに、政治的な立場の判断基準として、まだその有効性を示す。
- ④ もちろん、その規準は硬直的でなく、弾力性を持ち、新しいイデオロギーとの調和を図る点もある。

現在の投票行動は「変動票」の増加と政党関与 (party commitment) の低下を指摘されることがある。西側先進諸国政治の再構造化の点では、確かにその傾向が存在する。ただ、注意すべき点として、社会変動はどの時代、どの社会、どの国でも起こることである。現時点での生起が常に普遍化・一般化できるとはかぎらない。歴史を考察する際には、その時だけの事象を「誇張」する危険性を考慮しなければならない。「流動性」や「変動」といった表現は、注意して取り扱わなければならない。

投票行動と政党システムの変化は、民主体制の存続に影響する点では大きな問題である。当然、それだけで民主体制を説明できるものではない。ただ、政党政府は選挙における支持に依拠する。選挙ごとの「変動票」はその時々々の政府に影響すると同時に政治システムの不安定化を引き起こしかねない。さらに短命政権の連続はマイナスの効果しか生じないかもしれない。その非連続性は不満あるインモビリズム、または継続的に変動を生じさせる。第三段階の特徴は、政治システムが求心的にもかかわらず、政党システムが不安定であることであろう。その不安は将来、政治システム、さらに社会システムにそれを伝搬するかどうかである。

もちろん、「システム危機」の可能性は完全に否定できない。ところが、「変動」という言葉を使うなら、政治シ

ステムとしてより、むしろ個々の政党が有権者から変動票という形で、挑戦を突きつけられていること自体にもっと注意すべきであろう。既成政党は選挙の変動の矢面に立たなければならない。つまり、社会的亀裂の有効性の低下による。具体的には、次の二つの事柄に対応を示さなければならない。

① 政党に対しての有権者の変化する意識を考慮する。

② 右翼と左翼の条件において、自己の立ち位置を再定義・再確認しなければならない。

もちろん、この二つの課題が相互に関連することは明らかである。どのような種類のイデオロギー・ポジションが有権者に魅了するかどうか。すべての既成政党による二つの課題への対処が失敗に終わると、確実に政治的混乱を招くだけになる。しかし、そのシナリオは現実化しそうにない。なぜなら歴史の経験振り返れば、西側先進諸国の政党は時代を画する原動力になってきたし、また変動への適応の技術に十分長けた努力を払ってきた経験があるからである [Smith, 1990]。

第一章 社会的亀裂—政党支持の確認

一、亀裂の意義

私たちが現代ヨーロッパ政治で強調されるべき現実の実態を考える際に、亀裂概念がもつ意味について明確にすることは重要である。以下、メアが示唆する観点から再度、確認しておこう [Collegger, Laver, Mair, 2001: 235-236]。例えば、一九八〇年代の冷戦時代に核ミサイル配備に賛成する人々と、それに反対する非武装主義者との間に対応がある。この核ミサイル配備の賛否の争点は、リップセットやロッキンが亀裂を意味する点とは異なる。亀裂はもっと明確な意味がなければならない [Bartolini and Mair, 1990: 12-19]。亀裂は三つの特別な意味をもつ。

① 亀裂は人々を分ける社会的分割を含む。例えば、職業、地位、エスニシティのような社会構造的な特徴を条件として区別できることを表現する。したがって、亀裂は、労働者と雇用者を区別するし、カトリックとプロテスタントを分け隔てる。ベルギーでワロン語を話す人々とフランデレン語を話す人々と区別する。その意味では、例えば核武装をめぐる分裂した意見の相違を亀裂として取り扱うことができない。

② 分割に含まれる集団は、例えば労働者か雇用者かのように、集団的アイデンティティを意識しなければならぬし、それを基礎に行動する。この集団的アイデンティティの意味は亀裂の出現と維持においては決定的に重要である。それなしに「客観」的な社会的分割は社会的亀裂に変容されたりしない。例えば、男女のジェンダーの分割が社会的な分割のひとつであるとしても、広範囲なフェミニズムの意識が社会に反映するにもかかわらず、ジェンダーの分割を集団的ジェンダーとして転換することが可能かどうか。

③ 亀裂は組織的な用語で表現されなければならない。これは、分割の一方にいる人々の利益にフォーマルな制度的表現を与える。それは労働組合、教会、政党、その他の組織の活動の結果として達成されなければならない。例えばイギリスでは全国的ではないが、スコットランドやウェールズの特異なエスノ・ナシヨナリストの政治的表現を集団や政党の形で体现する。

三つの亀裂の構成要素のそれぞれは重要である。なぜなら、これらはどのように亀裂が持続し衰退するのかを理解するうえで有用であるからである。社会の亀裂構造での変動は、その結果として、そして亀裂を認識する人々が集団的アイデンティティの意味の変化の結果として、亀裂が団体や組織を通じて強調する社会的分割で生じる。西ヨーロッパの近年の経験は三つすべての構成要素の中での変化の証拠を示す。

リプセツとロツカンは、西ヨーロッパの伝統的亀裂構造に関して、西ヨーロッパの政治発展の分析した際に、

四つの主要な歴史的な亀裂の相互作用から生じた、と論じた [Lipset and Rokkan, 1967]。第一は（国家と国民の中心にある）支配文化対（周辺にある）従属文化を分ける亀裂である。第二は国家と教会を分ける亀裂である。第三は第一次経済（農村）対第二次経済（都市）を分ける亀裂である。第四は雇用者と労働者を分ける亀裂である [Lipset and Rokkan, 1967:13-26; Rokkan, 1970: ch. 3; 古田、二〇〇八；古田、二〇〇五]。

二、変化する社会構造

一九六〇年西ヨーロッパ社会では、経済の三つの主要部門における雇用では、農業が平均三四%、製造業が四〇%、サービス業が二六%であった。一九九五年にはこれら三部門はそれぞれ二一%、三一%、五六%に変化した。一九九七年の国内生産では、農業は四%以下、工業二八%、サービス業六八%である。これらの雇用人数と生産での変化は政治と政治的代表制に影響する。

イングルハートは民主的シチズンシップのモデルのための理論を提供する [Inglehart, 1977]。彼はエリートの挑戦する行動 (elite-challenging action) の拡大を脱物質主義的価値の勃興に結びつけた。そのことは政治において、個人を中心的存在とみなす「自己表明価値 (self-expression value)」と直接参加を強調する。彼は、西側民主国で戦後世代を特徴づける人々の存在意義を確保する安全と認知的同意の帰結として、脱物質主義的価値の登場を説明した。彼は社会的近代化が非民主的体制での脱物質主義的や「新しい政治」を生じさせる、と論じる。それは権威主義からの脱正当化とそれからの解放を主眼とする [Inglehart, 1990; Inglehart, 1997]。

新タイプの「自己表明価値」や脱物質主義的な価値の持ち主は、代表制民主主義が忠実な市民の支配を当然視する視点に疑問を引き起こした。実際、エリートの挑戦する政治と脱物質主義的な価値に結合する過程は代表制民主

主義と緊張関係になる。政治的党派的な競争が物質的な再配分を基礎におく経済的亀裂に対して、一見すると個人主義的な「生活様式 (life style)」の焦点をおくように思われる。このことは、一方で反移民・難民や伝統的価値で動員する新しい極右政党の立場であり、他方で環境保護や「新しい政治」の争点化で動員をもくろむ「新しい左翼政党」を登場させる [Kitchelt, 1989; Norris, 2005]。さらに、選挙参加、政党との一体感、制度への信用、民主手続きへの満足感、脱産業民主主義国では、凋落している。しかし、政治システムとしての民主主義への支持や民主的規範への愛着は安定的で増加している [Dalton, 2004; Norris, 2011; Dalton and Welzel, 2014: 8]。これは第八、九章で取りあげた第三段階の内容を示すようである。

W・アウスウェイトは、M・ウオーターの三つの範疇を紹介する。第一段階は「経済的な階級社会 (class society)」と呼ばれる古典的モデルである。この枠組み内で下位文化の対立が生じる。第二段階は「組織的な階級社会 (organised-class society)」である。制度的な代表制が国内的な分化と職業上の下位文化の凋落を補償する。社会階級は市場の断片化と進展する社会分業にかかわらず、その延命に着手する。労働組合、政党、階級といった上部構造は支配的な社会的な構造上の役割を担当する。第三段階は「ポスト階級社会 (post-class society)」の出現である。この段階の社会は生活様式や価値にもとづく地位 (value-based status) を配置される。新中間層は可動的、流動的な知的資産を基礎とする。この段階の政治は階級を基礎とすることを中止し、そしてアイデンティ、生活様式、争点にもとづく政治が左翼と右翼の次元よりも重要になる。「ポスト階級社会」は分化、不平等、対立を残存するが、予測できない移動が進行する [Outhwaite, 2000: 108-110]。つまり、この第三段階は現在進行中である。大ざっぱに述べれば、亀裂の維持に力点をおく立場は第二段階をまだ想定していそうだが、変動論を強調する立場は第三段階を強調する。過去半世紀では、人々の生活の著しい変化がある。様々な部門での技術変化、経済的近代化などが多くの伝統的

な社会的境界を浸食していった。人々はより繁栄した結果、高等教育を受けることができ、生活様式を収斂させて、それまで人々を分け隔てた分割線があいまいになる傾向があった。例えば、一九六〇年には西ヨーロッパの女性の雇用は平均三一%であったが、一九九〇年までに四〇%以上になった[Lane, 1997: 37]。別の変動指標は伝統的な労働者階級に属する数の減少を示す。労働者階級の比率は、西ヨーロッパの一九六〇年では平均五〇%から一九九五年の四〇%に低下した。オランダでは、五四%から三六%に、スウェーデンでは五四%から三五%に、イギリスでは六一%から三三%に低下した。

一九六〇年代とそれ以降での変化するのは経済的範疇だけではない。宗教的アイデンティティと実践の衰退は次第に西ヨーロッパ社会をより世俗社会に向かわせた。この変動は価値の対称性を顕著に現わした[Inglehart, 1990: 191]。古いコーホート(六五歳以上)で調査された八三%は「宗教を信じる人間 (religious person)」と自らを規定するが、若いコーホート(一五から二四歳)では五三%であった。その時点までに宗教的实践者は大幅に低下した。例えばイタリアでは、一九五六年から一九七六年までカトリック教徒の定期的な教会出席者は六九%から三七%に減少した。西ドイツでは、一九八〇年代有権者の二五%だけが定期的に教会に出席した。一九五〇年代には四〇%、カトリック教徒のみでも定期的出席者同時期に五〇%から三〇%に減少した。アイルランドでも、教会出席者は一九九〇年八一%から一九九四年六七%と激減した。

オランダでは、世俗化過程はもつと顕著であった。宗教的アイデンティティと実践はオランダの文化の重要な構成要素である。宗教的相違の寛容によって、カトリック、プロテスタント、カルヴァンという三つの主要宗派の「柱状化」した分割するが均衡状態が維持されていた。一九五九年三宗派に有権者の約七五%が属していた。さらに、これらの宗教的な所属は名目的以上のものであった。同年、有権者の五一%が定期的に教会活動に参加してい

た。そのうちカトリック教徒は八七%、カルヴァニストは八八%であった。一九五九年時点ではオランダは典型的な「宗教国家」であった。ところが一九八六年までに、この数字は劇的に変化した。名目的な宗教的支持者は有権者中、五二%であったが、宗教的实践は実質的に低下した。有権者の一七%が教会に出席にするにすぎず、そのうちカトリック教徒は二六%となった。表現を換えれば、オランダは実質的に「世俗国家」になった。

三、変化する投票行動の再検討

多くのヨーロッパ諸国の社会構造の劇的な変化に加えて、特定集団と政党の間の一体化が衰退している。言い換えれば、労働者と宗教実践者の減少のために、集団的な党派選好が衰退する。その変動のはっきりした徴候のひとつは、伝統的な社会階級の左翼と右翼のいずれかの選好を報告するサーベイ・データに反映する。たとえ労働者が減少したとしても、伝統的亀裂が依然として支配的なら、左翼と右翼の政党への選好を維持することが予測できるはずである。そしてたとえ有権者中に中間層が多数存在するとしても、それは単純に考えれば、中道や右翼の政党を選択するはずである。様々な階級の選好を調べる方法は「アルフォード指標 (Alford index)」である。左翼への支持が中間層の間より労働者の間のほうが多い程度を測定した [Alford, 1963]。例えば一九五一年イギリスでは、アルフォード指標は四一%と高く、この数字は筋肉労働者 (六三%) から非筋肉労働者 (二二%) を差し引いた結果である。指標数値が高ければ、階級投票が顕著である。労働者は左翼政党に投票しがちで、他の階級は中道政党か右翼政党に投票した。アルフォード指標で測定した階級投票が戦後の時代とともに実質的に低下傾向を示した。一九六〇年以前の平均三七%から一九六〇年代には二九%、一九七〇年代には二四%、一九八〇年代には一九%に次第に低下した。階級投票は半分になった。例えばイギリスの一九六四年選挙において、保守党はサービス部門に属す階級から

労働党より四七％多く支持された。一九九二年労働党は三二％であつた。労働党は熟練労働者の支持を四五％から一三％まで票を減らした。保守党はサービス部門中の低い階級から四一％から二九％まで票を減らした。一九九七年までこの集団は労働党を支持した [Evans, 1990: 90; Evans, 1999]。したがって、中間層の中核と労働者階級の中核は伝統的な投票嗜好を続けている。それぞれの中核部分の凝集性が衰退することを反映することがあるとしても、投票行動は一般的な社会構造的な変動と一致するとは予測しがたい。

宗教的分割は、特定の国々でのみの政治分野の一部としても、類似したパターンは宗教と党派嗜好の関係がある。伝統的な投票行動への宗教の重要性を過小評価すべきではない。宗教的相違が宗教政党の嗜好が示すようよりもっとインパクトを実行する。宗教的相違は政党が関係する世俗の状況においても政党選択を決定する。

例えばフランスでは、一九五〇年代前半カトリック政党 (MRP) の凋落は投票行動での影響力で宗教の低下を意味しない。一九七八年調査によれば、教会に出席しない人々の二〇％に対して。定期的な教会出席者の五〇％以上が中道右派政党を支持する。「世俗」政党間の政党選択でのヴァリエーションの約二〇％が教会出席者によって説明される、という対照的な結論が出ている。一九六〇年代の調査結果は、宗教分割が実際に社会階級よりも政党選択で強いインパクトがあることを示す [Lijphart, 1979]。

もちろん、世俗化傾向は社会構造の傾向を表現する。例えばオランダでは、一九五〇年代カトリック教会は信者の日々の生活に積極的に関わっていた。実践的なカトリック教徒の多数がカトリック人民党 (KVP) を支持した。一九五六年第二党であつたKVPは実践的なカトリック教徒の九五％から支持を得ていた。ところが一九七七年までにKVPは実践的なカトリック教徒の六七％の支持にまで低下した。それ以来、オランダのカトリック教徒は自己の政党に投票しなくなった。KVPは一九八〇年にプロテスタント政党と合併しキリスト教民主同盟 (CDA) の

一部となった。

現代の西ヨーロッパの労働者と教会出席者は、伝統的な社会構造的なアイデンティティを維持する人々の間でさえ政治的凝集性を低下させるとともに、伝統的な社会的亀裂の役割を放棄したのであるか。このことは、個人の選好が政党選択の基盤として集団の一体感を置き換えてしまうかもしれない環境を作り出す。現代のヨーロッパでの重要な二つの下位文化（階級・宗教）が浸食された結果である。

他の要因はこの方向にヨーロッパの有権者を促進させる。例えば、一九八〇年代に政治的に洗練された有権者が登場した、と指摘する見解がある [Dalton, 1988: 182]。この新たな有権者は高等教育を受けている。政治的な情報をテレビから得ている。これが下位文化の基盤より、むしろ個人との政治へと関係づける。この傾向は、住居、健康、ケア、自動車所有などの消費の私化 (privatization) への移行において複雑になる。西ヨーロッパでの党派選好パターンとなる個人主義的な政治判断を推進する。これはアメリカのそれに類似する。

M・フランクリンらは、比較の視野から階級と宗教を含む社会構造と投票行動の関係の根本的な弱体化が原因だと結論づける。一九六〇年代末から一九七〇年代初めの社会構造変数（階級、宗教、ジェンダー、労働組合加入の有無、教会出席など）が作用した投票での変化の平均二三％を説明する。この数字は一九八〇年代半ばまでに一五・一％にまで低下した。イタリアのみが一九六八年の二四・四％から一九八八年の二八・五％と例外的に増加する。しかし、全般的な低下傾向が続く。とりわけデンマークでは、一九七一年の二三・〇％から一九八七年の九・〇％、アイルランドでも一九六九年の一・二％から一九八七年の一・六％と激減する。これらの変動は伝統的な亀裂構造そのものの変化によって、新たな亀裂の出現を予想させる。この現象は増加する「自己中心主義 (particularization)」と「個人主義化 (individualization)」の結果であり、伝統的亀裂が党派性への影響が減退することが指摘される [Franklin Mackie,

1992: 406-431]。

ところが、亀裂は、①個々の社会的基盤、②集団的アイデンティティ、③組織的表現の三要素で維持される。亀裂は、投票が手段的な選択の反映であるより、むしろ社会的アイデンティティの表現である下位文化を通じて維持されている。

伝統的な分離線 (demarcation) が西ヨーロッパではあいまいになっている。階級分割が明確でないし、世俗化の進行が宗教分割からの衝撃を緩和してきた。伝統的な社会集団が残存するも、人々の行動が集団的でなくなってきた。そして、集団間の政治的選択についての伝統的ヴァリエーションは衰退する一途にある。これらの変動への対応として、政党、とくに新たに登場した政党は、特定の投票集団と有権者にアピールし始めた。要するに、構造化されなくなった有権者、政党選択の断片化、「自己中心主義」への傾向が示唆される。

しかし、二つの点に留意する必要がある。第一に階級と宗教がその影響力を完全に消滅させていない点である。新しい変動現象は、一九五〇年代から一九六〇年代までの事例よりも投票行動へ衝撃を与えていない、とする見解がある。例えばイギリスでは、第三次産業に従事する新中間層は依然として保守党を選択する。そして、熟練と未熟練の労働者は相変わらず労働党を選択する傾向がある。徐々に世俗化したオランダでは、減少する宗教実践者は C D A に投票する。

第二に階級や宗教が投票のきっかけ (cue) を提供するとはいえ、他の亀裂は強力な影響力を発揮する。スペインのバスクの大部分の投票者がバスクの地域政党に投票する。北アイルランドのカトリック教徒の大部分はアイルランド・ナショナリズム政党に一票投じる。スウェーデン語のフィン族のほとんどがスウェーデン人民党を支持する。ベルギーでは事実上、フランでレン語の投票者フランでレンゴ系政党に、ワロン語の投票者はワロン語系政党を支

持する。ノルウェーの中心―周辺の亀裂は、ヨーロッパ連合（EU）へのノルウェー加盟問題で再覚醒した。イタリアでは、北部同盟の動員のきっかけで南・北の対立が再活性化した。階級政治がイギリスで消滅しつつあると言われるが、エスノ・ナシヨナリズを主張するスコットランド、ウェールズでは、保守党のアピールを通じて、イギリスのナシヨナリズムが重視される。

R・J・ダールトンは、先進民主主義国の選挙変動の議論において、西ヨーロッパ政治で生じる変動の性格を説明し、政治的帰結を予測する二つのモデルを提示したことがある [Dalton, Flanagan, and Beck, 1984; cf. Dalton, 2004]。伝統的から新しい亀裂が出現するので、投票者は「再編成 (realignment)」過程に進む。これは「新しい左翼」だけでなく、「新しい極右」への支持者のことも表わす [Givens, 2005; ch. 3; Norris, 2005; ch. 6; Kitschelt, 1995; 275-279; Becher, 2013: 95-103]。

その結果、そのことが政党の役割低下に集中する。脱産業社会で起こる新しい争点や関心を考慮して、政党はますます不適切になった。市民は、それぞれの要求を満たすために、利益集団や社会運動に依存するようになった。その結果、「脱編成 (dealignment)」過程が成立するようになった。階級や宗教のような亀裂が低下することを強調する。再編成のテーマは脱物質主義の関心（「生活の質 (quality of life)」）の増大による。脱編成のテーマは有権者がより非社会構造的になることを意味する。例えば、新旧のタイプの極右政党を分ける見方がある。旧タイプは歴史的な物質主義的な対立を反映するが、現在の新タイプは脱産業時代の脱物質主義的な対立を「新しさ」に設定する [Bornshier, 2010: 33ff; cf. Ignazi, 1992; cf. Ignazi, 2003]。

第一二章 脱「凍結」化現象の証明

一、再編成に向けて？

リプセツとロツカンが政党システムの「凍結化」について論じたが、それに対して「脱物質主義」「新しい政治」の見解は脱産業社会で起きる、新たな争点が新しい亀裂の出現を反映する、と論じる。新しい亀裂は、伝統的な亀裂のように、「社会的基盤、集団的アイデンティティ、組織的な表現によって」特徴づけられる [Alber, 1985; Alber, 1989]。第一にこの新しい亀裂は新しい中間層内の社会的基盤と結びつく。とりわけ若い高学歴の有権者に拡がっている。第二に「新しい政治 (new politics)」の価値ははっきりする。特に環境保護、フェミニズム、民主的・社会的権利の拡大に力点を置く。言い換えれば、イングルハートが「脱物質主義」と「脱近代主義」として論じるものである。第三にこの「新しい政治」は組織的表現の出現によって徐々に浸透して社会に反映される。もともと代表的な存在が緑の党 (Grüne) や「新しい左翼 (new left)」である。脱物質主義として知られる政治勢力が新たな亀裂を構成する、と述べられる。政党政治の再編成を含む動員がその意味である [Inglehart, 1984]。

このシナリオが二つの理由から誇張される。第一理由は、「新しい政治」と結びつく争点のいくつかの反響にかかわらず、これらの新しい政党が政党システムでは「周辺のな存在」である。緑の党は一九九〇年代に西ヨーロッパにおいて平均五%を得票していない。この数字は様々な政治的ヴァリエーションを作り出すほど、または影響するほどの勢力にはなっていない。短期的にも、投票者編成においても劇的な変更を起こしたわけではない。

第二の理由は、当初の主張にかかわらず、「新しい政治」と結びつく政党のアピールが伝統的な政党のそれとちがわないことである。「新しい政治」が大衆政治の新しい次元を代表するようには考えられない。むしろ、左翼陣

党内での新たなヴァリエーションとみなすことができる。その初期の結党において、緑の党は自己の立場を「左翼」と「右翼」のような条件におくことを回避（拒否？）したはずである。

したがってベルギーとドイツでは、緑の党は既成の左翼政党と協力し、例えば社会民主主義政党と連合政権の一角を形成する。同様な事象はフランスやイタリアでも見られる。オランダでは、緑の党は、緑・左翼の選挙共闘を形成するため、「現在では緑の党は左翼の政党として自覚する」[Ponit, 1988]。

要するに、仮に脱物質主義の関心が西ヨーロッパ政党システム内の変動のための潜在能力（potential）を示すなら、このことは制限的な範囲内での再編成でしかない。つまり、本質的な基盤をそのままにして、左翼・右翼の環境を変えるにすぎない。

「新しい政治」には、ジェンダーは脱物質主義の関心でもある。ジェンダーへの不平等は新しい亀裂を構成せず、むしろ古い「左翼・右翼」の分割に結びつき、そしてその中の左翼陣営に吸収される [Evans, 1993]。左翼・右翼の分割の尺度はしばしば流動的であり、この流動性のため区分そのものが状況的である。現実の左翼と右翼の「適応性（plasticity）」は一貫性と柔軟性に結びつく。つまり、新しい争点は吸収され、挑戦を回避することになる [Smith, 1989: 150]。社会民主主義は、一九一七年ロシア革命の共産主義の動員によって、そして一九六〇年代後半から一九七〇年代にかけての緑の党からの「挑戦」も適応能力がある。

右翼陣営では、キリスト教民主主義政党票の低下とわずかな自由主義政党票の増加が継続的に変化を生じさせてきた。その意味では、「新しい政治」は成功を収めてきたかもしれない。極右政党は、オーストリア、ベルギー、デンマーク、フランス、スイスでは、一九六〇年代では一%以下であったが、一九九〇年代以降六%以上を獲得するようにになった [Givens, 2005: ch. 6]。現在、極右政党は支持を伸ばすようだが、いつまでこの状況が続けられるの

か。

左翼と右翼での意味を考える場合、もつとも注目すべきは戦後数一〇年を通じての持続的な変化がある。個々の国別ではその多様性がある。さらに、左翼陣営内と右翼陣営内の両方ではヨーロッパ・レベルでの変化がある。両陣営内での限定的な流動性がある。

過去半世紀を通じて、左翼政党の家系での選挙支持の平均レベルはほぼ変化がない。一九五〇年代には四一・五%、一九六〇年代には四〇・五%、一九七〇年代では四〇・九%、一九八〇年代では四一%、一九九〇年代では四〇%である。この数字の変化のなさは、社会、経済、文化の変容にかかわらず、大きく変化していない。もちろん、注意すべきは左翼陣営内での個々の政党間での票の移動がみられる。社会民主主義政党は一九九〇年代までの戦後五〇年間で約四%低下するが、共產主義政党は四%以上低下する。この減少は新しい左翼政党と緑の党に移動している。この意味では断片化が大きくなれば、共產主義政党がより適応能力ある緑の党や新左翼に替わるので、様々な左翼政党の同盟が可能になる。左翼陣営は現在、以前と比べ変化せず、必ずしも弱体化したとは言えない。

中道と右翼の勢力では、時間の経過があっても、継続性があることが特徴的である。中道と右翼の政党は一九五〇年代では五四・七%、一九六〇年代では五六・四%、一九七〇年代では五五・二%、一九八〇年代では五六・四%、一九九〇年代では五五・五%の支持がある。もちろん、中道・右翼陣営内でも明らかに支持は流動化する。保守主義政党と農民政党は多少ともヨーロッパ・レベルで変化しないが、キリスト教民主主義政党はほぼ三分の一まで落ち込んでいる。世俗化したヨーロッパはキリスト教民主主義には適さない。ただ、キリスト教民主主義政党は、保守主義政党が不在化弱体化した国々では、保守主義政党に位置づけられる。また、その一部は自由主義に移動し、その大半は極右勢力に流れている。この現象自体は不安な展開を示すのではなく、右翼陣営内での移動である。

ので、右翼陣営全体を崩壊させるわけではない。だから、多くの極右政党は連合パートナーとはみなされない。したがって、その成功の効果は左翼陣営に近い中道政党や保守主義政党をより右の政策を取らせる。それは右翼陣営の戦略的立場を変更させることになる。

以上を要約すると、仮に編成が左翼と右翼の間の基本的な区別線が消滅し、左―右に票が行き来するようなら、そうすると完全な再編成が生まれる。このことは新しい現象ではない。それは戦前に経験した現象である（例…ファシズム、ナチズム）。

仮に左翼政党と緑の党の「新しい政治」について異なる何かがあるなら、そして右翼陣営において、仮に「新しい右翼」政党の動員に特徴づけられるようにならない限り、西ヨーロッパ政治での新しい亀裂が出現したとは述べれない（cf. Mudde, 2007: ch. 12, 13）。新しい左翼も右翼も、その成功にかかわらず、国民からわずかな支持を得るだけであるからである。極右政党、緑の党、新しい左翼と右翼の支持は、一九九〇年代では一三%以下である。言い換えれば、それらの政党はキリスト教民主主義票や社会民主主義票の一部を奪い取ったのである。

二、脱編成に向けて？

西ヨーロッパ政党システムの「脱編成（dealignment）」の議論は三要因の議論となる。第一に投票者が政党と一体化し、政党に投票する場合が減少した要因にある。第二に新しい政党の出現とそれへの選挙支持での増加がある。第三に選挙の変動票が上昇している（Mar. 2000）。三要因を論拠とする議論に関する主張は伝統的政党の支配（hold）が実際には崩壊している、と説明する。しかし、この議論は誇張されるべきではない。

① 政党との一党感と投票率

西ヨーロッパの脱編成過程の第一の要因は政党との一体感 (party identification) の喪失に見られる。政党との一体感とは、特定政党の選択への個々の投票者に見られる心理的属性である。各種の調査では、その低下あるいは崩壊は政党帰属意識の浸食を示す。九カ国（イタリア、フランス、ドイツ、デンマーク、オランダ、イギリス、ルクセンブルク、アイルランド、ベルギー）での投票者は一九七〇年代では平均三五％が特定政党に帰属感を有するが、この数字が一九八〇年代には二八％、一九九〇年代前半には二六％に減少した。この傾向は様々な選挙研究で確認される。別の調査では、一九六〇年代に二七％から一九七〇年代には二五％、一九九〇年代には二〇％と政党と「強く」一体感をもつ人々の割合の減少が報告される。

政党帰属感の低下の顕著な場合では、一九九〇年代ではイタリアでは二二・九％、オランダでは一九・一％、ノルウェーでは一五・九％、ドイツでは一五・四％、スウェーデンでは一三・八％、アイスランドでは一三・七％、デンマークでは一二・四％と平均一二％を超える。これらの数字は政党帰属が消滅し始めることを意味する。

しかし実際には、その数字を額面通りに読み取ってよいものかを考えなければならない。第一の理由に政党との一体感についての情報は各種の調査データにもとづく。この使用への疑問である。国ごとに事情を異にするので、実態と矛盾する結果となることがある [Sinnott, 1998: 627-650]。ヨーロッパの文脈にアメリカの概念や規準を当てはめることには評価の適切さに疑問が生じる [Thoassen, 1976: 63-80]。投票者の計算手続、予備選、大統領制と議会制のちがいなどの制度的な理由をもって、アメリカの投票者は一方で政党との一体感、他方でその政党への投票との間を区別するかもしれない。ヨーロッパの投票者は投票を変更すると同時に政党との一体感をしばしば変更する。したがって、たとえ政党との一体感がアメリカで安定したままであったとしても、ヨーロッパでは同じ程度の独立

した安定性であるとはかぎらない。

第二の理由は、ヨーロッパでは政党との一体感の脱編成に関するデータを解釈する際に注意すべきことである。多くヨーロッパの投票者はまず社会集団、そしてそれを通じて間接的に政党と一体化する傾向がある。例えば、イタリアの有権者のある部分はカトリック教会と一体化する程度のみでキリスト教民主党(DC)に帰属感があるかもしれない。カトリック教会はDCと結びつく。同様に、イギリスの有権者のある部分は労働者階級の一体感がある程度だけで労働党に帰属意識をもつ。労働者階級の政党として労働党に所属する意味と捉える。言い換えれば、多くの西ヨーロッパの政党は、投票者の伝統的に亀裂にもとづく第一義的な忠誠心が亀裂を部分的に代表するよりも、亀裂を定義づける階級や社会集団のために存在するかもしれない。西ヨーロッパの文脈の中で政党との一体感の観念を適応する深刻な問題は、政党システムが同時に一党以上の多くの政党と一体化できるとする証拠がある。例えば、左翼支持の投票者は社会民主主義政党か共産主義政党かのいずれか、または両党に一体感をもつかもしれない。これが左翼全体に属する安定した意識を維持する。左翼支持者(または右翼支持者)は、その時々選挙の特定状況に応じて、ある政党から別の政党への選好を変更する。これはアメリカの二大政党システムでは可能とならない。左右の両陣営内で生じる志向変化(Upshot)が存在するが、それによって時間を超えて、左翼と右翼のそれぞれの陣営の持続性が観察される。

したがって、西ヨーロッパの政党との一体感の低下の証拠にかわらず、この証拠にある数字の解釈はまったく異なる。ヨーロッパの政党システムが「脱編成」化したパターンを示すより、むしろヨーロッパの多党システムへの概念の適用が必ずしも現実を適切に説明するものではない。

その証拠は投票率で明らかになる。西ヨーロッパの国政選挙での投票率は通常、アメリカのそれよりはるかに高

い。もちろん近年、投票率の低下も叫ばれるが、高い投票率が少なくとも一九八〇年代を通じて変化してきた。例えば、一九五〇年代では平均八四％、一九六〇年代では平均八五・三％、一九七〇年代では八四・六％、一九八〇年代では八一・九％と大きな変化はなかった。一九九〇年代では平均七八％に低下した。戦後初めて八〇％を切った。注目すべきは五カ国（ベルギー、デンマーク、マルタ、スウェーデン、イギリス）が、一九九〇年代のイギリスを除き、最低の投票率となった。西ヨーロッパの有権者が因襲的な政治手続きに関与しなくなったかもしれない。その証拠が脱編成のテーゼを証明することになる。

②新しい政党への支持

政党の脱編成の第二の要因は有権者が「新しい政党」を選挙で支持する傾向にある。有権者の政党への政治的対応はより個人主義化し、そして政党と投票者の間の結びつきは弱まったので、新しい政党の創設のためのスペースは広がっている。その事情においては、環境保護政党、緑の党、新しい政党などが新しい争点の登場を反映して登場する。別の事情もある。新しい政党は古い政党の分裂した結果でもある。一九七〇年代以降、イギリス、オランダ、ドイツなどにおいて、主要な社会民主主義政党は支持を減らし、そのためその一部から中道左派政党が新たに結党する場合がある。ベルギーでは一九七〇年代に言語の分極化が激しくなり、伝統的な政党の分裂も生じた。また最近のドイツでは、左翼党（Die Linke）が社会民主党と旧社会主義統一党の一部によって成立した。

新しい政党の選挙支持は過去半世紀以上において確実に上昇している。新しい政党とは、一九六〇年代時点で、選挙で競争する政党の多くは現在の「国政の選挙に参加する有権者より古い」という事実である。政党の新旧を、いわゆる一九六〇年代以前に選挙競争に参加した「古い」政党と、一九六〇年代以降に選挙競争に参加した「新し

い」政党を区別する。新しいほうはほぼ三〇〇の政党のうち約六〇%が形成されている。実際、新しい政党は一九六〇年代以降、民主選挙を戦ってきた。言い換えれば、約四〇%の政党が一九六〇年代以前に形成されてきたことになる [Mair, 1999]。

一九六〇年代に西ヨーロッパ一六カ国で結党された約三〇新しい政党の総得票は四・四%強であった。この数字は一九七〇年代では九・一%、一九八〇年代では一四・四%、一九八〇年代では一四・四%、一九九〇年代では二・四%と増加する。新しい政党の得票は実質的には平均以上である。一九九〇年代のイタリアの三つの選挙では、新しい政党の得票は六六・八%であった。オランダでは、新しい政党 (CDAも含む) は四五・九%を獲得した。フランスでは、四一・七%であった。

表面上では、西ヨーロッパでの政党編成は抜本的な変化があると理解できそうである。一九六〇年代以前に結党した古い政党は一九九〇年代までで得票率では半分以下になった。これに対して一九六〇年代以降に結成された新しい政党は一九九〇年代において西ヨーロッパの投票の四分の一近く獲得したことになる。数字から見るかぎり、大きな変動の徴候を示す。

ただ、この現象はどのような変化なのであろうか。伝統的な政党の得票は、一九五〇年代から一九九〇年代にかけて、左翼陣営の合計では四〇%から四二%弱を、中道・右翼陣営の合計では五五%前後を維持する。実際に不安定になった古い政党はキリスト教民主主義政党である (一九五〇年代二〇・七%から一九九〇年代一四・五%に低下)。一方で新しい左翼政党、緑の党、他方で新しい極右政党が、少なくとも西ヨーロッパ全体では、「大量票」を獲得していることを証明する。極右政党で最も成功したと言われる「新しい」政党は、オーストリアの自由党、イタリアの国民同盟 (元イタリア社会運動, MSI) を含めて、実はまったく「古い」政党であることにも注意すべきである。

したがって、この現象は次のことを示唆する。「新しい政党」の票の多くは、実際には、認知できうる媒介変数 (recognizable parameter) 内で活動する新たな組織的な選択肢に向かうのである。もちろん、このことは正確には「古い政治」に戻ることを意味しないであろう。結局、新しく形成された組織が過去の所属組織をリニューアルするので、自ら新たな形態で提案したものではない。しかし、それは「新しい政治」には必ずしも必要としないであろう。それは「新しい（と思われそうな）形態」の中で「古い政治」を実行するだけかもしれない。そうすると、過去半世紀での成功例は、オランダのCDA、イタリアのフォルツァ・イタリア、左翼民主党、フィンランドの左派同盟、ドイツの左翼党のような政党を含むことになる。確かに、これらの政党はすべて、看板はいわゆる「新しい」政党であるだろう。しかし、その政治志向は西ヨーロッパにある古いスタイルの政党家系に由来する。ここに大きな疑問点を残す。

「新しい」を強調すると、私たちは再尉編成よりも脱編成についての証拠を発見し多かに思えるようである。伝統的な政党への忠誠心は確実に衰退する。有権者が新しい選択肢とみなすとはいえ、完全に「新しい政治」には移行していない。これらの「新しい」政党は現実にはそれほど成功したとは言えない。

③選挙における変動票

脱編成テーゼを主張する第三の要因は選挙変動票の増加である [Pedersen, 1979, 1983]。それはある選挙から次の選挙までの票の流動性を測定する。政党支持の短期的変動の指標を示す。

増加する選挙変動票の傾向が一九七〇年代にある国々で明らかにされたからといって、西ヨーロッパ全体に当てはめられるわけではない。例えば、一九七〇年代ではフランス、アイルランド、西ドイツ、イタリアでの変動票は

低下している。一九五〇年代では、フランスは二二・三%、西ドイツは一五・二%であったが、一九九〇年代には一五・四%、九・〇%と減少する。イタリアでは、九%前後であったが、一九九〇年代に二二・九%と増加した。これらの国々では、戦後の民主過程が再構造化された事例である。各政党システムは強力な中道右派政党によって安定していた。

ところが他の多くの西ヨーロッパ諸国では、一九五〇年代、一九六〇年代に従来の政治が一九七〇年代に崩れてきた。それ以来、この流動性が安定性を脅かすようになった。デンマーク、オランダ、ノルウェー、イギリスでは、とりわけはつきりと固定票の減退が生じた。さらに一九八〇年代までに観察されたのは、左翼と右翼の各陣営内の階級間の投票移動レベルが階級内の変動票よりずっと少なかった [Bartolini and Mair, 1990; Mair, 1997: 76-90]。言い換えると、少なくとも階級亀裂が関係するかぎり、変動票の大部分は敵対する陣営に向かうより、むしろ自らの陣営内での票の変更の結果と見なされる。この傾向はヨーロッパの投票者が同時にある政党よりも同じ陣営内のいくつかの政党と一体感があることの証左かもしれない。

この陣営間の変動票が相対的に低いまま陣営内の票の移動が継続するとはいえ、一九九〇年代の選挙では変動票が全体として急増することが顕著になった。西ヨーロッパ一九カ国の平均が一一・五%である。一九九〇年代になつてはじめて西ヨーロッパ諸国全体で平均一〇%を超えた（一九五〇年代一六カ国で平均八・〇%）。このパターンはデンマーク（一九五〇年代五・五%から一九九〇年代二二・四%）、ノルウェー（三・四%から一五・九%）、オランダ（五・一%から一九・一九・一%）を典型例とする。もちろん、変動票が時間の経過で減少する国もある（フランス二二・三%から一五・四%、ドイツ一五・二%から九・〇%、ルクセンブルク一〇・八%から六・二%）。変動票の増加に注目すると、最近になればなるほどとまったく異なった様相を予測させられる。ここで「脱編成」と称される徴候を再考する必

要がある [cf. Krichel, 1995: 123-165; cf. Poguntke, 2004: ch. 1].

三、変動と安定の評価

たとえ変動が拡大しても、その範囲を過大視できない。政党システムがかつて登場したと同じく継続的なままであるかもしれないので、すべては実質的な、かつ持続的な要素が配置される [Wolinetz, 1989: 296]、と考えられる。現在の西ヨーロッパ政党政治が変動中と同時に持続中と考える特徴があると考えてもよい。確かに変動イメージは興味深い、「新しさ」の衝撃は、古い政治の持続性を等閑視させることにしてしまいがちである。

左翼陣営と中道・右翼陣営の間のバランスは全体としては継続する。階級亀裂の境界を交差する票の再分配は意外に低い。とくに社会民主主義政党と保守主義政党では、それに政治システムと政党システムが柔軟性と適応性があることを証明する。新しい政党は、その浸透力と選挙の成功にかかわらず、伝統的な編成に本格的に挑戦したとは考えにくい。

変動は確かに一九九〇年代では明らかである。政治的選好の個人主義化・手段主義化の増加がある一方で、集団的アイデンティティの衰退が他方で存在する。政党支持の特異性の低下は指摘される。当然、左翼と右翼を分ける規準の条件が変わる。各陣営内の政党支持のバランスはある部分では変化をきたした。そして、「脱物質主義」や「新しい政治」の次元が西ヨーロッパ民主国で登場する。とりわけ、重要な政党のひとつであるキリスト教民主主義政党は選挙支持で大きな衰退を経験した。さらにもっとも重要なものは有権者が棄権をするばかりか、投票先を変更する有権者は個人主義的な政党選好にもとづく変動票を実行する。

全体的には、「周辺」的な変化のひとつと考えられ、徐々に選択を変更する票があるとしても、政党システムの変

「中核部分」は存続する [Smith, 1989: 157-158]。西ヨーロッパの有権者は左翼陣営内では共産主義政党から社会民主主義政党へ、あるいは社会民主主義政党から新しい左翼政党か緑の党へ移動する。右翼陣営内ではキリスト教民主主義的党から世俗政党へ、あるいは自由主義政党から保守主義政党へ移動する。しかし、有権者は両陣営内に留まったままである。ただ、有権者は以前と比べ特定政党に結びつかなくなった。その意味では、政党との紐帯は弱体化したかもしれない。しかし、左翼と右翼のいずれかに結びついたアイデンティティは維持されている。この意味では、西ヨーロッパの政党システムが「凍結」化されている見解はそう簡単に否定されるべきでないであろう。

長期的な西ヨーロッパ政党システムの安定化が、政党や陣営のための個々の社会集団（例…カトリック、労働者、農民など）を結合する紐帯の機能が単純な役割ではないことは強調されるべきである。確かに、社会構造は、特にイタリア、スウェーデンのように強力な社会的亀裂や下位文化をもつシステムの中で、重要な、しかも安定した要素であることを証明してきた。しかし仮に社会構造が凍結した媒介物 (freezing agent) であるなら、そうなれば一九七〇年代と一九八〇年代の選挙編成での大きな変動が見られる。私たちが目の当たりにする事実は、宗教や階級のアイデンティティの弱体化、そして長期的に成長した個人主義化過程にかかわらず、西ヨーロッパの長期にわたる伝統的な政党家系の多くが現存するという事実である。

仮に社会構造がそれほど問題視されるなら、そうするとアイルランドのような政党システムの持続的な変動が存在する。アイルランドでは、党派性は社会的ルーツの不在で特徴づけられる。しかし少なくとも近年でも、政党システムが西ヨーロッパでもっとも安定するひとつであることを証明する。言い換えれば、社会構造が凍結した媒介物であることを示唆するのは、「凍結した」政党システム「凍結した」社会のだけに存在することを意味してしまうことになる。これはにわかには信じがたい。

現実に政党システムは様々な要因によって「凍結」される。その社会構造がより重要なもののひとつである [Bartolini and Mair, 1990; Sartori, 1990; Mair, 1997: 199-223]。例えば、選挙制度のような制度的構造が課す強制要素 (constraint) によって、そして政党自身の組織的效果によって、凍結されることである。もっとも重要なものとして、政党システムは政党間競争の構造が課す強制要素によって「凍結」される。例えばイタリアでは、一九九〇年代の選挙選好で大規模な変動は部分的には左翼民主党 (PDS) の正当性に原因があった。イタリアの政党間競争が一九四〇年代後半以降、構造化された枠組み条件を崩壊させた。イタリアの有権者は長くキリスト教民主党 (DC) 政権以外の選択肢を受け入れがたく、いわば「拘束性」のある信念が蔓延し、別の選択肢を受け入れがたかった。それにとりも政党システムを公的捉えていた。しかし共産党 (PCI) の変容を通じて、容認しやすい PDS が登場したとたん、それまでの「拘束性」が緩み、有権者は比較的多数の票の移動を開始した。しかし、西ヨーロッパ全体で考察するなら、現在までイタリアであつたその種の劇的な変動は観察できそうにない。イタリアの政党システムは例外状況にあり、類似する政党システムの崩壊が西ヨーロッパの他国でもあるか、またはそのような影響を受けるか否かは今のところ、移民問題で揺れる現在の途中経過を含めても、依然として不明である。例えば、一九九八年ドイツで誕生した現状刷新を目的とする「赤—緑」連合政権はドイツ人がどのくらい自己の政党システムのダイナミックスを理解するか (また理解したうえで) で大きな変動を導くか (導きたいと考えたか) が見られたはずである。フランスのジョスパン政権に緑の党が参加して、新しいタイプの政権形成や政党間競争の徴候に繋がるかどうかが判断材料になる。そういうことはあつたのだろうか。最後におそらくもっとも重視すべきものとして、有権者が将来、もっと関与しなくなるかどうか、そして投票結果が選好のランダムな分配を反映するかどうかが判断する規準となる。そうなれば、長く親しんだ社会構造が変容、侵食、変化、崩壊などの言葉で表せる可能性が出てくる [cf. Clark,

2004: 23-48]。

むすび

一、政党システムは変容したのか？

本論では、三つの論点を中心に社会的亀裂論から考察してきた。第一に社会構造のあり方（社会経済や生活様式の変化から価値機能）をどう理解するか、第二にその変化にそって伝統的な亀裂の影響力が衰退したのか、第三に第一、第二の論点にそった政党タイプとその組織の形態を論点としてきた。これらの論点をいかに整理しておこう。

現代の政党システムが変化する範囲は媒介変数 (parameter) を使用する。J・E・ラネとS・エルセンは政党システムの变化を五つの指標を用いて説明する [Lane and Erssen, 1994: 177ff]。これらの指標は、①選挙参加の程度、②システム内の政党数、③イデオロギーの分極度、④政党支持の社会的性格、⑤有権者の変動票である。メアは、選挙次元への過度の注目 (obsessive attention) が政党構造の組織的、イデオロギー的次元を文脈上で無視されている、と批判する [Mair, 1989]。

G・スミスは、政党システムの特性として、与党と野党への一体化が非常に重要である、と述べる [Smith, 1989]。それは、①政党数とその相対的規模、②政党間のイデオロギー距離、③政党の選挙支持での変化、④亀裂の特徴での変化と持続、⑤与党と野党のあり方、⑥政党システムが機能する場（様々なレベルを含む選挙、ネオ・コーポラティズムを含む統治スタイル、議会運営）である。そして、政党（システム）は歴史的文脈内で分析されなければならない [Donoven and Broughton, 1999: 257-262]。現在、選挙変動と、いわゆる政党システムの「脱凍結化 (defreezing)」が強調されるので、メアとスミスは社会構造のあり方と、政治と政党システムに焦点をあてることで、亀裂と政党の関

係の一部の変化を認識する。現在の変動票が各陣営内にあることは、投票者が政権構想や連合形成のパターンを配慮することになる。

リップセットとロツカンが定式化した「凍結化」を発表して以来、劇的な変動があるとする視点が多数寄せられる。サルトーリは、一九六〇年代半ばから一九七〇年代半ばまでを「脱凍結」段階と対照化した形で一九九〇年代を「新たな脱凍結化」段階とみなしたことがある [Sartori, 1994: 50]。『新しい政治』を支持する研究者は、『西ヨーロッパでの政党システムの『凍結』はもはや存在せず』リップセットとロツカンのモデルは過去のものだ、と論じる [Ersen and Lane, 1996: 13]。つまり、これらの見解では、変動の認識は一九七〇年代前半までの政党と支持構造の安定性がないことを分析の中心に設定する [Dalton, Flanagan, and Beck, 1984; Dalton, 1996; Mair, 1990; Mair, 1996]。これに対して、ロツカニアンは変動を否定するわけでない。むしろ、長期間の政治的な視野の中で変動をより精査しようとする [Bartolini and Mair, 1990]。これは、別の角度からすれば、社会的亀裂のもつ意義を明らかにする。

変動論には高レベルの変動票が政党を支えるとみなすので、社会経済的、文化的変動は必然的に政党システムの不安定を生じさせる、という前提がある。メアは二つの点から反論する。ひとつは、凍結化した戦間期でなく、過去の変動票が多かった時代を指摘する。その時代は一九七〇年代から増加する変動票より多いことを強調する。一九五〇年代と一九六〇年代の選挙の安定が例外的であることを誇張すべきでない、と反論する。もうひとつは、理論的にメアが「凍結化」とは何かである、と論じる。「凍結化」は選挙ごとの変動票によって無意味とはならない。メアの認める変動票の概念は、個々の政党の得票でなく、亀裂が線を引く左翼と右翼の各陣営内 (within bloc) での移動であり、それは左翼と右翼の両陣営での投票の安定を示している。例えば、労働者と資本家の亀裂線を超えた投票行動は、それこそ例外である。したがって、社会民主主義政党と共産主義政党の間を行き来することがあつて

も階級亀裂で述べれば、労働者と資本家の亀裂を交叉するする変動票はありえない。右翼・中道陣営でも同様である [cf. Mair, 2002: 122-142; cf. Armington, 2002: 143-165]。

選挙の変動票の視点だけでは、社会的亀裂にもとづく議論は、政党（システム）の構造化に関する理論的な視点を欠落させてしまう。ロッカンの分析アプローチは社会学的な還元論（reductionism）をもつことにもっと注目すべきである。つまり、政党は亀裂による政治的動員が成就した場合で形成される。そしてそういった政党が政党システムに位置づけられる。つまり、亀裂が社会構造化されるからである [Zuckerman, 1982]。実際、表4に示した媒介機関を介した政党（システム）の構造化は政党戦術の相互作用から派生する制度的要件を含む。

要するに、政治分析は亀裂だけでなく、陣営 (bloc) を導き出す。政治史的には、政府形成の持続的なパターンを導く陣営が形成される素材を提供することを意味する [Luebert, 1991]。サルトリリの政党システム分析は流動的な配置でなく、安定した相互作用のパターンの構成を意味する。そこには社会構造化と媒介機関（例：利益集団）との間に緊張が存在する。新しい政党はエリート（指導者）の主導権にもとづいて成功する場合がある（例：緑の党、オーストリア自由党、オランダ民主66）。ブロンデルとティボーが指摘するように、政党の組織とイデオロギーは変容した事象が存在するかもしれない。社会構造的な決定要因、つまり亀裂は弱体化し、中継する立場の媒介機関が「表舞台」に登場する場面が増えている（例、ネオ・コーポラティズム、新しい社会運動、トップダウン型のリーダーシップ）。

二、社会構造化と媒介機関

社会構造化が規定する分析は、亀裂・媒介機関・政党という流れの中で組織とイデオロギーの重要性を指摘するだろう。従来の亀裂を重視する政党システム論は大衆メンバーシップ政党を政党タイプとして前提とする [Sartori, 1968]。

ところが、そういった政党タイプはもはや存在しづらくなっているかもしれない。人々と政党との結び付きが希薄化することよって、今日の政党は包括政党 [Kirchheimer, 1966]、選挙プロフェッショナル政党 [Panbianco, 1988]、現代幹部政党 [Koole, 1994]、カルテル政党 [Katz and Mair, 1994] というタイプに変貌し、エリートと有権者の関係は変わってしまった。大衆メンバーシップ政党では党メンバーが党リーダーをコントロールしたが、現在の場合、逆転する。有権者は特定政党とのイデオロギーの一体感では結びつかず、選挙ごとに投票を変更しがちである。もちろん、政党のメンバーシップはある点では影響力を失うが、場面によってまだ影響力を行使できる [Katz and Mair, 1992; Katz and Mair, 1994]⁽⁶⁾。

社会構造的要因 (structural constraint) に関して媒介機関は、表4にある実行者にあたる指導者が顕著な役割を担うようになる。伝統的な政党では、党首イメージは指導者に投影される。しかし、新しい政党の多くはカリスマ的リーダーに影響されがちである。例えば、イタリア北部同盟のU・ボッシ、オーストリア自由党のJ・ハイダー、フランス国民戦線のル・ペンのように、結果的には「大統領的な役割」をめざすことになる。重要なのは、全国党本部のメディアや市場調査の専門家の役割や、有権者とのコミュニケーションにおいてテレビの役割重視である。例えば、そのようなケースはイタリアでS・ベルスコニのキャンペーンとそのスタイルで突然に現われ、ある意味ではそれらが各国において常態化する傾向にある。

大衆の政治行動は直接的な政治行動、エリートは起業家的な行動を目立させている。つまり、市民運動 (citizen initiative)、新しい社会運動 (NSM)、新たな草の根運動に刺激された政党が、下から代表制民主主義を「民主的な変容 (democratic transformation)」を生じさせる [Fuchs and Klingemann, 1995]。そのようなタイプの媒介機関はパーソナルな要素を増加させる。そこには亀裂 (= 下位文化) にもとづく強固な基盤は欠いている。それは一瞬の争点だ

けで左右されやすい票を得ている。

政治へのより多くの市民の直接的参加を追求する人々の主張は認識できるが、実態では、市民の主張するものに置き換えられるよりも、まだ競合する政党民主主義を供給する人々（既成勢力）で占められる [Keane, 1988: ch. 4] ことは忘れてはならない。仮に市民が政府（または大きく政治）へのインパクトを与えられるなら、そうすると西ヨーロッパの伝統的な政党（システム）は既存の西側民主主義の特徴（＝根幹）を堅持しようとするにちがいない [Ware, 1987]。

しかし問題（というより不安や危惧）は、パーソナル化した媒介機関の増大が政党システムの構造的な衰退を意味することである。政党システムの起源の別の定義を参考にと、現在の票の流動性 (flux) に関して不安的要素と取らえることは可能である。A・ピッツルノは政党システムの初期段階を「発生的 (generative)」と定義する [Pizzorno, 1981]。その発想からすると、現段階は「衰退 (degenerative)」とみなされる時代になっている。政党システムの歴史的文脈の理解を必要とする。それは政党システムの変化の歴史的次元である。この理解は第八章で紹介したスミスの西ヨーロッパ政党システムの三段階モデルである。もう一度簡単に確認しておく、そのモデル (図2) は初期の例外的に長期間続いた亀裂にもとづく動員と編成の安定した段階、その後一九六〇年代に開始した第二段階、一九七〇年代以降の第三段階である。各段階は時期的に重なり合う。第一と第二の特徴は政党の組織的变化と脱イデオロギー的な脱分極化である。キルヒハイマーの分析である [Kirchheimer, 1957; Kirchheimer, 1966]。政党は伝統的な大衆メンバーシップ政党のタイプでなく、野心的なリーダーとその専門助言者には政治手段 (vehicle) となり、極端な志向を回避しながら次第に競争が求心的状況下で実施される。その分岐点には、亀裂の影響力の低下という社会構造の変化、それに応じた政党タイプが登場する。その点でも、包括政党の登場した事情を再確認するのは大

切である。第三段階は「脱集中 (deconcentration)」と「拡散 (diffusion)」のある流動的なものである。

「脱集中」と「拡散」は新しい政党の出現、既成政党の規模低下を示す。大国民政党 (large people's party) は不在気味となる。「拡散」は多数になる政党数のうち政党が投票を獲得するために有権者に迎合する性向を示す [Rae, 1967]。確かに、選挙の拡散は市民を拘束からの解放を意味するようだが、スミスは「拡散」を社会の基礎にある合意に認識の中にある「安全な冒険」を使用する [Smith, 1979: 140]。彼の解釈は持続的な対立の範囲の軽視を指摘することである。イデオロギー的不確実性と政党システムの断片化は市民が主張するようになった現われである。そこでは当然のごとく伝統的な社会的亀裂にもとづく政党の有効性の低下が始まっている。その現象は「物音」を誇張していないかどうか。

サルトリリが指摘する一九九〇年代の大規模な「脱凍結化」時代以前に、スミスは流動化がほぼ再安定化する時期 (第二段階) に、支配的な「国民政党 (people's party)」の組織的、イデオロギー的な適応を通じてすでに用意された、と指摘する [Smith, 1989a; Smith, 1989b]。一九八九年以来、左翼陣営の編成で一致する「流動性」は、中道政党と右翼政党に影響するようになった。階級や宗教を基盤とする社会民主主義政党やキリスト教民主主義政党の大衆メンバーシップ政党タイプは重大 (言い方を換えれば「危機的」) な凋落を経験した。そのことは次のように説明できる。

例えばオランダでは、二つのコミニタリアンの政党や連帯主義的政党が個人主義の高まりで犠牲を払っている [Napel, 1999]。その現象はイングルハートが提示する脱物質主義の『静かな革命 (silent revolution)』 [Inglehart, 1977] は、右翼にも静かな「反革命 (counter-revolution)」を浸透させる契機となる [Inglehart, 1992]。例えば、それらが有権者を吸収できるのは、亀裂から離反した、例えば前者では環境保護を求める脱物質主義者、後者では反移民・反難

民を叫ぶ失業者、労働者である。

したがって、投票の流動性は弱まらず続行するかもしれない。そのことはスミスの言葉で述べれば、「中核（既得権者）への挑戦」である。確かに、選挙変動が現在、一見激変をもたらすように考えがちだが、スウェーデンのように相互に関連（inter-related）する変化の徴候を「温和に示す事例（mild case）」も見られる。またオランダの場合のように、歴史的な変化の重大さにかかわらず、柔軟性（resilience）もある。この流動性は従来の社会構造的要因を完全に否定できないままである。ある種の争点（例：環境保護、反移民・反難民）はその解決に長引きそうだが、社会構造の一角をどの程度占め、そしてロッカニアンが定義づけるまでの亀裂概念・システム・構造になれるだろうか。これは社会的亀裂の消滅を意味しないことである。

三、伝統的な社会的亀裂の存続と「新しい政治」

西ヨーロッパの政党の基礎が、たとえ社会的亀裂にもとづかないとしても、大衆的な基盤がある [Vgl. Elth, 2001b: 233-233]。そのことは西ヨーロッパの政党の二つの「基本」的な性格の明瞭さは「近代政党」と「大衆メンバーシップ政党」という、二つの前提を了解しておかなければならない。

まず、幹部政党は政党システムが進化を経験した中で、「大衆メンバーシップ政党」に変貌しなければならなくなった。後者のタイプは政党が社会構造の中で考えなければならぬ。例えば、アメリカの政党システムは西ヨーロッパ諸国を構成する政党（システム）の家系に属さない。そうすると、社会的亀裂の「重み（weight）」の凋落が存在しないと考えがちになる。はたしてそう結論づけることが可能なのか。社会構造には社会的亀裂が自己の（下位社会）の規範としてその中で占める部分は皆無になったとは決して言えない。社会的規範の条件で社会秩序を説明

すれば、それは社会生活の「表層的なルール (surface rule)」だけ見えるのであるが、そのルールを支えるのを可能にする文化構造を維持する必要性がある。「社会構造のもつ意味は社会的学習を通じて習得する」ことは強調されるべきである [Lopez and Scott, 2000: 90]。

社会科学は、(社会構造、制度、文化的伝統、風俗、様式、ファッションなどで) 人間に支配関係を実行する人間の所産である現象を研究する。社会集団、組織、政党などの人間の仲介機関 (agent) の主観的支配力 (subjective power) と現実の客観的支配力 (objective power) の関係はどのような社会構造が創造されるかを理解する試みを中心におく。それが構造化 (structuration) である。「構造化」理論は人間の媒介物と、主観的支配力と客観的支配力を概念化することで社会構造とシステムの構造化を説明する [Parker, 2000: ix]。

一九九〇年代以降、古い社会的亀裂の凋落は確かにあるとしても完全に消滅したわけではなく(構造化されているにもかかわらず)、その消滅を主張する見解と事実の一致に疑問の余地はないのだろうか。古い亀裂は大衆メンバーシップ政党の存在根拠に関係する。現在、西ヨーロッパの政党は、大衆メンバーシップ政党タイプが衰退したとしても、その社会的基盤が消滅したと言えるかどうか。「近代」と「現代」への移行に関係する社会的亀裂が中心的な特徴のひとつの役割を終えたとするなら、政党支持の性格が変容したとも考えなければならない。それには社会構造の変化に応じた政党組織の変革があることも考慮に入れなければならない(例: 大衆メンバーシップ政党から包括政党、さらにカルテル政党など変遷)。

社会的亀裂モデルは、社会集団と政党の関係において、次の三つの点が確認される。

- ① 集団メンバーと政党選択の相関関係がある。
- ② 有権者は社会的所属(社会構造と社会構成)の関係がある。

③ 亀裂を基礎として政党による有権者へのアピールに効果がある。

過去数一〇年間（とりわけ、一九七〇年代以降）社会的、政治的展開は①から③までの点から影響を受けてきた。一九八〇年代以降、多くの事例において、階級と政党選択の相関関係の低下は示す。宗教投票も低下する。労働者と信者のそれぞれの亀裂にもとづく政党を選択する中核部分が弱体化し、その結果、亀裂—政党の支持関係が減退する。その代りとして、中産階級や非宗教の集団に補われる。亀裂に基づく政党（cleavage party）は現在、例えば社会民主主義政党やキリスト教民主主義政党であり、それらは政党システムの大政党として存在する。社会的亀裂による投票行動は、一方において社会の中の集団間の相互作用とそのちがいの結果であり、他方において政党と重要なアクターとの相互作用の結果と見なされる [Coert, 2007: 14]。社会的亀裂の今後の進展を理解する際に、単に政党アピールや政党戦略の変化で見極めるべきでない。何によって政党システムが生じるかを考察することなしに、有権者の社会的性格と政党選択の関係のヴァリエーションの分析が必要である [cf. Broughton and Napel, 2005b: 198-209; Mielke, 2001: 77-91]。

現代の政治変動を論じる理論は「脱産業社会」の考えを反映する [Smith, 1989: 38-40]。その対象は西ヨーロッパの先進社会の政治には有用である。この理論の基礎には、変化する経済構造がある。高い豊かさ、そしてそれに伴った人々の価値構造の変化である。いわゆる脱物質主義の価値観を投影し、それは伝統的な政治行動の形態や既成政党と対立する。

「新しい政治」概念は一部参加についての価値セットによって代表されるが、その強さは産業社会の価値に対抗するイデオロギーを提供する。産業社会は社会過程を安定する方法が持続的な経済成長と考えるので、それは脱物質主義に不信感を募らせる。その事情から新しい亀裂を特徴づけられそうである。それは左翼—右翼次元に反映す

る。しかし、その事情は「新しい政治」が「古い政治」に取って代わること、それに脱物質主義的価値が西ヨーロッパ社会で支配的になることが自動的になることを意味するわけではない。

第一に脱物質主義は、それが一般的傾向となるより、西ヨーロッパの展開の特定段階に関係する。第二に「新しい政治」は新しい亀裂線と扱うためには、政治的なかかわりの疑問が含まれる。「新しい政治」は歴史的（社会構造的）な基礎を欠く。ある特定の社会集団や社会層に属するある種の価値を共有する「共同体」（あるいは新しい価値観を共有する一時的なサークル程度）であるかもしれない。

新しい亀裂の出現が疑いないなら、またそれを亀裂と称するなら、政治の社会的基盤のあり方を問題にしなければならぬ。従来の政党との一体化の弱体化、投票率の低下、特定政党への投票者の動員の困難さ、争点投票、変動票の増加などは、現在の政治を判断する場合には重要でなくなったことを意味しない。政治の社会的基盤の変動があるなら、政党―投票者編成の基盤が流動的になっているなら、政党は従来の社会的亀裂にもとづく投票者に加えてもっと有権者を捕捉する「包括的なアピール」や選挙だけの有効な戦術を必要とする。

注

(1) 一九七三年と一九九四年にノルウェーではECとEUの加盟をめぐる国民投票を考察の対象の一例として採り上げるなら、南部の都市化したノルウェー、特に首都オスロ近郊と比べて、北部と沿岸部においてEU加盟に反対する動きが続くと考えられる。

(2) 宗教亀裂は、①世俗と非世俗、②カトリックとプロテスタントという、二次元で説明される。さらに第五の亀裂として、第一次世界大戦前後からの「社会民主主義・共産主義の亀裂」という労働者階級の分裂も指摘される。ロツカンが歴史的に無数とも言える亀裂の中から精査し、主要な四つ（あるいは五つ）を抽出した意味を考えるべきである。彼が「現代の政党システムが一九六〇年代までに社会的亀裂を反映したもの」と述べた意味を再考しなければならない [Lipset and Rokkan,

1967 : 50]°

- (3) キルヒハイマーは、ある種悲観的な意図をもって、包括政党を説明したことにも留意しなければならない。社会的亀裂にもとづく政党とは対極的な立場である包括政党に関する解説については、古田、一九八七年、二〇一二年を参照。
- (4) 計算方法は以下の通りである。(労働者階級に属するサンプルの%)×(政党に投票する集団の%)+(非労働者階級に属するサンプルの中の%×政党に投票する非労働者階級の%)
- (5) 政党組織の変遷については、古田、二〇一二年参照。

参考文献

欧文参考文献

- Abramson, P. R. (2014), *Value Change over a Third of a Century : The Evidence for Generational Replacement*, Dalton and Wezel (eds).
- Albert, J. (1985), *Modernisierung, neue Spannungslinie und die politischen Chance der Grünen, Politische Vierteljahresschrift*, 26(3).
- Alford, R. R. (1967), *Class Voting in the Anglo-American political Systems*, Lipset and Rokkan (ed).
- Alford, R. R. and Friedland, R. (1985), *Power of Theory. Capitalism, the State, and Democracy*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Allardt, E. and Pesonen, P. (1967), *Cleavage in Finnish Politics*, Lipsett and Rokkan (eds).
- Allardt, E. (1981), *Reflections on Stein Rokkan's Conceptual Map of Europe*, *Scandinavian Political Studies*, vol.4, No.4, (土倉莞爾・古田雅雄訳「ステイン・ロッカンのヨーロッパ概念地図に関する考察」『法学論集 (関西大学)』第二号、一九九〇年)。
- Almond, G. A. (1990), *A Discipline Divided. School s and Sects in Political Science*, Sage.
- Allum, P. (1995), *State and Society in Western Europe*, Polity Press.
- Almond, G. A., Powell, G. B. (1996), *Comparative Politics. Theoretical Framework*, 2nd ed., Harper Collins College Publishers.
- Ansell, Ch., Di Palma, G. (2004), *Restructuring Territoriality. Europe and the United States Compared*, Cambridge University

Press.

- Armingeon, K. (2002). Interest Intermediation: The Cases of Consociational Democracy and Corporatism. Keman (ed).
- Bartolini, S. (2000). *The Political Mobilization of the European Left, 1860-1980 : The Class Cleavage, the European Electorates, 1885-1985*. Cambridge university Press.
- Bartolini, S. and Mair, P. (1990). *Identity, Competition and Ellectates, 1885-1985*. Cambridge University Press.
- Bealey, F. (1999). cleavages, Bealey, F., *The Blackwell Dictionary of Political Science*, Blackwell.
- Berglund, S. and Dellenbrant, J. A. (eds) (1994). *The New Democracies in Eastern Europe. Party Systems and Political Cleavages*. 2nd ed. Edward Elgar.
- Berglund, S. and Dellenbrant, J. A. (1994). The Breakdown of Communism in Eastern Europe. Berglund and Dellenbrant (eds).
- Blondel, J. (1974). *Voters, Parties, and Leaders. The Social Fabric of British Politics*. Penguin Books.
- Blondel, J. and Inoguchi, T. (2006). *Political Cultures in Asia and Europe. Citizens, states and societal values*. Routledge.
- Blondel, J. and Thiebault, J.-L. with Czernicka, J., Inoguchi, T., Pathmanand, U. and Venturino, F. (2010). *Political Leadership, Parties and Citizens. The personalization of leadership*. Routledge.
- Bogdnor, V. (ed) (1987). *The Blackwell Encyclopaedia of Political Science*. Blackwell.
- Bole, P. (2004). *Consociational Democracy in Multieethnic Societies*. Grim.
- Bonscher, S. (2010). *Cleavage Politics and the Populist Right. The New Cultural Conflict in Western Europe*. Philadelphia, Temple University Press.
- Broughton, D. and Donovan, M. (eds) (1999). *Changing Party Systems in Western Europe*. Printer.
- Broughton, D. and Donovan, M. (1999). Introduction and Guide to Key Sources an Texts. Broughton and Donovan (eds).
- Broughton, D. and Napel H-M.t (2005). *Religion and Mass Electoral Behaviour in Europe*. Routledge.
- Broughton, D. and Napel, H-M.t (2005a). Introduction. Broughton and Napel (eds).
- Broughton, D. and Napel, H-M.t (2005b). Conclusion: European exceptionalism? Broughton and Napel (eds).
- Buchanan, T. and Conway, M. (eds) (1996). *Political Catholicism in Europe 1918-1965*. Oxford University Press.

- Budge, I., Crewe, I. and Farlie, D. J. (1976), *party identification and beyond, representations of voting and party competition*, John Wiley & Sons.
- Butler, D. E. and Stokes, D. (1974), *Political Change in Britain*, Macmillan.
- Caramani, D. (2004), *The Nationalization of Politics. The Formation of National Electorates and Party Systems in Western Europe*, Cambridge University Press.
- Castells, M. (1978), *City, Class and Power*, Macmillan.
- Clark, H. D. and Dutt, N. (1991), Mesearing value change in Western industrial societies : The impact of unemployment, *American Political Science Review*, 85.
- Clark, T. N. (2004), The Breakdown of Class Politics, Horowitz (ed),
- Clark, T. and Lipset, S. M. (eds) (2001), *The Breakdown of Class Politics*, John Hopkins University Press.
- Collier, R. B. (1999), *Paths Towards Democracy. The Working Class and Elites in Western Europe and South America*, Cambridge University Press.
- Crompton, R. (1998), *Class and Stratification. An Introduction to Current Debates*, 2nd ed, Polity.
- Crotty, W. (2006) Party transformations : The United States and Western Europe, Katz and Crotty (eds)
- Curtis, M. (ed.) (1997), *Western European Government and Politics*, Longman.
- Daalder, H. (1983), The comparative study of European parties and party systems : An overview, Daalder and Mair (eds),
- Daalder, H. (1987), Countries in Comparative European Politics, *European Journal of Political Research*, 15 (古田雅雄訳「欧州の比較政治研究における各国の意味」加藤秀治郎編『西欧比較政治 データ／キーワード／リーディングス』第二版、一藝社、二〇〇四年)。
- Daalder, H. and Mair, P. (eds) (1983), *Western European Party Systems : Continuity and Change*, Sage.
- Dahl, R. (ed), (1966), *Political Oppositions in Western Democracies*, Yale University Press.
- Dahl, R. (1966a), Some Explanations, Dahl (ed).
- Dalton, R. (1988), *Citizen Politics in Western Democracies: Public Opinion and Political Parties in the United States, Great Britain,*

West Germany, and France. Chatham House.

Dalton, R. J. (1996). Political Cleavages, Issues, and Electoral Changes. Leduc, Niemi, and Norris (eds.).

Dalton, R. J. (1999). Political support in advanced industrial democracies. Norris (ed.).

Dalton, R. J. (2000). The Decline of Party Identifications. Dalton and Wattenberg (eds.).

Dalton, R. J. (2004). *Democratic Challenges Democratic Choices. The Erosion of Political Support in Advanced Industrial Democracies*. Oxford University Press.

Dalton, R. J., Flanagan, S. C. and Beck, P. A. (1984). *Electoral Change in Advanced Industrial Democracies*. Princeton University Press.

Dalton, R. J., Flanagan, S. C. and Beck, P. A. (1984). Electoral change in advanced industrial democracies. Dalton, Flanagan and Beck (eds.).

Dalton, R. J. and Kuechler, M. (1990). *Challenging the Political Order. New Social and Political Movements in Western Democracies*. Polity.

Dalton, R. J. and Wattenberg, M. P. (eds) (2000). *Parties without Partisans. Political Change in Advanced Industrial Democracies*. Oxford University Press.

Dalton, R. J. and Wattenberg, M. P. (eds) (2000a). Unthinkable Democracy: Political Change in Advanced Industrial Democracies. Dalton and Wattenberg (eds.).

Dalton, R. J. and Wattenberg, M. P. (2000b). Partisan Change and the Democratic Process. Dalton and Wattenberg (eds.).

Dalton, R. J. and Welzel, Ch. (eds) (2014). *The Civic Culture Transformed. From Allegiant to Assertive Citizens*. Cambridge University Press.

Dalton, R. J. and Welzel, Ch. (2014a). Political culture and Value Change. Dalton and Welzel (eds.).

Dechouwer, K. (2009). *The Politics of Belgium. Governing a Divided Society*. palgrave macmillan.

Deth, J. W. van and Scarbrough, E. (eds) (1995). *The Impact of Values*. Oxford University Press.

Deth, J. W. and Scarbrough, E. (1995). The Concept of Values. Deth and Scarbrough (eds.).

- Deth, J. W. and Scarbrough, E. (1995), *Perspectives on Value Change*, Deth and Scarbrough (eds).
- Deutsch, K. (1987), Towards the scientic understanding of nationalism and national development : the critical contribution of Stein Rokkan, *European Journal of Political Research*, vol.5 (古田雅雄「ナショナリズムと国民国家の発展の科学的理解にむけて」：スティーン・ロッカンのきわめて重要な貢献」『六甲台論集』第三七巻第二号、一九八〇年)。
- Diamond, L. and Gunther, R. (eds) (2001), *Political Parties and Democracy*, John Hopkins University Press.
- Donovan, M. and Broughton, D. (1999), Party System Change in Western Europe: Positively Political.
- Broughton and Donovan (eds).
- Downs, A. (1957), *An Economic Theory of Democracy*, Harper & Row (古田精司監訳『民主主義の経済理論』成文堂、一九八〇年)。
- Dunleavy, P. L. (1984), The political implications of sectoral cleavages and the growth of state employment, *Political Studies*, 32.
- Duverger, M. (1951), *Les partis politiques*, A. Collins (岡崎加穂訳『政党社会学』潮出版、一九七〇年)。
- Eckstein, H. (1966), *Division and Cohesion in Democracy*, Princeton University Press.
- Eith, U. (2001a), Zur Ausprägung des politischen Wettbewerbs in entwickelten Demokratie. Zwischen gesellschaftlichen Konflikten und dem Handeln politischer Eliten, Eith・Mielke, (Hrsg.).
- Eith, U. (2001b), Gesellschaftliche Konflikte und Parteiensysteme: Möglichkeiten Grenzen eines überregionalen Vergleichs, Eith・Mielke (Hrsg.).
- Eith, U.・Mielke, G. (Hrsg) (2001a), *Gesellschaftliche Konflikte und Parteiensysteme. Länder- und Regionalstudien*, Opladen : Westdeutscher Verlag.
- Eith, U.・Mielke, G. (2001b), Einleitung, Eith・Mielke (Hrsg.).
- Eley, G. (2002), *Forging Democracy. The History of the Left in Europe, 1850-2000*, Oxford University Press.
- Epstein, L. D. (1967), *Political Parties in Western Democracies*, Praeger (1980 Reprinted by Transaction).
- Ertman, Th. (2009), Western European Party Systems and the Religious Cleavage, Kersbergen (eds), Manow
- Evans, G. (ed), (1999), *The End of Class Politics? Class Voting in Comparative Perspective*, Oxford University Press.

- Evans, G. and Norris, P. (eds) (1999), *Critical Elections: British Parties and Elections in Long-Term Perspective*, Sage.
- Evans, G. and Whitefield, S. (1993), Identifying the Bases of Party Competition in Eastern Europe, *British Journal of Political Science*.
- Flanagan, S. C. (1982), Changing values in advanced industrial societies, *Comparative Political Studies*, 14.
- Flanagan, S. C. (1987), Changing values in industrial societies revisited : Towards a resolution of the values debates, *American Political Science Review*, 81.
- Franklin, N. M. (1985), *The Decline of Class Voting in Britain. Change in the Basis of Electoral Choice 1964-1983*, Oxford University Press.
- Franklin, M., Mackie, Th., Valen, H. et al. (1992), *electoral change. responses to evolving social and attitudinal structures in western countries*, Cambridge University Press.
- Flora, P. (1974), *Modernisierungsforschung. Zur empirischen Analyse der gesellschaftlichen Entwicklung*, Westdeutscher Verlag.
- Flora, P. (1981), Stein Rokkans Makro-Modell der politischen Entwicklung Europas. Ein Rekonstruktionsversuch, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, Jg. 33, Heft 3.
- Flora, P. (1983), *State, Economy, and Society in Western Europe 1815-1975*, A Data Handbook, vol. I, Frankfurt (竹岡敬温訳「ヨーロッパ歴史統計 国家・経済・社会 一八一五—一九七五年 上巻」原書房、一九八八年)。
- Flora, P. (1999), Introduction and interpretation, Flora, P. (1999), Kuhle, S., and Urwin, D. (eds)
- Flora, P., Kuhle, S., and Uewin, D. (eds) (1999), *Stein Rokkan, State Formation, Nation-Building, and Mass Politics in Europe : the theory of Stein Rokkan*, Oxford University Press.
- Fuchs, D. and Klingemann, H.-D. (1995), Citizens and the state: a relationship transformed, Klingemann and Fuchs (eds), Gabriel, O. W. (2012), Westle, B., *Wählerverhalten in der Demokratie. Eine Einführung*, Nomos.
- Gallagher, M., Laver, M., and Mair, P. (2005), *Representative government in Modern Europe*, 4th edn, MacGraw-Hill.
- Gerard, E. and Hecke, S. V. (2004), European Christian Democracy in the 1990s. Towards a Comparative Approach (土倉崇爾・古田雅雄訳「ヨーロッパのキリスト教民主主義」冷戦終了以降の下降と上昇」『法学論集(関西大学)』第五五巻第三号)。

Hecke and Gerard (eds.).

Givens, T. (2005). *Voting Radical Right in Western Europe*. Cambridge University Press.

Görl, T. (2007). *Klassengebundene Cleavage-Strukturen in Ost- und Westdeutschland. Eine empirische Untersuchung*. Nomos.

Goetz, K. H. Mair, P. and Smith, G. (eds) (2009). *European Politics. Past, present, future*. Routledge.

Goodin, R. and Klingemann, H.-D. (eds) (1996). *A New Handbook of Political Science*. Oxford University Press.

Goldthorpe and Ch. T. Whelan (eds) (2002). *The Development of Industrial Society in Ireland*. Oxford University Press.

Gollwitzer, H. (Hersg.) (1977). *Europäische Bauernparteien im 20. Jahrhundert*. Gustav Fischer Verlag.

Grünke, Th. und Wagner, B. (Hrsg.) (2002). *Handbuch RecNorris, P. (ed.) (1999)Histradikalismus. Personen-Organisationen-Netzwerke vom Neonazismus bis in die Mitte der Gesellschaft*. Leske+Budrich.

Gunlicks, A. B. (2011). *Comparing Liberal Democracies. The United States, United Kingdom, France, Germany, and European Union*. iUniverse.

Gunther, R., Montero, J. and Linz, H. (eds) (2002). *Political Parties : Old Concepts and New Challenges*. Oxford University Press.

Gunther, R., Montero, J. and Linz, H. (2002). Introduction : Reviewing and reassessing parties. Gunther, Montero and Linz (eds.).

Hargove, E. (ed.), *The Future of the Democratic Left in Industrial Democracies*. Penn State Press.

Hayward, J. (1995). The Crisis of Representation in Europe. *West European Politics*, 19.

Hayward, J. and Page, E. D. (eds) (1995). *Governing the New Europe*. Polity.

Hayward, J. and Page, E. D. (1995). Introduction. A Plural Europe : Undivided and Unbounded. Hayward and Page (eds.).

Heath, A., Jowell, R., Curtice, J.K. (1985). *How Britain Votes*. Pergamon Presss.

Hechter, M. (1975). *Internal Colonialism. The Celtic Fringe in British National Development*. University of California Press.

Hecke, S. V. and Gerard, E. (eds.) (2004). *Christian Democratic Parties in Europe since the End of the Cold War*. Leuven University Press.

Heidar, K. (2001). *Norway. Elites on Trial*. Westview.

Horowitz, I. L. (ed.) (2003). *Civil Society and Class Politics. Essays on the Political Sociology of Seymour Martin Lipset*.

Transaction.

Ignazi, P. (1992). The Silent Counter-revolution: Hypotheses on the Emergence of Extreme Right-Wing Parties in Europe, *European Journal of Political Research*, 22.

Ignazi, P. (2003), *Extreme Right Parties in Western Europe*, Oxford University Press.

Inglehart, R. (1977), *Silent Revolution : Changing Values and Political Styles among Western Publics*, Princeton University Press
(「三訂」版増補版『価値の静かな革命』東洋館出版、1977年)。

Inglehart, R. (1984), The changing structure of political cleavages in western society, Dalton, Flanagan and Beck (eds).

Inglehart, R. (1990), *Culture Shift in Advanced Industrial Society*, Princeton, Princeton University Press.

Inglehart, R. (1997), *Modernization and Postmodernization. Cultural, Economic, and Political Change in 43 Societies*, Princeton University.

Inglehart, R. (2009), Changing Values among Western Publics from 1970 to 2006, Goetz, Mair and Smith (eds).

Inglehart, R. and Flanagan, S. (1987), Value change in industrial societies, *American Political Science Review*, 81.

Inglehart, R. and Hochstein, A. (1972), Alignment and dealignment of the electorate in France and the United States,

Comparative Political Studies, 5.

Janning, F. (1998), *Das Politische Organisationsfeld*, *Politische Macht und soziale Homologie in Komplexen Demokratien*, Westdeutscher Verlag.

Janowitz, M. (1970), *political conflict. Essays in Political Sociology*, Quadrangle Books.

Kalivas, S. N. (1996), *The Rise of Christian Democracy in Europe*, Ithaca, Cornell University Press.

Karonen, L. and Kuhnle, S. (eds) (2001), *Party Systems and Voter Alignments Revised*, Routledge.

Katz, R. S. and Mair, P. (eds) (1992), *Party Organization in Western Democracies: A Data Handbook*, Sage.

Katz, R. S. and Mair, P. (eds) (1994), *How Parties Organize : Change and Adaption in Party Organizations in Western Democracies*, Sage.

Katz, R. S. and Mair, P. (1995), Changing Models of Party Organization and Party Democracy : The Emergence of the Cartel

- Party, *Party Politics*, 1(1).
- Katz, R. S. and Crotty, W. C. (eds.) (2006), *Handbook of Party Politics*. Sage.
- Katz, R. S. (2015), Party system change in Western Europe, Mangone (ed.).
- Keane, J. (1988), *Democracy and Civil Society: On the Predicaments of European Socialism, the Prospects for Democracy, and the Problem of Controlling Social and Political Power*, Verso.
- Keating, M. (1999), *The Politics of Modern Europe. The State and Political Authority in the Major Democracies*, Cheltenham, 2nd, Edward Elgar Publishing.
- Keating, M. (1998), *The New Regionalism in Western Europe. Territorial Restructuring and Political Change*, Elgar.
- Kedar, O. (2009), *Voting for Policy. Not Parties. How Voters Compensate for Power Sharing*, Cambridge University Press.
- Kelsall, R.K., Kelsall, H.M. (1974), Stratification. An Essay on Class and Inequality. Longman.
- Keman, H. (ed.) (2005), *Comparative Democratic Politics*, Sage.
- Kersbergen, K. van, Manow, Ph. (2009), *Religion, Class Coalitions, Welfare States*, Cambridge University Press.
- Kirchheimer, O. (1966), The transformation of the Western European party systems, LaPalombara and Weiner (eds.).
- Kitschelt, H. (1992), political regime change : structure and process-driven explanations, *American Political Science Review*, 86.
- Kitschelt, H. (1994), *The Transformation of European Social Democracy*, Cambridge University Press.
- Kitschelt, H. (1995), *The Radical Right in Western Europe*, University of Michigan Press.
- Kitschelt, H. (1995), A Silent Revolution in Europe? Hayward and Page (eds.).
- Kitschelt, H. (2006), Movement parties, Katz and Crotty (eds.), 2006.
- Kitschelt, H., Mansfeldova, Z., Markowski, R. and Toka, G. (1999), *Post-Communist Party Systems. Competition, Representation, and Inter-party Cooperation*, Cambridge University Press.
- Klingemann, H.-D. and Fuchs, D. (eds.), *Citizens and the State*, Oxford University Press.
- Knutsen, O. (1995), Left -Right Materialist Value Orientations, Deth and Scarbrough, (eds.).
- Knutsen, O. (1995), Party Choice, Knutsen and Scarbrough (eds.).

- Knutsen, O. (2005). *Social Structure and Party Choice in Western Europe. A Comparative Longitudinal Study*, palgrave.
- Knutsen, O. (2006). *Class Voting in Western Europe. A Comparative Longitudinal Study*, Lexington Books.
- Knutsen, O. and Scarbrough, E. (1995). Cleavage politics, Deth and Scarbrough (eds).
- Koole, R. A. (1994). The vulnerability of the modern cadre party in the Netherlands, Katz and Mair (eds).
- Koole, R. A. (1994). The vulnerability of the modern cadre party in the Netherlands, Katz and Mair (eds).
- Kriesi, H. (1998). The transformation of cleavage politics : The 1997 Stein Rokkan lecture, *European Journal of Political Research*, 33.
- Kriesi, H. (2009). Political Mobilisation, Political Participation and the Power of the Vote, Goetz, Mair and Smith (eds).
- Kriesi, H., Grande, E., Lachat, R., Dolezal, M., Bornschieer, Frey, T. (2008). *West European Politics in the Age of Globalization*, Cambridge University Press.
- Kriesi, H., Grande, E., Dolezal, M., Helbling, M., Höglinger, D., Hutter, S., Wüest, B. (2012). *Political Conflict in Western Europe*, Cambridge University Press.
- Krippendorf, E. (1962). Ende des Parteistaates, *Der Monat*, 14 Jg.
- Krouwel, A. (2006). Party models, Katz and Crotty (eds).
- Lamberts, E. (ed) (1997). *Christian Democracy in the European Union [1945/1995]*, Leuven University Press.
- Lane, J.-E. and Ersson, S. O. (1987). *Politics and Society in Western Europe*, 2nd ed., Sage.
- Lane, J.-E. and Ersson, S. O. (1994). *Comparative Politics. An Introduction and New Approach*, Polity.
- LaPalombara, J. and Weiner, M. (eds) (1966). *Political Parties and Political Development*, Princeton University Press.
- Laver, M. (1987). political cleavage, Bodagnor (ed).
- Lawson, K. (2004). Five variations on a theme: interest aggregation by party today, Lawson and Pogunke (eds).
- Lawson, K. and Merkl, P. (eds) (1988). *When Parties Fail : Emerging Alternative Organizations*, Princeton University Press.
- Lawson, K. and Merkl, P. (1988). Alternative organizations : Environmental, supplementary, communitarian, and authoritarian, Lawson and Merkl (eds).

- Lawson, K. and Poguntke, Th. (eds) (2004). *How Political Parties Respond. Interest aggregation revised*. Routledge.
- LeDuc, L., Niemi, R. G. and Norris, P. (eds) (1996). *Comparative Democracies. Elections and Voting in Global Perspective*. Sage.
- Lepsius, M. R. (1993). *Demokratie in Deutschland*. Vandenhoeck & Ruprecht.
- Lichbach, M. I. and Zuckerman, A. S. (eds) (1997). *Comparative Politics. Rationality, Culture, and Structure*. Cambridge University Press.
- Lijphart, A. (1984). *Democracies : patterns of majoritarian and consensus government in twenty-one countries*. Yale University Press.
- Lipset, S. M. (1959). Political Man. Heinemann (内山秀夫訳『政治のなかの人間 ポリティカル・マン』東京創元社、一九六三年)。
- Lipset, S. M. and Rokkan, S. (1967). *Party Systems and voter Alignments*. Free Press.
- Lipset, S. M. and Rokkan, S. (1967). Cleavage structure, party systems and voter alignment : an introduction, Lipset and Rokkan (eds).
- Lipset, S. M. and Marks, G. (2000). *It didn't Here : Why Socialism Failed in the United States*. W. W. Norton.
- Lorwin, V. R. (1966). Belgium: Religion, Class, and Language in National politics. Dahl (ed).
- Lorwin, V. R. (1968). Historians and Other Social Scientists: The Comparative Analysis of Nation-Building in Western Societies. Rokkan (ed)
- Lorwin, V. R. (1971). Segmented Pluralism: Ideological Cleavages and Political Cohesion in the Smaller European Democracies. *Comparative Politics*. 3.
- Liebbert, G. (1991). *Liberalism. Fascism or Social Democracy: Social Classes and the Political Origins of Regimes in Interwar Europe*. Oxford University Press.
- Mack, Ch. S. (2010). *When Political Parties die. A Cross-National Analysis of Disalignment and Realignment*. Praeger.
- Mackie, T. (1995). Parties and Elections. Hayward and Page (eds).
- Mackie, T., Franklin, M. (1987). social structure and party alignment. Bgdanor (ed).
- Madeley, J. T. S. and Enyedi, Z. (eds) (2003). *Church and State in Contemporary Europe. The Chimera of Neutrality.*.

- Magone, J. M. (2001). *Contemporary European Politics. A Comparative Introduction*, Routledge.
- Mair, P. (1989). The Problem of party system change. *Journal of Theoretical Politics*, 1.
- Mair, P. (ed) (1990). *The West European Party System*. Oxford University Press.
- Mair, P. (1992). Adaption and control: towards an understanding of party and party system change. Daalder and Mair (eds).
- Mair, P. (1993). Myths of electoral change and the survival of traditional parties. *European Journal of Political Research*, vol. 24 (十倉亮爾・古田雅雄訳。「選挙変化の神話と伝統的諸政党の存続——一九九二年スウェーデン・ロッセカン記念講演」『法学論集（関西大学）』第四十六巻第三十二号、一九九六年）。
- Mair, P. (1996). Party System and Structures of Competition. Leduc, Niemi and Norris (eds).
- Mair, P. (2001). The freezing hypothesis : An evaluation. Karvonen and Kuhle (eds.), Routledge.
- Mair, P. (2002a). Explaining the absence of class politics in Ireland. Goldthorpe and Whelan (eds).
- Mair, P. (2002b). In the Aggregate: Mass Electoral Behaviour in Western Europe, 1950-2000. Keman (ed).
- Mair, P. (2006). Cleavage, Katz and Crotty (eds).
- Mair, P. (2006). Party system change. Katz and Crotty (eds).
- Mair, P. (2009). The Challenge to Party Government. Goetz, Mair and Smith (eds).
- Mair, P. (2013). *Ruling the Void. The Hollowing of Western Democracy*. Verso.
- Mair, P. and Smith, G. (1989). *Understanding Party System Change in Western Europe*. Frank Cass.
- Mair, P., Müller, W. C., Passer, F. (Hg.) (1999). *Parteien auf komplexen Wählermärkten. Reaktionsstrategien politischer Parteien in Westeuropa*. ZAP.
- Madeley, J. T. S. (2003). European Liberal Democracy and the Principle of State Religious Neutrality. Madeley and Enyedi (eds).
- Madeley, J. T. S. (2003). A Framework for the Comparative Analysis of Church-State Relations in Europe. Madeley and Enyedi (eds).
- Madeley, J. T. S. and Enyedi, Z. (eds) (2003). *Church and State in Contemporary Europe. The Chimera of Neutrality*. Routledge.
- Manow and Kersbergen (2009). Religion and the Western Welfare State — The Theoretical Context, Kersbergen, Manow (eds).

- Martin, J. L. (2009). *Social Structures*. Princeton University Press.
- McAllister, I. (1981). Party organization and minority nationalism : A comparative study in the United Kingdom, *European Journal of political Research*, 9.
- McLean, I., cleavage, McLean, I. (1996). *Oxford Concise Dictionary of Politics*. Oxford University Press.
- Merkel, P. H. and Weinberg, L (eds.) (2003), *Right-Wing Extremism in the Twenty-First Century*. Case.
- Mielke, G. (2001), Gesellschaftliche Konflikte und ihre Repräsentation im deutschen Parteiensystem. Anmerkungen zum Cleavage-Modell von Lipset und Rokkan. Eith · Mielke (Hrsg.).
- Minkenberg, M. (2009). Religion and Euroscepticism : Cleavages, Religious Parties and Churches in EU Member States, *West European Politics*, Vol.32, No.6.
- Minzel, A. (1984). *Die Volkspartei Typus und Wirklichkeit*. Westdeutscher Verlag.
- Moreno, A. (1999). *Political Cleavages. Issues, Parties, and the Consolidation of Democracy*. Westview Press.
- Morgan, K. J. (2009). The Religious Foundations of Work-Family Politics in Western Europe. Kersbergen, Manow (eds.).
- Mudd, C. (2007). *Populist Radical Parties in Europe*. Cambridge University Press.
- Müller-Jentsch, W. (2007). Strukturwandel der industriellen Beziehungen. Industrial Citizenship' zwischen Markt und Regulierung. VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Müller-Rommel, F. and Poguntke, Th. (eds) (2002), *Green PARTIES in National Governments*. Cass.
- Mueller-Rommel, F. And Poguntke, Th., 'The Lifespan and the Political Performance of Green Parties in Western Europe. Mueller-Rommel and Poguntke (eds.).
- Narr, W. D. (1977). Auf dem Weg zum Einparteiensstaat. Westdeutscher Verlag.
- Neugebauer, G. (2007). *Politische Milieus in Deutschland*. Diez.
- Newton, K., Deth, J.W. (2010). *Foundation of Comparative Politics*.
- Nie, N.H., Verba, S., Petrock, J.R. (1976). *The Changing American Voter*. Cambridge University Press.
- Norris, P. (1997). *Electoral Change since 1945*. Blackwell.

- Norris, P. (ed) (1999), *Critical Citizens : Global Support for Democratic Governance*, Oxford University Press.
- Norris, P. (2005), *Radical Right. Voters and Parties in the Electoral Market*, Cambridge University Press.
- Oskarson, M. (2005), Social Structure and Party Choice, Thomssen (ed).
- Outhwaite, W. (2008), *European Society*, Polity.
- Page, E. D. (1995), Patterns and Diversity in European State Development, Hayward and Page (eds.).
- Page, E. D. (1995), Patterns and Diversity in European State Development, Hayward and Page (ed).
- Parker, J. (2000), *STRUCTURATION*, Open University Press.
- Panbianco, A. (1988), Political Parties, Organization and Power, Cambridge University Press (村上信一郎訳『政党—組織と権力—』ワイルダー書房 二〇〇五年)。
- Pappi, F. U. (1972), *Sozialstruktur und politische Konflikte in der Bundesrepublik. Individual-Contextanalysen der Wahlentscheidung*, Habilitationsschrift eingerichtet der Hohen Wirtschaftl- und Sozialwissenschaftlichen Fakultät der Universitaet zu Köln.
- Pedersen, M. (1979), The Dynamics of European Party Systems : Changing Patterns of Electoral Volatility, *European Journal of Political Research*, 7 (1).
- Pelinka, A. (2005), *Vergleich politischer Systeme*, UTB.
- Pizzorno, A. (1981), Interests and parties in pluralism, Berger, S. (ed), *Organizing Interests in Western Europe: Pluralism, Corporatism, and the Transformation of Politics*, Cambridge University Press.
- Poguntke, Th. (2004), Do parties respond? Challenging to political parties and their consequences, Lawson and Poguntke (eds).
- Rae, D. W. and Taylor, M. (1970), *The Analysis of Political Cleavages*, Yale University Press.
- Rasche, H. und Kaste, H. (1977), Zur Politik der Volkspartei, Narr (Hrsg).
- Reckwitz, A. (1997), Struktur. Zur sozialwissenschaftlichen Analyse von Regeln und Regelmäßigkeiten, Westdeutscher Verlag.
- Robertson, D. (1993), *The Penguin Dictionary of Politics*, 2nd . ed., MacMillan.
- Rokkan, S. (1965), Zur entwicklungssoziologischen Analyse von Parteiensystemen : Anmerkungen fuer ein hypothetische Modell,

- Fijikowski, J. (Herg). *Politologie und Soziologie. Otto Stammer zum 65. Geburtstag*. Westdeutscher Verlag.
- Rokkan, S. (1970). *Citizens, Elections, Parties*. Universitetsforlaget.
- Rokkan, S. (1972). *Vergleichende Sozialwissenschaft. Die Entwicklung der inter-kulturellen, inter-gesellschaftlichen und internationalen Forschung*. Ullstein Buch.
- Rokkan, S. (1975). Dimensions of state formation and nation building : A possible paradigm for research on variations within Europe. Tilly (ed).
- Rokkan, S. (1977). Toward a Generalized Concept of *Verzuiling*. *Political Studies*, 15.
- Rokkan, S. (1980). Eine Familie von Modellen für die vergleichende Geschichte Europa. *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 9, Heft 2, April (古田雅雄訳「ヨーロッパ比較体系モデル」『六甲台論集』第三八巻第一号、一九九三年)。
- Rokkan, S. (1999). *State Formation, Nation-Building, and Mass Politics in Europe* : The Theory of Stein Rokkan (edited by Flora, P., Kuhnle, S. and Urwin, D.). Oxford University Press.
- Rokkan, S. and Campbell, A. (1960). Citizen Participation in Political Life : Norway and the United States of America. *International Social Science Journal*, 12(1).
- Rose, R. (ed.) (1974). *Comparative Electoral Behavior*. Free Press.
- Rose, R. (1987). social structure and party alignment, Boganor (ed.).
- Rose, R. (1996). *What Is Europe? A Dynamic Perspective*. Harper Collins College Publishers.
- Rose, R. and Urwin, D. W. (1969). Social cohesion, political parties and strains in regimes. *Comparative Political Studies*, 2.
- Rose, R. and Urwin, D. W. (1970). Persistence and change in Western party system since 1945. *Political Studies*, 18.
- Rose, R. and McAllister, I. (1986). *Voter Begins to Choose : from closed class to open elections*. Sage.
- Rose, R. and Mackie, T. T. (1987). Do parties persist or disappear? Lawson and Merkl (eds.).
- Becher, P. (013). *Rechtspopulismus*. Papy Rossa
- Rudolph, J. (2006). *Politics and Ethnicity: A Comparative Study*. Palgrave.
- Rydgren, J. (ed.) (2005). *Movements of Exclusion. Radical Right-Wing Populism in the Western World*. Nova.

- Sartori, G. (1976). *Parties and Party Systems: A Framework for Analysis*. Cambridge : Cambridge University Press (岡沢・川野 訳『現代政党学』早稲田出版部 二〇〇九年)。
- Sartori, G. (1990). The sociology of parties : A critical review. Mair, P. (ed)
- Sartori, G. (1994). *Comparative Constitutional Engineering : An Inquiry Into Structures, Incentives and Outcomes*. Macmillan (岡沢憲美・工藤裕子訳『比較政治学—構造・動機・結果』早稲田大学出版部 二〇〇〇年)。
- Sasson, D. (1996). *One Hundred Years of Socialism. The West European Left in the Twentieth Century*. I.B.Tauris.
- Sassoon, D. (ed) (1997). *Looking Left : Socialism in Europe After the Cold War*. New Press.
- Scarbrough, E. Materialist—Postmaterialist Value Orientations. Deth and Scarbrough (eds).
- Scarrow, S. E. (2006). The nineteenth-century origins of modern political parties : The unwanted emergence of party-based politics. Katz and Crotty (eds).
- Schattschneider, E. E. (1960). *The Semisovereign People : A Realist's View of Democracy in America*. Holt, Rinehart and Winston (内山秀夫訳『半主権人民』而立書房 一九七二年)。
- Schmitter, P.C. (2001). Parties are not what they once were. Diamond and Gunther (eds).
- Seiler, D.-L. (2015). The Legacy of Stein Rokkan for European politics : a short tribute. Magone (ed).
- Siavelis, P. M. (2006). Party and social structure. Katz and Crotty (eds).
- Smith, G. (1979). Western European party systems: on the trail of a typology. *West European Politics*, 2.
- Smith, G. (1989a). A system perspective on party system change. *Journal of Theoretical Politics*, 1.
- Smith, G. (1989b). Core perspective: change and the 'People's Party'. Mair and Smith (eds).
- Smith, G. (1989). *Politics in Western Europe*, 5th ed.
- Smith, G. (1990). Stages of European Development : Electoral Change and System Adaptation. Urwin and Paterson (eds).
- Steiner, J. (1974). *Amicable Agreement versus Majority Rule. Conflict Resolution in Switzerland*. The University of North Carolina Press.
- Steiner, J. (1998). *European Democracies*, 4th ed., Longman.

- Sundquist, J. (1973), *Dynamics of the Party Behavior*, Washington DC.
- Taylor - Gooby, P. (1986), Consumption Cleavage and Welfare Politics, *Political Studies*, XXXIV.
- Thomassen, J. (ed) (2005), *The European Voter. A Comparative Study of Modern Democracies*, Oxford University Press.
- Tilly Ch.(ed) (1975), *The Formation of National States in Western Europe*, Princeton University Press.
- Urwinn, D. W. (1980), *From Ploughshare to Ballotbox: the Politics of Agrarian Defense in Europe*, Universitetsforlaget.
- Urwinn, D. W. and Paterson, W. E. (eds) (1990), *Politics in Western Europe — today — . Perspectives, Politics & Problems since 1980*, Longman.
- Ware, A. (1987), *Citizens, Parties and the State: A Reappraisal*, Polity.
- Ware, A. (1996), *Political Parties and Party Systems*, Oxford University Press.
- Warner, C. M. (2000), *Confessions of an Interest Group. The Catholic Church and Political Parties in Europe*, Princeton University Press.
- Wattenberg, M. P. (2000), The Consequences of Partisan Dealignment, Dalton and Wattenberg (eds).
- Wattenberg, M. P. (2000), The Decline of Party Mobilization, Dalton and Wattenberg (eds).
- Welch, S. (2013), *The Theory of Political Culture*, Oxford University Press.
- Weakliem, D. (2001), Social class and class voting : The case against decline, Clark and Lipset (eds).
- Wiesendahl, E. (2006), *Parteien*, Fischer Kompakt.
- Wolff, S. and Yakinthou, Ch.(eds) (2003), *Conflict Management in Divided Societies. Theories and Practice*, Routledge.
- Wolinetz, S. B. (1979), The Transformation of Western Europe Party Systems revised, *West European Politics*, 2.
- Wolinetz, S. B. (1988), *Parties and Party Systems in Liberal Democracies*, Blackwell.
- Wolinetz, S. B. (2002), Beyond the Catch-All Party : Approaches to the Study of Parties and Party Organization in Compenorary Democracies, Gunther, Montero and Linz (eds).
- Wolinetz, S. B. (2015), European political parties : changing forms, increased vulnerability, Mangone (ed).
- Woodward, A.E., Gender and European politics, Magone (ed).

Zuckerman, A. S. (1975), *Political Cleavage: A Conceptual and Theoretical Analysis*, *British Journal of Political Science*, 5.
 Zuckerman, A. S. (1982), *New approaches to political cleavage: a theoretical introduction*, *Comparative Political Studies*, 15.

邦語参考文献

岩崎正洋（一九九八年）「政党組織の諸形態——カルテル政党モデルへの系譜——」青木一能・野口忠彦・岩崎正洋編『比較政治学の視座』新評論

カリーゼ、A.（二〇一二年）村上信一郎訳『政党支配の終焉 カリスマなき指導者の時代』法政大学出版局

ギデنز、A.（二〇一五年）門田健一訳『社会の構成』勁草書房

古野屋正伍（一九五八年）『社会構造』『社会学事典』有斐閣

阪野智一（二〇〇一年）「イギリスにおける政党組織の変容——党組織改革と人民投票的政党化への動き——」『国際文化研究』第一〇号

サルトリ、G.（一九八〇年）岡沢憲葵・川野秀之訳『現代政党学』早稲田大学出版部

篠原 一（一九九六年）『ヨーロッパの政治』『歴史政治学試論』東京大学出版会

篠原 一（二〇〇七年）『歴史政治学とS・ロッキン』同『歴史政治学とデモクラシー』岩波書店

シャルロ、J.（一九七六年）野地孝一訳『保守支配の構造——ゴリスム 一九五八—一九七四——』みすず書房

ダウンス、A.（一九八〇年）、古田精司訳『民主主義の経済理論』成文堂

ダーレンドルフ、R.（一九九八年）、加藤秀治郎編監訳『ラルフ・ダーレンドルフ 政治・社会論集 重要論文選』見洋書房

デベルジェ、M.（一九七〇年）、岡野加穂留訳『政党社会学——現代政党の組織と活動』潮出版

土倉莞爾（二〇一三年）『拒絶の投票 二一世紀フランス選挙政治の光景』関西大学出版部

西川知一（一九七四年）『ヨーロッパ現代政治史』見洋書房

西川知一（一九七七年）『近代政治史とカトリシズム』有斐閣

間 寧（二〇〇六年）『亀裂構造と政党制——概念整理と新興民主主義国への適用——』『アジア経済』XLVII・5

パーキン、F.（一九八九年）、橋本 満訳『社会階層論』アカデミア出版会

パーソンズ、T. (一九七一年)、矢沢修二郎訳『社会類型—深化と比較』至誠堂

ブラウ、P. M. (一九八二年)、斎藤正二監訳『社会構造へのアプローチ』八千代出版

古田雅雄 (一九八二年)『『包括政党』をめぐる諸論議について (二)』『六甲台論集』第三四卷第一号

古田雅雄 (一九八八年)『S・ロッキンと政党制—『国民統合』から政党制へ—』『六甲台』第三五卷第一号

古田雅雄 (一九九七年)『ヨーロッパ比較体系史モデル—S・ロッキンの国民国家形成論—』『ヨーロッパ研究センター報 (南山大学)』第三号

古田雅雄 (一九九八年)『選挙変動とシステムの適応—西ヨーロッパ諸国の政党支持構造の変化—』『人間科学研究 (大阪電気通信大学)』第一号

古田雅雄 (一九九二年)『西欧—国民国家の発展とシステムの変容—』加藤普章編著『入門現代地域研究』昭和堂

古田雅雄 (二〇〇〇年)『西欧—政治システムとしての国民国家とその変容—』加藤普章編著『新版 エリア・スタディ入門—地域研究の学び方—』昭和堂

古田雅雄 (二〇〇四年)『ドイツにおける政争組織の変容—「断片的にルースに一つにまとまったアナーキー」型政党の解説を中心に—』『大阪電気通信大学人間科学研究』

古田雅雄 (二〇〇八年)『西ヨーロッパ国民国家形成論—S・ロッキン・モデルを参考に—』『奈良法学会雑誌』第二二卷第一・二号

古田雅雄 (二〇一一年)『政治文化論—政治的価値意識をめぐるマクロ・メゾ・ミクロの各次元の研究—』『奈良法学会雑誌』第二三卷

古田雅雄 (二〇一二年)『ドイツにおける政党組織の変遷について—「包括政党」論からの政党組織をめぐる諸議論の整理—』『奈良法学会雑誌』第二四卷

古田雅雄 (二〇一五年)『S・ロッキンの比較マクロ政治の研究—交差文化、交差社会、交差国家の理論への貢献について—』『奈良法学会雑誌』第二七卷、二〇一五年

古田雅雄 (二〇一六年)『文化、エスニシティ、そして多文化主義—多文化共生社会への検討—』『奈良学園大学紀要』第四集
三宅一郎編著 (一九八一年)『合理的選択の政治学』ミネルヴァ書房